魔法少女リリカルなのは～運命を変えし転生者～

ロキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～運命を変えし転生者～

【Ｎコード】
Ｎ４１２２Ｘ

【作者名】
ロキ

【あらすじ】

ある一人の青年が自分の命と引き換えに一人の少女の命を救った。偶然現世を観察していた女神は人一人の運命を変えた青年の行為に感心し、青年に第二の人生を生きるチャンスを与えた。青年は女神から力と二人のパートナーを得て新たな世界を生きることになった。転生した世界は魔法少女の世界だった。その世界の原作を知る青年は女神からもらった力を使い二人のパートナーと共に少女たちを悲しみの運命から救うことを決意する。

魔法少女リリカルなのは～運命を変えし転生者～　始まります。

プロローグ（前書き）

初めましてロキです。これまでたくさんの二次小説を見て僕も書きたくなり今回初投稿しました。
何分小説初心者ですので駄文になるかもしれませんが僕なりに精一杯やっていこうと思います。
もし興味のわいた方は読んでみてください。楽しんでいただけるようがんばります。
ではどうぞ。

プロローグ

「ふぁ～あああ」

よく晴れた空、それはもう晴れすぎではないかというぐらいに青く澄み渡った快晴の休日、俺はあくびをしながらあてどなく街を歩いていた。

せっかくの休日に家の中でごろごろしているのももったいないと思い外に出てきたのはいいが特に行きたいところがあるわけでもなくぶらぶらしているのも結構暇なものだ。

「さぁ～てどうするかなぁ。映画でも見に行こうかな。今ってなんかおもしろい映画とかやってたかな？」

俺は映画館のほうに向かって歩き出したが、そこでふと足を止めた。

「ん？」

視界の端に転がったボールを追いかける女の子が見えた。女の子はようやく止まったボールを拾い上げた。しかしそこに車が走ってきた。

「んなっ！？」

俺は目を見開いた。

「くそっ！！」

気がついた時には女の子のほうに走っていた。このときは自分でも驚くぐらいのスピードが出ていたと思う。

「うおおおおお！！！」

俺は勢いを殺さずにそのまま女の子を抱きかかえた。それと同時に背中に凄まじい衝撃が襲いかかり俺は女の子を抱いたまま衝撃に従って道路を三、四回ほど転がった。ようやく止まると全身にとてつもない激痛がはしった。そんな激痛のなか俺は腕の中の女の子を見た。どうやら怪我らしい怪我はしていないようだ。

（ああ・・・大丈・・・夫・・そうだ。よか・・・った）

そう思ったのを最後に俺の意識は闇に落ちた。

プロローグ（後書き）

と、まあこんな感じです。いかがでしたでしょうか？
この三連休は投稿できると思います。それではまたお会いしましょう。

第一話　女神との邂逅（前書き）

遅くなってしまい大変申し訳ありません。

このような作者ですがどうか最後までお付き合いをお願いします。

それでは第一話始まります。

第一話　女神との邂逅

Ｓｉｄｅ???

俺はいったい、どうなったのだろう?

わからない。なにも思い出せない。

ここはいったいどこなのだろう?なんだかすごく心地良い感じがする。まるで宙にふわふわと浮いているようなそんな感じが。

ああ、できるならずっとこうしていたい。なにも考えずにこの心地良さに甘えていたい。

「・・・・て」

ん?いま何か聞こえたような・・・?

気のせいか?

「・・・・・ねぇ・・・きて」

あ、また聞こえた。どうやら気のせいじゃないみたいだ。

「ねぇ・・・・おきて」

誰かが俺を呼んでる?でも誰が?

「ねぇ、おきてったら～」

あ、今度ははっきりときこえる。誰だろう?すごくきれいな声だけど。

「ねぇ〜、ちょっと〜、きこえてる〜?」

ああ、やっぱりすごくきれいな声だな。こんな声に呼ばれるのもなんだかわるくないな〜。

「お〜い、もしも〜し?」

いったい誰が呼んでいるのだろう?俺はうっすらと目を開けようとしたとき。

「もうっ、いい加減におきなさーーーーい!!!」

「おうわあああっ!!?」

いきなり耳のすぐ近くで叫ばれて俺は飛び起きてしまった。

「なっ、なんだ!?だれだ!?」

俺は慌ててあたりを見回した。

「あ〜、やっとおきた〜。も〜う、君いくらなんでも寝過ぎだよ?」

俺は声のするほうを向くとおもわず目を見開いた。

「でも、すごく気持ちよさそうな顔して寝てたね〜。フフフ。とりあえず、おはようかな?」

そこにはかるいウェーブのかかった長い金色の髪にサファイアのように透き通った青い瞳をして神話なんかに出てくる神様なんかが着るような白い服を着て背中に大きな鳥のような純白の翼を生やしたとても綺麗な女の人がいたからだ。

「あ、あの・・・あなたはいったい・・・・？」

俺はその女性に面食らいながらもなんとか質問をした。するとその女性はキョトンとした顔をした。

「？・・・・あっ、そっかそっかまだ自己紹介してなかったね。ごめんごめん」

苦笑しながら謝る女性。

「えーっと、それであなたは？」

俺はもう一度質問をする。

「んんっ。それじゃあまずは自己紹介を。初めまして勇気ある人間君。私の名前はルティア、女神ルティアよ。よろしくね♪」

彼女は輝くばかりの笑顔でそう言った。

第一話　女神との邂逅（後書き）

かなりの間が空いてしまい申し訳ありません。

当分はもしかしたらこんな感じでやっていくことになるかもしれません。

このような駄目作者で恥じ入るばかりですが、自分なりに精一杯頑張っていこうと思うのでよろしくお願いします。

第二話　とりあえず現状確認（前書き）

ロキです。休日なので連日投稿してみようと思って書きました。

女神と出会った主人公。はたして彼の運命はどこへ向かうのか？

それでは第二話始まります。

第二話　とりあえず現状確認

Ｓｉｄｅ？？？

「・・・・・・は？」

俺はそんな間の抜けた声を出してしまった。しかしそれも無理はないと思う。俺の耳がおかしくなければ、今この女性は自分を女神だといった。普通に考えればこの女性には今すぐ精神科に行くことをお勧めするのだが、彼女の恰好や何より背中の羽は幻覚でもない限り間違いなく彼女の背中から生えているように見える。つまりこの人？は本当に・・・・

「ええ、本当に、正真正銘、間違いなく、本物の女神よ」

って、え！？今俺が何を考えてるのか読まれた！？

「そりゃ読めるわよ。だって女神だし」

また読まれた！？

「じ、じゃああなたは本当に・・・・・・・・女神さま？」

「だから、そう言ってるでしょう。この背中の翼が見えないの？」

そう言って彼女は背中の翼を指差した。

「ああ、はい。大丈夫です。見えてます」

俺はとりあずそう言っておく。

「うん。よろしい」

彼女は満足げに頷く。

「あの～、ところで・・・・・」

俺は体を起こした状態のまま目の前に立つ女性を見上げた。

「うん？」

「あなたが女神様というのは、まあ百歩譲って認めます。で、それはいいとして此処はいったいどこなんですか？どうして俺はこんなところにいるんですか？」

俺はまずいちばん気になっていることを聞いてみた。

「う～ん、まあちゃんと説明するけど、そのまえにい聞いてもいい？」

「はい？」

「きみ、自分がどうなったのか憶えてない？」

「え？」

俺は女神（たしかルティアという名前だった）ルティアさんの質問を聞いて言葉に詰まった。

（俺がどうなったか？あれそういえば俺はなにか忘れているような。なんだ？俺はなにを忘れているんだ？）

俺は頭を抱えて必死に記憶を甦らせようとした。すると俺の脳裏にズキッという痛みとともに一つのヴィジョンが浮かんだ。自分の腕に抱かれる小さな少女、自分と少女に迫りくる車、それらを思い出した俺は

（ああ・・・・・そうか。俺は・・・・・・・・）

「俺は・・・・・・死んだんですね？」

つぶやくようにそう言う。

「・・・・・・ええ。そうよ」

ルティアさんは複雑そうな表情で答えた。

「そうですか。・・・・・あのルティアさん？」

「ん？・・・なに？」

「あの子は・・・・俺がかばった女の子はどうなりましたか？」

俺がそう聞くとルティアさんは少し驚いたような表情のあと笑顔で答えた。

「大丈夫。あの子は無事よ。あなたのおかげでかすり傷ひとつないわ」

「そうですか。・・・・・・・よかった」

俺は心底から安心する。そっか・・・・あの子は無事か・・・・。

「あなたは・・・・・・・変わった人間ね」

ふとルティアさんが言ってきた。

「え？」

「だって、自分が死んだことよりも他人の心配をするんだもの」

ルティアさんの言葉に俺は苦笑する。

「ああ・・・まあ、そうですね。でも俺の命ひとつで誰かの命を護れたなら俺はそれで満足です。・・・・・ま、自己満足ですけどね・・・・・・・」

俺の言葉を聞いたルティアさんは

「・・・・・・・・あなたは」

「？」

「・・・・・・・・・良い人間なのね」

優しい笑顔でそう言った。

「／／／／／／！！？」

その言葉に俺は自分の頬が熱くなるのを感じた。自分の赤面した顔を見せたくなくて顔をそらす。こういうことを面と向かって言われるのはやはり恥ずかしいものである。

「うん。よし決めたわ！！」

ルティアさんは突然嬉しそうにいった。

「へ？」

俺はいきなりのルティアさんの声に驚いた。するとルティアさんは俺に満面の笑顔で言ってきた。

「ねえ、あなた・・・・・転生って興味ない？」

第二話　とりあえず現状確認（後書き）

今日はとりあえずここまでとします。

次回は主人公が女神から力を渡されます。楽しみにしていてください。

ではまた次回お会いしましょう。

最後に感想を送ってくれた魁斗さん。ありがとうございました。お互いに頑張っていきましょう。他のみなさまもこれからできればどうか応援してください。感想などがあったらどんどん送ってきてください。いつでも大歓迎です。それではまた。

第三話　俺の性分（前書き）

こんにちはロキです。つい調子にのってまたも連続投稿してしまいました。

少し調子にのりすぎという気もしますが。

まあ、暖かい目で見てやってください。

では第三話始まります。

第三話　俺の性分

Ｓｉｄｅ???

「・・・・・え?転生・・・・ですか?」

俺はルティアさんの唐突な質問に戸惑ってしまう。それはそうだろう。いきなり転生といわれてもどうこたえればいいのやら。

「あの～・・・ルティアさん」

「ん?」

「転生って、あの転生ですか?前世の記憶をもったまま生まれ変わるっていう」

俺はそんな質問をルティアさんにしてみた。

「ええ、そうよ。その転生」

ルティアさんは変わらず笑顔で答えた。

「でも、どうして俺を?」

俺が聞くとルティアさんは俺と目線を合わせるように座った。

「ん～、まあぶっちゃけると私があなたのこと気に入っちゃったっていうのが主な理由なのよ」

「ルティアさんが俺を気に入った？」

鸚鵡返しに言う。

「そう。だってあなた今時の人間しては珍しいんだもの。今の時代に自分の身を投げ打ってでも他人を助けようとする人なんて中々いないわよ」

「ああ、まあそうかもしれませんね。でもこれが俺の性分ってやつなんです」

そう俺は物心ついたときからこんな感じだった。目の前で誰かが泣いていればどうしても見過ごすことができなかった。迷子の子供を見かけたら一緒に親を探してあげたり、不良に絡まれてる人を見たらすぐさま助けに入ったり、本当になんど酷い目にあってもこの性格は直らなかった。でもそれでもいいかと思う自分もいた。やっぱり俺は人の泣いてる顔よりも笑ってる顔のほうが好きだから。

「・・・・そう」

ルティアさんがまた優しい表情で見つめてくる。あれ？もしかしてまた心を読まれた？うわ～恥ずかしい～

「んんっ、そ、それで転生の話ですけど」

俺は軽く咳払いをして話をもとに戻そうとした。

「ああ、そうだったわね。で、どうする？」

「そりゃあ、確かにちょっと興味はありますけど」

確かに第二の人生を与えてくれるというのなら是非ともお願いしたいところだ。

「ちなみに行き先の世界はこっちで決めることになるからね」

「え？俺に選択権なしですか？」

「ええ。こればっかりは決まっていることだから。ごめんなさいね」

とルティアさんは申し訳なさそうな顔をする。そんな顔をされては文句も出ない。

「わかりました。で、どうやって決めるんですか？」

「ああ、それはね、これを使うの」

そう言うとルティアさんはどこからか丸い穴の開いた四角い箱を取り出した。

「あの、それは？」

俺は箱を指して聞いた。

「この箱の中には色々な並行世界の紙が入っているの」

「並行世界って、パラレルワールドのことですか？」

「そうよ。ただ普通の世界とも違う・・・例えばそうねあなたの世界にあるマンガやアニメに酷似した世界とかね」

「へぇ～、すごいですね」

俺は率直な感想を口にした。

「それじゃあ、さっそく決めちゃいましょうか？」

「あ、はい。お願いします」

俺が答えるとルティアさんは手を箱の中に入れた。俺はどんな世界になるのだろうと内心ワクワクしていた。それはそうだろう俺の世界にあるマンガやアニメの世界に行けると言われてワクワクするなというほうが無理がある。自慢ではないが俺はこれでも生前かなりのマンガやアニメを見ていたのでその方面の知識にはけっこう自信があったりする。

「んーっと・・・・・・それっ」

ルティアさんは箱から一枚の紙切れを取り出して見た。

「えーっと、なになに、ふんふん、なるほど。あなたの転生先が決まったわよ」

「どこですか？」

俺が聞くとルティアさんはにっこりと笑って

「あなたの転生先は・・・リリカルなのはの世界よ」

そう答えた。

第三話　俺の性分（後書き）

申し訳ありません。力を与えられるところまで書きたかったのですが、書いているうちにこうなってしまいました。中々上手くいかないものですね。次回こそは主人公の能力が決まります。お楽しみに。

感想、意見等お待ちしております。ではまた次回。

第四話　与えられし力　そして旅立ち（前書き）

・・・・なんというかその・・・・・・やっぱり調子に乗りすぎですよね、これ。でもどうしても、書きたいって衝動が抑えられなくて書いちゃいました。

一日のうちに三話連続って・・・まあ、他にもやってる人はやってますよね？

転生先も決まりいよいよ主人公が力を渡されます。

それでは第四話始まります。

第四話　与えられし力　そして旅立ち

Ｓｉｄｅ???

「リリカルなのはの世界って・・・・マジですか?」

俺はおもわず聞いてしまった。

「ええ、マジよ。あら、もしかしてこの作品知ってるの?」

「あーはい。ていうか俺の好きなアニメの上位ランクに入ってるし」

そう。何を隠そう魔法少女リリカルなのはシリーズは俺が生前嵌っていたアニメのひとつなのである。まさかその世界にいけるなんて。ああ、やばい興奮しすぎて心臓がバクバクしてる。

「へえ～、そうだったんだ。運がいいわねあなた」

死んでしまったこの状況で運がいいと言われてもなんか複雑である。

「それじゃあ次に、あなたに力をあげなきゃ」

「へ?力?なんの?」

「もちろん、その世界で生きていくための力よ」

ルティアさんの言葉に俺ははっとする。これはもしかしたら・・・。

「それでどんな力が『あの、ルティアさん』・・？なに？」

俺はルティアさんの言葉を遮り聞きたいことを聞く。

「その世界で原作を変えることってできますか？」

これが俺の聞きたいことだった。初めてリリカルなのはの作品を見たときからずっと思っていたことだった。もし俺に力があってこの世界に行けたなら彼女たちの悲しい運命を変えたいと。なのはは幼少時代に孤独を味わいそれが原因で無茶をして堕ち、一度は魔導師を断念しかけた。フェイトは大切な母親と分かり合えぬまま母と姉を失うこととなり、はやては共に生きられるはずだったリィンフォースと永遠の離別による苦しみを味わった。

たしかにそれを乗り越えていったからこそ彼女たちはあそこまで強くなることができたのだろう。しかし彼女たちのあの小さな肩にあれほどの苦しみを背負わせるというのはどうしても俺には納得ができなかった。あんなものわずか九歳の女の子に背負わせていいものじゃない。救いたいと思った。護りたいと思った。例えそれが偽善でも、エゴでも、自己満足でも、それでもいい。彼女たちが笑顔でいてくれるのなら。

「あなたは、変えたいのね。彼女たちの・・・・運命を」

ルティアさんは真剣な表情で言ってきた。

「・・・・・・はい」

俺はそれに同じく真剣な表情で答える

「やっぱり・・・・・あなたは優しい人なのね」

「そう・・・・なんでしょうか？」

「ええ。それもとびっきりの・・・ね」

その時のルティアさんの笑顔はまさに聖母のように慈愛に満ちていた。

「さっきの質問の答えだけど、大丈夫よ。さっきも言ったけどその世界はアニメの世界そのものってわけじゃなく、そのアニメに限りなく酷似した並行世界だから。だからどんなふうに原作を壊してくれても問題ないわよ。すきなだけ暴れちゃっても」

と今度はルティアさんはいたずらっぽく笑う。

「わかりました。ありがとうございます」

俺はとりあえず安心する。

「で・・・あなたにあげる力なんだけど」

「はい？」

「こんなのはどうかしら？」

ルティアさんは俺に近づいて耳打ちをする。

「こしょこしょ」

「・・・・え!?いいんですかそんなの!?」

俺はルティアさんの提案した能力に驚いてしまう。まあたしかにその能力なら問題なく原作ブレイクもできるだろうが。

「いいのよ。いったでしょあなたのこと気に入ったって♪」

彼女の屈託のない笑顔におもわずこっちまで顔が緩む。

「わかりました。じゃあお言葉に甘えてその力でお願いします」

「ええ!まかせてちょうだい!!」

そういってルティアさんは俺に向かって両手をかざす。するとルティアさんの両手から光が溢れてきてその光は俺の体の中に吸い込まれるように入っていった。

「うん、これでいいわ」

「え、もう終わりですか?」

なんだかずいぶんあっさりしてるな。まあいいけど。

「あ、それからあなたの前の名前はもう使えないから新しい名前が必要よ」

「あたらしい名前ですか?そうですね」

俺はしばらく考えこむ。

「う～ん・・・・・・・・・よし、これにしよう」

「なんて名前にしたの？」

「燎、俺の新しい名前は神薙（かんなぎ）　燎（りょう）だ」

ちょっと中二病くさいかなとは思ったけどまあいいだろう。

「燎・・・良い名前ね」

「あ、ありがとうございます」

笑顔で言われてつい赤面する俺。

「じゃあ、準備もできたことだし、そろそろ行く？」

「ああ、はい。お願いします」

俺は何故か背筋をのばして返事をする。

「ああ、そうそう。最後にもう一つだけ言っておかないと」

「？なんですか？」

「あなたが世界に転生する影響でその世界になにかしらのイレギュラーがおきる可能性があるの」

「イレギュラーですか？それはどんな」

「ごめんなさい。それは私にもわからないの。でもくれぐれも注意してね」

心配そうなルティアさんに俺は笑って言った。

「大丈夫ですよ。俺にはルティアさんからもらった力がありますから」

「燎・・・・」

「それじゃあ、いってきます。色々とありがとうございました」

「クスッ、ええ。いってらっしゃい。あなたみたいな優しい人にあえて嬉しかったわ」

ルティアさんの笑顔に見送られ俺は光に包まれた。

こうして俺の異世界での第二の人生が幕を開けた。

第四話　与えられし力　そして旅立ち（後書き）

ついに転生です。ここまでけっこう長くなってしまい申し訳ありませんでした。

主人公の能力についていいてですが、ネタバレとして主人公紹介のプロフィールにて明かそうと思います。楽しみにしていただいた方々、すみませんでした。

それではまた次回お会いしましょう。

第五話　到着　魔法世界（前書き）

どうもロキです。

少し間が空いてしまいましたが投稿できました。

やはり実際に小説を書いてみるとその難しさがよくわかります。

しかしこれも小説製作の醍醐味というものでしょうか。

では第五話始まります。

第五話　到着　魔法世界

Ｓｉｄｅ燎

暖かい日差しを感じて俺は目を開ける。

「うん・・・ここは？ああ、そうか転生したんだったな」

俺は体を起こして立ち上がった。どうやらここは森の中みたいだが俺はリリカルなのはの世界のどこに転生したんだ。

（ああ、こんなことなら場所を決めておけばよかったな・・・ま、しかたないか）

思わず愚痴をこぼしたが過ぎたことと思って気を取り直すことにした。

「さて、まずはここがどこなのか確認しないとな。・・にしてもなんか視線が低いような・・・！？」

俺は自分の手を見て目を疑った。

「な、なんだ？・・・これ？」

その手はどうみても大人の手ではなく五、六歳ぐらいの子供の手だった。

「どうなってんだ？・・・・ん？」

俺は半ズボンの右のポケットになにか入っているのを感じて手を入れてみた。ちなみに今の俺の服装は俺が前の世界で着ていた半袖のシャツを今の俺のサイズに縮めてジーパンを半ズボンにしたのだ。

「これは・・・紙・・・？」

その紙には綺麗な字が書かれていた。

「ルティアさんからのメッセージ・・・か？」

俺は紙に書かれた字を読んだ。そこにはこう書かれていた。

『燎へ、これを読んでいるということは無事に転生できたということね。何よりだわ。

これを入れたのはあなたに言い忘れたことと私からいくつかサービスがあることを伝えるためです。

まず、いまのあなたの体はちょうど五歳くらいの体になっていること、つぎにあなたを海鳴市から少し離れた森のところにあなたを転生させたこと、それと能力を使って鏡を作って自分の顔を見てください。きっと驚くと思います♪』

顔・・・？顔がどうかしたのだろうか？とりあえず俺は書かれているとおりに能力で鏡を作って自分の顔を映した。

「！？・・・な、なな・・・・」

俺はまたしても自分の目を疑ってしまった。

「なんじゃこりゃあああああああああ！！！？」

絶叫する俺、しかしそれも当然だ。鏡に映った俺の顔はどこからどう見ても俺の前の世界で大人気のライトノベル、灼眼のシャナのシャナの顔になっていたのだから。・・・・髪こんなに伸びてたのか、どうりで頭が重いと・・・・じゃなくて！！

「はっ、ま、まさか・・・・」

バッ！

俺は慌てて自分の股間に手をあててみた。

「はあ～、よ、よかった。ちゃんとある」

俺は安堵のため息を吐いた。確かに男の証しの感触がしたからだ。

性転換の可能性がないことを確認した俺は手紙の続きを読むことにした。

『ちなみにどうしてその姿にしたかというと私があの作品を好きだから♪それに最近じゃそういう女の子みたいな男の子が流行ってるってきいて、ついやっちゃった・・・てへっ☆』

ルティアさん・・・・Ｏｒｚ

というかそんな理由で勝手に他人の外見を変えないでほしい。

気を取り直して続きを読む。

『それで次にサービスの件だけど流石にあなた一人じゃ色々と大変だろうと思ってあなたにパートナーを送っておいたわ。天道宮にいると思うから後で会いに行ってあげて。ちなみに天道宮のほうもサービスだから。修行場にするなりなんなり好きに使って。多分今海鳴市の海上に浮いてると思うわ。行きたいときは【開け、天道宮の扉】で行けるようになってるから。あ、もちろんそれとは別にあなたとパートナーの住む家もちゃんと海鳴市に用意してあるから安心して。あと今の時期は無印が始まる四年くらい前だから今のうちになのはちゃんに会っておいたほうが良いと思うわ。それじゃ第二の人生思う存分楽しんでね♪　女神ルティアより』

ルティアさんいくらなんでもちょっとサービスのしすぎじゃないか。っていうか天道宮ってあれ管理局からみたら完全にロストロギアだよな？・・・大丈夫か？それにパートナーか・・・どんなやつなんだろ？

「まあとにかく、まずは天道宮に行って俺のパートナーとやらに会いに行くとするか」

そういって俺は天道宮に行くためのキーワードを唱えようとする。つーかこれ某妖精の尻尾の星霊魔導師のお嬢様の呪文と同じだよな？俺達の世界のマンガやアニメって神様の世界でも人気があんのかな？

「ま、それはともかく行くか。【開け、天道宮の扉】」

俺がキーワードを唱えると地面に灼眼のシャナの自在式のような紋章が浮かび上がりその紋章から光があふれ俺は一瞬のうちに転移した。

第六話　合流　二人のパートナー（前書き）

どうもロキです。やっと更新できます。小説を書く時間というのはとれそうでとれないものだと、最近思います。

まあ、それはさておき

無事転生した燎。女神ルティアから送られてきた彼のパートナーとは？

彼のデバイスも登場します。

では、第六話始まります。

第六話　合流　二人のパートナー

Ｓｉｄｅ燎

ルティアさんからの手紙を読んで俺はパートナーに会うために天道宮にやってきた。転移が終わったのを感じて目を開けてみるとそこには周り一面を湖に囲まれた古めかしくも荘厳な西洋風の城であった。

「ここが・・・・・天道宮・・・か」

――天道宮：灼眼のシャナに登場する宝具の一つ、その全体を泡のような異界秘匿（クリュプタ）の聖室により覆い隠し、内に在るものの姿と気配を外界より完全に遮断し、自在に空を浮遊する移動城砦。紅世の王、髄の楼閣ガヴィダが建造――

「うわー、実際に見てみると本当にでかいな」

俺は生の天道宮を見ることができ、感動してしまった。

「っと、いまはそれよりも、パートナーを探さないと」

ここに来た本来の目的を思い出し、足を進めようとしたら、俺の目の前にふわっと二つの人影が下りてきた。

「うわ！？」

俺は驚いて一歩後ずさった。

「お待ちしていたのであります」

『会合期待』

その人影の片方から二人分の声が聞こえてきた。・・・あれ？今の声って、この人もしかして・・・

その二つの人影は片方は丈長のワンピースに白いヘッドドレスとエプロンを纏った一見してメイドとわかる装い。肩まで切りそろえた髪に、無表情な端正な顔立ち。

「ほう、お前が私たちのマスターか、男と聞いていたんだが、違ったか？」

と、もう片方の人影の美しい金色の髪にゴスロリような服の上に黒いマントを着た十歳前後の可愛らしい少女が外見に似合わない話し方で聞いてくる。・・・ってこの子は・・・

そう、俺の前に現れたのは、万条の仕手ヴィルヘルミナ・カルメルと真祖の吸血鬼エヴァンジェリン＝Ａ＝Ｋ＝マクダウェルだった。

――万条の仕手ヴィルヘルミナ・カルメル：灼眼のシャナの登場人物。夢幻の冠帯ティアマトーのフレイムヘイズ。何万ものリボンを自在に操り敵を翻弄しながら戦う戦法を得意としており、まるで舞い踊るように戦う様から他のフレイムヘイズや紅世の徒からは〈戦技無双の舞踏姫〉の異名で知られている。シャナの育ての親の一人で弔詞の詠み手マージョリー・ドーとは飲み友達――

――真祖の吸血鬼エヴァンジェリン＝Ａ＝Ｋ＝マクダウェル：魔

法先生ネギま！の登場人物。外見は十歳位の可愛らしい少女だが正体は数百年の年月を生きてきた吸血鬼の真祖である。主人公のネギの父ナギに惚れて自分のものにしようとしたが返り討ちにあい登校地獄の呪いを掛けられ痲帆良学園に強制的に入学させられる。今は呪いのせいで力が弱まっているが、かつては闇の福音（ダークエヴァンジェル）や多くの異名で恐れられた悪の魔法使い。ネギとは最初は敵同士だったが紆余曲折の末ネギを気に入り自分の弟子にする。いまだにナギに惚れている――

どうしてこの二人が・・・？ま、まさか・・・・

「あ、あの、えっと・・・君たちが俺のパートナー・・・なのか？」

一応、俺は二人に聞いて確認をしてみる。

「そのとおりであります」

『正鵠』

「ああ。私たちがお前のパートナーのユニゾンデバイスだ」

「えっ？ユニゾンデバイス！？」

俺はエヴァンジェリンの言葉を聞いて驚いた。この二人がユニゾンデバイスだなんて。

「それ・・・どういうこと？」

「その言葉のとおり、私たちは本人というわけではなく、女神によ

ってヴィルヘルミナやエヴァンジェリンを素に作られたあなたのためのデバイスというわけであります」

「そ、そうなんだ」

にわかには信じ難い話だけど、ルティアさんならやるだろうな・・・と納得している自分もいる。

「それともう一つ、女神からあなたに渡してほしいと頼まれたものがあるのであります」

「え？なに・・・？」

ヴィルヘルミナはエプロンのポケットに手を入れて何かを取り出してその手を俺のほうに向ける。

「これなのであります」

ヴィルヘルミナが出したものは黒い宝石に金の輪を意匠したペンダントと群青色の珠に金の鎖をつけたブレスレット。

これ・・・ペンダントのほうは明らかに神器コキュートスだけど、ブレスレットのほうはわからないな。

「ヴィルヘルミナ・・・って呼んでいいんだよね？このペンダントとブレスレットは？」

「マスターのお好きなように。この二つはマスターの専用デバイスなのであります」

「俺のデバイス？」

「ああ、女神がわざわざお前のために作った特注品だ」

とエヴァンジェリンが答える。

まさか専用デバイスまで作ってくれるとは・・・ルティアさんサービス精神旺盛すぎじゃあ・・・・

「ま、せっかくだし、好意に甘えようか」

俺はヴィルヘルミナからデバイスを受け取る。すると・・・・

『お初にお目に掛かる、そなたが我が主なのだな？」

『ほおー、こりゃまたずいぶんな別嬪さんだな！・・・・ほんとに男か？」

受け取ったデバイスが話しかけてきた。この声、ペンダントのほうはアラストールでブレスレットのほうはマスコシアスか？

「ああ、俺は神薙燎。よろしくな」

『うむ。では主よ、さっそくマスター認証をせぬか？』

『おっ、そうだな。はええとこ済ませちまおうぜ？』

「ああ、そうだな」

二人？の言葉に頷く俺。

「では、我々も」

「そうだな。この際全員一緒に済ませないか？マスター」

全員一緒って・・・まあ、そのほうが手っ取り早くていいか。

「わかった。全員一緒に認証しよう」

エヴァの提案に賛成して俺はペンダントとブレスレットを両手に持ちヴィルヘルミナとエヴァの前に立つ。

俺は魔法陣を展開する。

「マスター認証、神薙燎　デバイス名設定　インテリジェントデバイス　アラストール、マルコシアス　ユニゾンデバイス　ヴィルヘルミナ・カルメル、エヴァンジェリン＝Ａ＝Ｋ＝マクダウェル」

『認証完了　我は今より神薙燎を主と認める。我が紅蓮は主に仇なすすべてを焼き尽くさん』

『認証完了　よろしくな我が爪牙の担い手、神薙燎。我が爪牙はいかなる敵おも引き裂き食らい尽くす』

『認証完了　あなたの道の果てる時まであなたと共に行くことを誓うのであります』

『認証完了　お前を主と認めよう、坊や。お前を害そうとする者は誰であろうとを永久の闇に落としてやろう』

「・・・・ああ、みんな、これからよろしくな！！」

俺は精一杯の笑顔をこれから一緒に戦っていく仲間たちに向けた。

第六話　合流　二人のパートナー（後書き）

どうもロキです。いかがでしたか？

なぜヴィルヘルミナとエヴァにしたのかというと・・・ぶっちゃけ私が好きだからです。

まあ、こんな感じで今後も書いていきます。何卒応援をお願いします。

ではまた次回お会いしましょう。

主人公&デバイス陣　プロフィール（前書き）

というわけでプロフィール作ってみました。

ネタばれも含みますがよかったら見てください。

主人公&デバイス陣　プロフィール

主人公

名前：神薙燎（かんなぎりょう）

性別：男（の娘）

年齢：２０歳→５歳

容姿：灼眼のシャナのシャナ

能力：超越神技（ちょうえつしんぎ）－自分の知っている技や能力を全て使える。例：マンガやアニメの技等、他にも自分で編み出したオリジナルの技、能力も使用可能。

幻想神具（げんそうしんぐ）－頭に思い描いた道具をそのまま作り出すことができる能力。Ｆａｔｅの宝具やネギまのアーティファクト等。オリジナルの武器を創造することも可能。

戦神化（せんしんか）－自分の能力を完全解放する奥の手、身体能力や魔力値なども測定不能となり世界の理から外れた存在となるためどんな魔法や技も無効化されてしまう。ただし一度使うとその反動で二十四時間一切の能力が使えなくなってしまう。ただし身体強化などは可能。

身体能力：ＥＸ

魔力値：ＥＸランク

魔導師ランク：ＳＳＳランク

魔力光：炎と見紛う紅蓮

バリアジャケット：黒いアンダーシャツとズボンの上に夜笠を着た姿

備考：車に引かれそうになった少女を助けた代わりに死んでしまったが、たまたま現世を観察していた女神ルティアにその行為を認められ、リリカルなのはの世界に転生することになった青年。性格は優しく、目の前で困っている人を見るとどうしても放っておけないお人好し。生前はかなりアニメやマンガが好きでリリカルなのはシリーズもよく見ていたため原作には詳しい。よく不良に絡まれていた友人やクラスメートを助けていたため、素手の殴り合いに自信がある。与えられた能力を使いなのはたちを悲劇の運命から救うために奮闘する。戦闘で本気を出すときは炎髪灼眼の打ち手の姿になる。

デバイス陣

・アラストール：インテリジェントデバイス

形状：金の輪が意匠された黒い宝石のペンダント（まんま神器コキュートス）

性格：堅物で生真面目、しかし主である燎をいつも心配している。燎を自分の主として全幅の信頼をおいている。

・マルコシアス：インテリジェントデバイス

形状：群青色の珠に金色の鎖をつけたブレスレット
性格：騒がしく無作法で下品だが仲間思いで情に厚い。燎のことをからかいつつも最高の主だと　　認めている。

・ヴィルヘルミナ・カルメル：ユニゾンデバイス

外見：灼眼のシャナのヴィヘルミナ
性格：無表情で無愛想に見えるが本当は情け深く感情的、礼儀正しく語尾に「～であります」を　　つける畏まった話し方をする。常に燎の傍らに控えており、燎のためならばいかなる危険　　も厭わない。燎の笑顔に魅了されてしまい主従を越えた想いを燎に抱いているが普段は　　鉄面皮で隠している。作られる際ルティアによって少しばかり改良されたため原作のヴィ　　ルヘルミナと違い料理が得意。
能力：原作と同じ数万本のリボンを操って戦う。本気を出すときは専用デバイス、ティアマト―　　を周縁に鬣のようなリボンがはえた狐のような仮面に変化させる。ユニゾン時には燎がテ　　ィアマトーの仮面をつけヴィルヘルミナの能力を使えるようになる。その際燎の髪の色は　　桜色になる。

・エヴァンジェリン＝A＝K＝マクダウェル：ユニゾンデバイス

外見：魔法先生ネギまのエヴァンジェリン
性格：尊大な性格で主である燎に対しても同じように振舞うが、内心では燎を唯一無二の主とし　　て認めている。傍若無人なように見えるが弱者を嬲るような行為は決してせず、涙もろい　　一面もある。ヴィルヘルミナと同じように燎の笑

顔に魅了され惚れてしまう。何とか平静　　を保てるように日々苦労している。吸血能力はあるが衝動はない。

能力：主に原作と同じネギまの氷系と闇系の魔法を使用する。他にも補助程度に幻術なども扱え　　る。補助といってもティアナのそれとは段違いのレベル。ユニゾン時には燎の髪が銀髪に　　なり氷属性と闇属性の魔法の威力が数十倍に上がる。

主人公&デバイス陣　プロフィール（後書き）

これが主人公とデバイス陣の紹介です。いかがでしたか？

自分でも少しチート過ぎかとも思ったのですが、これでなんとかやっていきます。

それではまた次回お会いしましょう。

第七話　孤独の少女に救いの手を（前書き）

ついに主人公が魔王の少女と出会います。

ここまでけっこう掛かりましたがようやくです。

はたして主人公は少女を孤独から救い出せるのか？

では第七話始まります。

第七話　孤独の少女に救いの手を

Ｓｉｄｅ燎

無事にマスター認証を済ませた俺たちは天道宮から転移して、ヴィルヘルミナの案内でルティアさんが用意してくれた家へと向かった。

途中、ヴィルヘルミナとエヴァの顔が赤いような気がしたが、気のせいだろうか。

そして、目的地の家に着いてみると、なんとそこはＦａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔの衛宮士郎の家だったのだ。

・・・・・ルティアさん・・・・・あなたも好きですね・・・・・。

三人で住むには少し大きいような気もしたが、天道宮よりはましかと思うことにした。まあ、あっちは城だしな。それからそれぞれの部屋を決めて、俺は今外出するために玄関で靴を履いている。

「どちらへお出かけでありますか？」

『行先報告（ぎょうせんほうこく）』

後ろから声が掛かって、振り返ってみると、ヴィルヘルミナが立っていた。

「ちょっと、そこら辺を散策にな。この町の地理も知っておきたいし」

俺は無難な答えを出す。

「では、私たちもご一緒に」

『同伴申請』

ヴィルヘルミナとティアマトーが同行を申し出る。・・・・・しかし。

「大丈夫だよ。そんなに遠くには行かないし、そんなに遅くならない内に帰ってくるから」

そう言ってヴィルヘルミナ達の申し出を断る。

「しかし・・・・」

ヴィルヘルミナは顔を顰める。心配してくれるのは嬉しいが、今回はある目的のために一人のほうが都合が良いのだ。

「平気だって、アラストールやマルコシアスも一緒だし」

「・・・・・わかったのであります」

『了承』

ヴィルヘルミナは少し考えるそぶりを見せた後ティアマトーも一緒に承諾してくれた。

「それでは、私たちは美味しい夕飯を作って待っているのであります」

『晩餐期待』

「わかった。それじゃあヴィルヘルミナ、いってきます」

『では行ってくる。留守を頼むぞ、万条の仕手』

『ま、なにかあったらすぐに念話で知らせるからよ。んじゃ、行ってくるぜ』

俺たちはそれぞれに返事をする。

「行ってらっしゃいなのであります」

『帰宅待望』

ヴィルヘルミナ達の見送りを受けて、俺たちは家を出た。

家を出てから一時間くらい経って、家の近所の大方の地理を把握し終えた俺は今町をぶらぶらと歩いている。

（近所の地理は大体分かったし、そろそろ本来の目的に移るか）

そう思って俺は公園を探した。何故かというと恐らくそこに俺の目的である人物がいるはずだからだ。しばらく歩いてようやく小さな公園を見つけた。俺はその中に入ってあたりを見回す。そして俺の目にあるものが留まった。それは、ブランコに乗っているどこか寂しげな雰囲気を漂わせている今の俺と同い年ぐらいの少女だった。

「・・・・見つけた」

俺は遠目からその少女をじいっと見つめる。栗色の髪を短いツインテールにしている、可愛らしい顔立ちに暗い表情を浮かべている。

原作開始時よりも幼いが間違いない。彼女こそ将来、管理局の白い悪魔、魔王の異名で恐れられることになる少女。原作の主人公高町なのはである。

「アラストール、マルコシアス、あそこのブランコに乗ってる女の子、見えるか？」

『む？・・・うむ、見えるが？』

『あの嬢ちゃんがどうかしたのか？』

「彼女が原作の主人公、高町なのはだ」

俺は二人になのはのことを教える。

『ほう、あの子が・・・・』

『へえ～、そうなのか。しかしあの嬢ちゃん、なんか妙に暗くねえか？』

「この頃、なのはの家でちょっとしたトラブルがあってな、多分それが原因だろう」

なのはの家の事情を掻い摘んで説明する。

『なるほどな。お前の外出の本当の目的は彼女か』

「ああ、まあな。でもこんな簡単に会えるとは思ってなかったよ」

『はっは～ん、そうかい。・・・で？どうすんだ？我が慈悲深きお人好し、神薙燎？』

「・・・・・決まってるだろ」

マルコシアスの問いかけに俺は薄く笑いを浮かべてなのはに近づく。

「ねえ、どうしたの？」

なのはに出来るだけ優しく話しかける。

「ふえ・・・・・？」

なのはは可愛らしい声を出して、顔を上げてこちらを見る。・・・・・・あかん、マジで可愛ええわ、この子。お持ち帰りしたい・・・・・っと、いかんいかん。思わず、某鉈女のようなことを思ってしまった。

「えっと・・・・あなたはだれ？」

なのはが少し泣きそうな声で聞いてくる。

「俺は燎、神薙燎っていうんだ。君の名前はなんていうの？」

「な、なのは。たかまちなのはなの」

「なのは・・・・・いいね、可愛い名前だ」

俺はそう言ってなのはに笑顔を向ける。

「ふえっ！？／／／」

ん？・・・・なんだかなのはの顔が赤いけど、どうしたんだろう？

「じゃあ、なのはって呼んでもいいかな？俺のことも燎でいいから」

「えっと・・・りょう・・・・ちゃん・・・？」

「え？・・・・・・りょうちゃん？」

「うん。りょうちゃん」

りょうちゃん、りょうちゃんね。これは間違いなく勘違いしてるな。

（くっ、くくっ。りょうちゃん、りょうちゃんか・・・・くくくっ）

（ぶっ、ぶははっ、りょ、りょうちゃんって、おまっ、や、やべっ・・・・し、死ぬ。ぶふっ）

・・・・なんだろう、なぜか無性にこのデバイスどもにこの世界でお馴染みのO☆HA☆NA☆SHIをしたくなってきたのだが。まあ、今はそれよりもなのはの誤解を解くのが先だな。

「えーっと、なのは？勘違いしてるみたいだから言っとくけど、俺は男だから」

「ふえっ！？そ、そうなの？ご、ごめんね。だってすごく可愛い顔してるから」

ぐはっ！・・・・・け、けっこうきついもんだな。可愛いって言われるのって・・・・。

「う、うん。大丈夫。気にしてないから。女顔だって自覚あるし・・・」

なんせ、シャナの顔だもんな。無理もないか。

「それで、なのははなんでさっき寂しそうな顔してたの？」

気を取り直して俺はなのはに質問する。

「えっ？そ、そんなことないよ。なのは、べつにさびしくなんて・・・」

「そんな顔で言われても説得力ないよ。なあ、なのは。俺でよければ話してみろよ。何ができるかわからないけど、話を聞くぐらいなら出来るから」

本当は知っているが、俺は敢えてなのはに聞くことにする。彼女の心の闇をほんの少しでも理解するために。なのははしばらく俯いていたが、やがてぽつりぽつりと話し始めた。

「あのね、なのはのお父さんがね、じこにあってね、おおけがしちゃったの。それでね、お父さんがよくなるまでお店をがんばらなきゃならないの。それで、お母さんとお姉ちゃんはすごく忙しそうで、お兄ちゃんはなんだか毎日怖い顔してるの。みんな、誰もなのはのこと見てくれないの・・・ひっく、だれも、なのはのこと・・・・うっく・・・かまってくれないの。・・・・でも、いま、みんなすごく忙しいから・・・・ひくっ・・・・わがままいっちゃ・・・・いけないの・・・・ひっ・・・がまんしなくちゃ、いけないの・・・うっく・・・がまんして、いいこでいなくちゃ・・・・いけないの。いいこでいなくちゃ・・・・だめなの・・・だって、めいわくかけたら・・・・ひっく・・・・みんななのはのこと・・・・きらいに・・・・なっちゃうから。そしたらなのは・・・・ひとりぼっちになっちゃうから・・・・だから・・・・うっ、うええ」

・・・・ああ、やっぱりこのときのトラウマがなのはの生き方を決めたんだ。誰にも迷惑を掛けたくない。迷惑を掛けて、嫌われて、独りぼっちになりたくない。だから、体の限界なんて考えずにあんなにボロボロになるまで無茶をし続けたのか。その気持ちはわからなくはない。でもそれじゃあ、あまりにも・・・あまりにも・・・。

「なのは・・・・」

フワッ

「ふえっ？」

ギュッ

気が付くと俺はなのはを抱き締めていた。

「り、りょうくん・・・・？」

「・・・・・しなくていい」

「え・・・・？」

「がまんなんてしなくていい」

俺は囁くように訴えかける。この馬鹿みたいに優しく不器用な少女の心に俺の気持ちが届くように。

「で、でも・・・」

「無理して、我慢して、良い子でいることなんてないんだ。辛いんなら辛いって言っていいんだ。苦しいなら苦しいって言ってもいいんだ。誰もそんなことでなのはのこと嫌ったりなんてしないから」

「りょうくん・・・・」

「なあ、なのは。言葉ってなんのためにあるのか知ってるか？」

「え・・・？」

「それはな、伝え合うためだ。自分の想いや気持ちをちゃんと言葉にして相手の心に届けるためだ。言葉だけじゃ伝わらなこともある

だろう。でも言葉にしなきゃ伝わらないことだって確かにあるんだ」

言葉にせず気持ちのすべてを伝えられるならどんなにいいか。でも人はそんなに器用じゃない。そんなことができる人間なんて滅多にいないだろう。だから言葉が必要なんだ。伝えたい想いを、知ってほしい気持ちをちゃんと相手に届けるために。

「なのは、言いたいことがあるならちゃんと言うんだ。言いたい言葉や気持ちを無理に押し込め続けるといつか心が壊れてしまう。伝えたい言葉を相手に伝えることは全ての人間が持つ権利だ。誰もそれを責めることはできない」

「・・・・うん」

「だからなのは、お前も我慢なんかするな。言いたい言葉を、自分の家族に伝えるんだ。大丈夫、きっとお前の家族は聞いてくれる。お前が家族を好きなのと同じくらいお前の家族もお前のことが大好きなはずなんだから」

「うん、うん」

「それとな、なのは、自分ひとりじゃできないことがあったら誰かを頼れ。お前は一人で頑張りすぎだ」

「そ、そうかな？」

「そうだ。誰にも頼らないってのは強いってことじゃない。それはただ誰かを信じるのが、誰かの手を掴むのが怖いだけだ」

「うん。・・・・あ、あのねりょうくん、お願いがあるんだけど・・

・・いいかな？」

「お願い？・・・ああ、いいぜ。言ってみろよ」

「あのね、いまだけ、思いっきり泣いてもいい？それでなのはが泣き止むまで抱き締めててくれる？」

これは・・・・俺の言葉を受け入れてくれたということで良いんだろうか。

「当たり前だろ。思いっきり泣けばいい。俺はお前が泣き止むまでこうしててやる。だって、俺たちはもう・・・・友達なんだから」

この言葉を皮切りになのはの目から涙が溢れ出てきた。

「うっ、うわあああああん！！さっ、さびかったよおっ！！くるしかったよおっ！！ずっと、さびしくて、くるしくて、つらくて、なきたくて、でも、だれにもいえなくて！！ひっ、ひっく。うえ、うえええええん！！！」

抱きついて俺の胸で泣きじゃくるなのはを俺は優しく抱き締め続けた。彼女が今まで心の奥に溜め込んでいたものを全て吐き出して心から笑えることを願いながら。

この日、少女を縛り続けていた孤独という名の鎖は全て砕かれた。一人の心優しき少年の想いという名の剣によって。

第七話　孤独の少女に救いの手を（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか？

私としても今回のはかなりの自信作なのですが。

では感想や意見などいつでもお待ちしております。

また次回お会いしましょう。

第八話　炎髪灼眼と白い魔王（前書き）

どうもロキです。時間ができたので、更新させてもらいました。

なのはの心を孤独から救った燎、さて彼の次の目的は・・・？

それでは、第八話始まります。

第八話　炎髪灼眼と白い魔王

Ｓｉｄｅなのは

わたしのなまえは、たかまちなのはといいます。今わたしのいえはとてもたいへんです。お父さんがじこにあって、おおけがをしてしまいました。お母さんとお姉ちゃんはお父さんがよくなるまでお店をがんばらないといけません。お兄ちゃんはなんだかいつも怖い顔をして剣をふっています。

みんな、なのはのことをみてくれません。なのはは毎日ひとりぼっちでさびしいです。でもがまんしないといけません。わがままを言ってみんなをこまらせたくないから。だからわたしはひとりぼっちでもがまんしていい子でいないといけません。わがままをいったら、きっとみんなのはのことをきらいになっちゃうから。・・・でも、やっぱりひとりぼっちはさびしいです。なきたいです。でもないちゃだめです。なのははいい子でいないといけないんです。・・・でも・・・でも。

そんなときでした。

「ねえ、どうかしたの？」

「ふえ？」

とつぜん、こえを掛けられました。見上げてみると、きれいな黒いかみをした、とても可愛い女の子が立っていました。

「えっと・・・・あなたはだれ？」

わたしは誰なのかききました。

「俺は燎、神薙燎っていうんだ。君の名前はなんていうの？」

おんなのこは、そう答えました。でも女の子なのにおれってちょっとおかしいです。

「な、なのは。たかまちなのはなの」

わたしは自分のなまえを言いました。

「なのは・・・・いいね、可愛い名前だ」

そう言ってその子はわたしに笑いかけました。

「ふえっ！？／／／／」

わたしは思わずドキッとしてしまいました。だってその子の笑顔はとてもきれいで、かわいくて、そしてとても、やさしい笑顔だったから。

「じゃあ、なのはって呼んでもいいかな？俺のことも燎でいいから」

そう言われたので、わたしはなまえを呼んでみました。

「えっと・・・りょう・・・・ちゃん・・・？」

「え？・・・・・・りょうちゃん？」

わたしがそう呼ぶとりょうちゃんは目をパチクリさせました。・・・あれ？なにかいけなかったかな？

「うん。りょうちゃん」

わたしはもういちど、りょうちゃんのなまえを呼びました。

「えーっと、なのは？勘違いしてるみたいだから言っとくけど、俺は男だから」

「ふえっ！？そ、そうなの？ご、ごめんね。だってすごく可愛い顔してるから」

びっくりしました。なんとりょうちゃん・・・・いえりょうくんは、男の子だったのです。あんまり可愛い顔してるから女の子かと思ってしまいました。わたしはりょうくんにあやまりました。りょうくんは気にしてないと言ってくれました。

「それで、なのははなんでさっき寂しそうな顔してたの？」

りょうくんはふいにそう聞いてきました。

「えっ？そ、そんなことないよ。なのは、べつにさびしくなんて・・・」

りょうくんにそう聞かれてわたしはさっき泣きそうになってたのを見られたと思って慌ててわらってこたえました。

「そんな顔で言われても説得力ないよ。なあ、なのは。俺でよけれ

ば話してみろよ。何ができるかわからないけど、話を聞くぐらいなら出来るから」

そう言われて、わたしは話していいのかまよってしまいました。でもわたしは不思議と、りょうくんになら話してもいいんじゃないかと思いました。そう思うとわたしはいつのまにかりょうくんにいえのことを話しはじめていました。でも話しているうちにだんだんとかなしくなってきて、なきそうになってしまいました。

すると、りょうくんが・・・

「なのは・・・・」

フワッ

「ふえっ？」

ギュッ

なのはのことをだきしめてくれました。りょうくんのからだは、あたたかくて、なんだかすごくあんしんします。それにとってもいいにおいがします。やさしいお日さまみたいなにおい。

「り、りょうくん・・・・？」

あんまりいきなりだったから、なのはがびっくりしていると。

「・・・・・しなくていい」

「え・・・・？」

「がまんなんてしなくていい」

そうりょうくんはいいました。

それからりょうくんは、たくさんのことをなのはにおしえてくれました。がまんなんてしなくていい、いい子でいなくてもいい、言いたいことがあるのならちゃんと言う、ひとりでがんばらないで、こまったときはだれかにたよる、それはけっしてわるいことじゃない。りょうくんのことばを聞いているとずっとくるしかったなのはのむねのおくがあったかくなっていくような気がしました。

わたしはもうがまんができなくなってきて、りょうくんにないているあいだだけだきしめていてほしいとおねがいするとりょうくんは・・・・

「当たり前だろ。思いっきり泣けばいい。俺はお前が泣き止むまでこうしててやる。だって、俺たちはもう・・・・友達なんだから」

そのことばをきいて、すごくうれしくなってわたしはもうげんかいでした。いままでむねのおくにおしこめていたものを、ぜんぶはきだすようにわたしはりょうくんにだきついておおごえでなきました。

りょうくんは、わたしが泣き止むまでずっとやさしくだきしめていてくれました。

Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ燎

なのはがようやく泣き止んで俺たちは今、公園のベンチに座っている。かなりの時間なのはは泣いていた。ずいぶんと長い間溜め込んでいたのだろう。これで少しはなのはの心を軽くできればいいのだが。

「あ、あのね、りょうくん。ごめんね、なんだかいっぱい泣いちゃって」

隣に座っているなのはが謝ってきた。

「謝らなくていい。言ったろ?泣きたいときは思いっきり泣けばいいって。それでなのはの気が晴れたのなら、俺は満足だよ」

俺はそう言ってなのはに笑いかける。

「う、うん。ありがとね、りょうくん／／／／」

なんだかなのはの顔がまた赤いのだが、風邪でも引いたのか?

(・・・・なあ、アラストールよお、これってよ・・・・・・)

(・・・・うむ。間違いないだろうな。まったく、随分と罪作りなことだ)

(つうか、燎のやつ、ぜってー気づいてねえよな?)

(どうやらそのようだな。やれやれ、我らが主は些か以上に鈍感なようだ。どこぞのミステスを思い出す)

・・・・・なんかすごく失礼なことを言われたような気がするのはなんでだ?

「りょうくん、本当にありがとね。わたしすごくうれしかった。がまんしなくていいって言ってくれて、泣いてもいいって言ってくれて、それから・・・・友達だって言ってくれて・・・」

なのはは笑いながらそんなことを言ってくる。むう、俺としてはそんなに大したことをしたつもりはないのだが・・・・改めて言われると、なんだか恥ずかしいな・・・・・。

「気にするなよ。俺たちが友達なのは本当だろう?俺たちはもうお互いに名前を呼んでるんだから」

「なまえを呼べば友達なの?」

「そうだよ。いいか、なのは?友達を作るときに一番大切なことはな、まず名前を呼ぶことだ。名前を知らなきゃ友達になんてなれないからな。だからまず、名前を呼ぶんだ。君とかあなたとかじゃなく、相手の目を見てな。それが友達になるための第一歩だ。名前を呼ぶこと、全部まずはそこからなんだ」

「なまえをよぶこと・・・・・うん!わかった!!」

なのはは弾けるような笑顔で答えた。ああ、これだ。俺が見たかったのはこの笑顔なんだ。俺はこの笑顔を護るためにこの世界に来たんだ。と俺は改めて自分の気持ちを確認した。

それにしても、こんな優しい子にこんなに寂しい思いをさせるなんて、共弥のやつはなにをやってるんだ。こんなときこそ長男が家

族を支えなきゃいけないんだろうが。これは少しＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをする必要があるな。

「りょうくん？どうかしたの？」

と、なのはが聞いてきた。おっと、いかんいかん。つい考え込んでいたようだ。

「いや、なんでもないよ。大丈夫」

俺はあたりさわりのないように答えた。

「さてと、いつまでも座っててもつまらないし、遊ぼっか、なのは？」

「うん！遊ぼうりょうくん！！」

俺の誘いに嬉しそうに答えるなのは。

「それじゃあ、なにして遊ぼうか？」

「なのは、おにごっこがしたいの！」

「鬼ごっこね、じゃあなのはが鬼な！」

そう言った瞬間、俺は走って逃げだした。

「にゃあ！？り、りょうくんずるいよ。まって～！」

不満を言いながらもどこか楽しそうに俺を追いかけるなのは。俺

たちの鬼ごっこが始まった。

（なのははもう大丈夫そうだな。さて次は・・・・・士郎さんだ）

俺はなのはから逃げ回りながら、次の目的を定める。

第八話　炎髪灼眼と白い魔王（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか？

次回は士郎の治療とシスコンとの対決です。ついに燎のチートの一端が垣間見れるかもしれません。

それではご感想や意見などお待ちしております。

次回をお楽しみに。

第九話　治療（前書き）

申し訳ございません。シスコンとのバトルを書くつもりだったのですが。

楽しみにしていただいた方々、本当に申し訳ございません。

次回こそ本当にＶＳシスコンです。

第九話　治療

Ｓｉｄｅ燎

あの後、俺はなのはと鬼ごっこをしたり、かくれんぼをしたりと思いっきり遊んだ。なんだか前世の子供の時よりも遊んだような気がする。ちなみに遊んでいる時になのはが四、五回ほど転んだ。幸い怪我はしなかったが、どうやら運動神経が切れてるというのは本当のようだ。

まあ、そんな感じで俺たちは二、三時間ぐらい遊びまわった。なのはも楽しんでくれたようで何よりだ。しかし、流石になのはは疲れてきたようだ。俺のほうはそんなに問題ないのだが。ま、ここら辺で今日はお開きにするか。

「なのは、今日はもうここまでにしよう」

俺はなのはに終わりにするように言う。

「え～？でも～」

どうやらなのはは不満そうだ。いや、二時間以上も遊んでまだ足りないんかい、この子は。

「だ～め。あんまり遊びすぎると疲れて動けなくなっちゃうだろ。今日はもう終わり。いいな？」

なのはの頭を撫でながら優しく言う。

「う～、は～い」

返事はしたが、なのはは心底残念そうだ。

「大丈夫だよ、そんな顔しなくても。また一緒に遊ぼう」

俺はまた一緒に遊ぶ約束をする。

「ほんと!?」

俺の言葉を聞いてなのはは花の咲くように笑う。

「ああ、ホントだ。約束な。ほら、指切り」

俺は小指を突き出す。

「うん!!」

なのはは嬉しそうに俺の小指に自分の小指を絡める。・・・そして一緒に歌う。

「ゆ～びき～り」

「げ～んま～ん」

「うそつ～いた～ら」

「はりせんぼ～ん」

「の～ます」

「「ゆ～びきった」」

歌い終わると俺たちは小指を離す。

「約束だからね。りょうくん」

「ああ、わかってるよ」

「えへへ」

本当に嬉しそうだな。やっぱりなのはには笑顔が一番似合うな。

まあ、それは他の子達も同じかな。さてと、そろそろ・・・・

「なあ、なのは。なのはのお父さんが入院してる病院ってどこだか分かるか？」

俺は次の目的、士郎さんの治療をするためになのはに士郎さんの居る病院を訊いた。

「ふえっ？う、うん知ってるけど、どうして？」

なのはは不思議そうに訊いてくる。

「いや、なんか心配でさ、お見舞いに行こうかと思って」

「おみまい？」

「ああ、なのはも一緒に行こうぜ。一緒に行って、なのはの元気を

分けてあげればなのはのお父さんもきっとすぐ良くなるよ」

「ほ、ほんと!?」

なのはの問いに笑顔で答える。

「ああ、本当だ。きっと良くなる。だから、一緒に行こう。なのは」

俺はなのはに手を差し出す。

「うん!いこう、りょうくん!」

なのはは俺の手を握り、引っ張って走り出した。

「お父さんの病院は、こっちなの!」

「ああ!」

なのはに案内されて俺達は士郎さんのいる病院へと向かった。

「ここが、お父さんのいる病院なの」

「・・・・ここが」

俺はなのはに案内されて、やってきた病院を見上げた。けっこう大きな病院だ。

（ここに、士郎さんが・・・・）

俺たちは病院に入って、看護婦さんに士郎さんの病室を訊いて、向かった。

三階まで上がって一つのドアの前で止まった。横のプレートに、『高町士郎』と書かれていた。

「ここが、お父さんの病室」

俺はドアを開けた。中には全身を包帯で巻かれた、見るからに重傷な男の人がベッドで横になっていた。この人が、なのはの父親の高町士郎さんか。

「お父さん・・・・」

なのはは士郎さんに近づく。

「お父さん、なのはは元気だよ。お母さんも、お姉ちゃんも、お兄ちゃんもみんな元気だから、でもみんなお父さんのこと心配してるよ・・・・」

なのははそっと士郎さんに囁くように言う。

「はやく、元気になってね。なのはの元気、いっぱい分けてあげる

から。だから・・・はやく・・・・元気に・・・・・・なって・・・・・お父さん・・・」

とても辛そうななのはの声。それでも涙を堪えて言葉を紡ぐ。自分の祈りが父親に届くことを祈って。

「なのは、俺もなのはのお父さんに挨拶したいから、ちょっと外で、待っててくれるか？」

なのはの肩に手を置いて外で待つように伝える。

「グスッ・・・・・うん」

服の袖で涙を拭いてなのはは外に出てドアを閉める。

俺はなのはが外に出たことを確認すると、この病室の中に防音用の結界を張る。

「さて、これでよし」

俺は士郎さんに近づく。

「初めまして、士郎さん。俺は神薙燎、なのはの友達です。あなたを助けに来ました」

そう言って、士郎さんに手を翳す。

「治癒（クーラー）」

俺の翳したてから柔らかな光が溢れ出て士郎さんの全身を覆う。

俺が使った魔法はネギまの魔法の初歩の回復呪文である。それでも俺が使えば個程度の傷数分で跡形も残さず治療できるのだが、あまり一気に治すと怪しまれるので意識が戻る程度に止めておく。

やがて、徐々に光が消えていく。そして士郎さんを覆っていた光が全て消えた。治療が終わったのだ。

「ふう。とりあえずこんなもんかな。どうだアラストール、マルコシアス？」

俺は治療の出来をアラストールとマルコシアスに訊く。

『ふむ、悪くはないな』

『まあ、初めてにしちゃあ上出来なほうだな』

二人から及第点が出る。

「そっか・・・・良かった」

俺は安堵の息を吐いた。

「さて、治療も済んだし、そろそろ出るか」

『うむ、それがよかろう』

『だな、あんまり遅ぇと嬢ちゃんが変に思うだろうしな』

結界を解いて、俺はドアを開ける。廊下でなのはが椅子に座って

待っていた。

「あ、りょうくん。もういいの？」

俺に気づいて近寄ってくる。

「ああ、まあな。さ、帰ろう？家まで送ってくよ」

俺はまたなのはにてを差し出す。

「うんっ！！」

なのはは笑顔で握り返す。

俺たちは来た時と同じように手を繋いで病院を後にした。

第九話　治療（後書き）

次回は必ずシスコンにＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩです。

楽しみにしててください。

何か感想や意見などありましたらいつでもお送りください。

ではまた次回お会いしましょう。

第十話　対決　御神の剣士（前書き）

さて、今回は高町家のシスコンとのバトルです。

戦闘描写が上手く書けたか不安がありますが、頑張ってみました。

では第十話始まります。

第十話　対決　御神の剣士

Ｓｉｄｅ燎

士郎さんの治療を終えた俺はなのはと手を繋いでなのはを家まで送っている途中である。俺は歩きながら士郎さんの負った怪我について考えていた。あんな重傷を負って生きているなんて流石は御神の剣士といったところか。それと治療しているときに思ったが、士郎さんほどの実力者がそんな簡単に事故にあうものだろうか？・・・・・まさか、誰かに命を狙われた？

あり得ないことじゃない。俺はとらハのことはよく知らないが、たしか士郎さんは桃子さんと結婚する前は要人のボディガードをしていたと聞いたことがある。もし命を狙われたのなら、やったのは間違いなく士郎さんに仕事の邪魔をされた連中だろう。そして士郎さんが死んでいない以上また士郎さんを襲う可能性がある。今度はなのはたちにまで危険が及ぶかもしれない。十分注意しておこう。さしあたり、なのはの家の周りに式神をいくつか放って見張らせておくか・・・。

「・・・・くん。・・・りょうくん」

「・・・・ん？」

「どうかしたの？」

なのはが俺の顔を覗き込んでくる。・・・ちょ、近い近い。

「いや、なんでもないよ。ちょっと考え事してただけ」

俺はそう言ってなんでもない風に振る舞う。

「ふうん。・・・・あ、りょうくん、あそこがなのはのお家なの！」

なのはは綺麗な看板のついたお店を指差す。その看板には【喫茶翠屋】と書かれていた。

（おお、ここが翠屋か。まさか生で拝める日がこようとは）

俺はリリなのの世界で有名な喫茶店翠屋に実際に来ることができてちょっと感動している。

「よかったらはいって、りょうくん。お母さんたちに紹介したいから」

なのはは俺にお店のなかに入るように促す。

「いいのか？」

「うん！」

俺の問いかけになのはは笑顔で肯定した。

「それじゃあ、お邪魔するか」

空いてるほうの手で俺はドアを開けてなのはと一緒にお店のなかに入る。喫茶店だからかお店のなかからは甘くて良い匂いが漂ってきた。

「お邪魔しまーす」

「ただいまー」

店に入ると俺たちの声を聴いて、奥から女性が出てきた。

「はーい、ってあらなのは」

「お母さん！」

なのはは嬉しそうにその女性に抱き着く。・・・・やっぱりか。

「ただいま。お母さん」

「おかえりなさい。なのは」

女性は優しく微笑んでなのはを受け止める。

この人がなのはの母親の高町桃子さんか。っていうか実際に見るとほんとに若いな。これで三人の子持ちって、ありえないだろ。なんだ、高町家はサイヤ人の血でも引いてるのか？・・・・ありえそうで怖いな。

「ところでなのは、この子はどなた？」

桃子さんが俺のことを訊いてくる。

「りょうくんっていうの！なのはのお友達になってくれたの！」

なのはは嬉しそうに俺を紹介する。

「初めまして、神薙燎です。なのはちゃんの友達になりました」

俺も自己紹介をする。

「そうなの。ありがとうね、りょうくん。ちゃんとご挨拶できて偉いわね」

桃子さんは優しい笑みを浮かべて俺の頭を撫でる。・・・・・むう、これは完全に子ども扱いされてるな。まあ、今の俺の外見じゃあ仕方ないか。

「でもなのは、女の子なのにりょうくんはちょっと変じゃない？」

と桃子さんはなのはの俺の呼び方を指摘する。・・・・って桃子さん！あなたもですか！？

「あ、あのねお母さん。りょうくんはね、男の子なの・・・・」

なのはが桃子さんの誤解を解く。

「え・・・そうなの？」

驚いた顔で俺を見て、なのはに訊く桃子さん。

「そうなの」

頷くなのは。

「あ、あらやだ、私ったら・・・ごめんなさいね、りょうくん」

慌てて謝る桃子さん。・・・・・いや、別にいいんだけどね。もう諦めたし。

「いえ、いいんです。女顔って自覚ありますから。なのはにも間違われたし・・・・・」

そう言ってなのはをジト目で見る俺。

「うう・・・・」

俺の視線を受けてなのははサッと目を逸らす。

「そ、そう・・・あっ、そうだわ！ねぇ、りょうくん。よかったらケーキでも食べていかない？」

唐突に桃子さんが言ってくる。

「えっ？でも俺、お金持ってないし」

そう、今の俺には手持ちの金が一銭もない。上手いと評判の翠屋のケーキは是非とも食べてみたいが、払う金が無いのではどうしようもない。

「いいのよ、お金なんて。なのはと仲良くしてくれたお礼に・・・・・ね」

そう言って俺にウィンクする桃子さん。・・・・・美人はなにをやっても様になるなー・・・と俺は思わず感心してしまう。つーかこの人ホントに綺麗だよな。ちょっとドキッとしたぞ。こんな人と

ゴールインするなんて、士郎さんもやるな。

「いいんですか？」

「もちろん♪」

桃子さんは笑いながら言ってくれた。ほんとにいい人だ。

うーん、ここまで言ってくれて断るのは逆に失礼ってものかな？
それに翠屋のケーキをタダで食える機会なんてそうそう無いだろう。
このチャンスを逃す手は・・・・ないな。

「それじゃあせっかくですから、お言葉に甘えｔ「なのは！」・・・・ん？」

俺が答えようとすると俺の言葉を遮ってなのはを呼ぶ声が聞こえた。声のしたほうを向いてみると、そこには十五、六歳くらいの顔つきが士郎さんに似ている青年が立っていた。

「あ、恭也お兄ちゃん・・・・」

「あら、恭也」

なのはと桃子さんが青年の名前を呼ぶ。

恭也・・・そうか、こいつがシスコンで有名な、なのはの兄貴の高町恭也か。たしかこいつも御神の剣士なんだっけ？

「なのは、いったいどこに行ってたんだ！心配したんだぞ！」

出てくるなりなのはに怒鳴る恭也。

「ご、ごめんなさいお兄ちゃん」

暗い表情で謝るなのは。・・・ったく、もう少し言い方ってものがあるだろうが。大体心配だと?どの口が言いやがる。そんなこと言う資格がお前に・・・・・。

「まったく、反省しろ。この忙しいときに皆に迷惑を掛けるんじゃ
「おい、ちょっと待て」・・・?」

おい、いまこいつなんて言った?・・・迷惑?なのはが迷惑を掛けたって言ったのか?・・・ふざけんな。今までなのはがどんな気持ちでいたと思ってるんだ。誰にも迷惑を掛けたくなくていい子でいようと我慢して独りぼっちで泣いていたなのはの苦しみが分かるのか。なのはのことを見ようともしていなかったお前に。

「なんだ・・・君は?」

恭也はやっと俺に気づいたように言う。

「俺は神薙燎、なのはの友達だよ。一つ訊くけど、あんたがなのはをずっと独りぼっちにしてるお兄さん?」

俺は挑発的に訊く。

「なに?」

恭也の目つきが険しくなる。だがその程度で怯む俺じゃない。

「聞こえなかったのか？あんたが自分の妹の面倒一つ見られない駄目兄貴かって訊いてるんだよ」

俺はさらに恭也を挑発する。

「なっ、なんだと！」

恭也は案の定俺の挑発に乗ってきた。

「さっきから聞いていれば勝手なことばかり抜かしやがって、ずっとなのはをほったらかしにしておいてこんな時だけ兄貴面か、ここまでくると呆れを通り越して感心するよ。まったく大したものだ」

「き、貴様っ！」

すごい形相で俺を睨み付ける恭也。

「り、りょうくん」

なのはが俺を心配して声を掛けてくる。桃子さんもハラハラした様子でこちらを見ている。

「今のあんたになのはを叱る資格があんのか？この子を叱るなら、一つでも兄貴らしいことをしてから叱りやがれ！妹の面倒一つまともに見られない奴が偉そうなこと言ってんじゃねえ！！」

俺は腹の底から叫ぶ。ここまで頭に来たのは久しぶりだ。

「だ、黙れ！お前に何が分かる！！」

叫び返す恭也。

「わかんねえよ！自分のやるべきことをはき違えて家族をほったらかしにしてる奴の気持ちなんて分かりたくもねえ！！」

ああ、そうだ。こいつは自分のやるべきことをはき違えてる。こいつが今やらなければならないことはこんなことじゃない。

「いいだろう。道場に来い！その減らず口、黙らせてやる！！」

そう言って店の奥に歩いていく恭也。

「恭也、待ちなさい！」

桃子さんが止めようとするがどうやら聞こえていないようだ。

「大丈夫ですよ桃子さん。ちょっと行ってきます」

俺は安心させるように言って店の奥に向かう。ちょうど良いあいつの目を覚ましてやるとするか。

「あ、待ってりょうくん。なのはもいくの」

心配なのか俺についてくるなのは。

「ああ、ありがとう」

俺はなのはにお礼を言う。

なのはに案内されて道場に着くと恭也が二本の木刀を持って待っ

ていた。

「よく逃げずに来たな」

「逃げる？なんでお前如きに逃げる必要がある」

恭也の挑発に挑発で返す。

「覚悟しろ。二度とそんな口が利けないようにしてやる」

二本の木刀を構える恭也。その構えからかなりの腕であることがわかる。

どうやらこの様子じゃ、完全に頭にきてるようだな。だがな、それはこっちも同じなんだよ。

（こんなにも容易く相手の挑発に乗せられるとはな、腕のほうはともかく、精神面は些か以上に未熟なようだ）

（ありゃあ完全に頭に血が上ってんな。これじゃあ、どっちが子供だかわかりゃしねえぜ）

アラストールとマルコシアスが辛辣な評価を下す。

（まったくだな。しかし、だからと言って手加減する気はないがな）

（うむ。当然だ）

（おうよ、やっちまいな。我が鋼鉄の拳骨、神薙燎！！」

「行くぞ！！」

「来やがれ！！」

俺と恭也の決闘が始まった。

恭也は凄まじいスピードで踏み込んできて、上から剣を振り下ろす。しかし俺はこれを軽く横にずれて躱す。

「なっ！？」

驚く恭也。どうやら今の一撃で決めるつもりだったようだ。俺を嘗めていたな。

「どうした？何を驚いているんだ？」

「く、くそっ」

またさらに踏み込んできて剣を振るう恭也。今度は横薙ぎに振るうが俺はそれも躱す。しかし今度は恭也も引かずにさらに打ち込んでくる。

右薙ぎ、左薙ぎ、袈裟切り、逆袈裟、切り上げ、唐竹割りと次々に両方の木刀を操り剣撃を繰り出してくるが一つとして俺にかすりもしない。俺は恭也の剣撃全てを完全に見切り躱しているのだ。

「くそう、なぜだ！？なぜ当たらない！？」

自分の技を悉く躱される恭也。その顔は驚愕に彩られている。

「なぜ当たらないかって、それは簡単だよ。お前の剣は確かに速いが、動きが単純なんだよ」

そう、恭也の剣は確かに速いが、それだけだ。頭に血が上っているせいで動きが勢いに任せすぎていて実に読みやすい。俺は振り下ろされてくる剣を片手で掴んだ。

「な!?く、くそっ、放せ!」

恭也は俺から剣を引き剥がそうとするが、魔力で身体強化をしている俺の手はびくともしない。

「・・・・・こんなもんかよ」

「なに?」

「こんな程度の力のために、お前はなのはを傷つけたのか?」

「なっ」

「ふざけんな!!」

ドゴォ!!

「ぐはっ!」

俺は恭也の横っ面を思いっきり殴り飛ばした。あまりの威力に木刀を手から放して吹っ飛ぶ恭也。

「おい恭也、なんで士郎さんがお前に剣術を教えたと思う?」

「なに・・・・？」

俺は恭也に問い掛ける。立ち上がりながら訝しげに俺を見る恭也。

「どうして士郎さんは、お前に剣術を教えたんだ？」

俺は足を魔力で強化して軽く瞬動を使い恭也に肉薄する。

「なっ！？」

目を見開く恭也の腹にボディーブローを叩き込む。

ドガッ！！

「ごふっ！」

「こんなことをさせるためか？お前に自分の仇を討ってもらうためか？」

さらに二、三発続けて打ち込む。

ドグッ！！ガスッ！！

「あがっ！ごはっ！！」

拳を打ち込むたびに恭也の顔が苦悶に歪む。

「違うだろ。そうじゃねえだろっ！！」

叫ぶと同時にアッパーを放ち、顎を打ち上げる。

ズガンッ!!!

「がはぁっ!!」

恭也の体が跳ね上がるが、俺は服の襟を掴んで逃げられないようにする。

「お前に強くなってほしかったのは、お前に・・・家族を護って欲しかったからだろ!!」

俺はまたさらに恭也を殴る。何度も何度も殴り続ける。拳に意思を込めて殴る。俺の想いがこいつの心に届くように、士郎さんの気持ちが伝わるように。

「自分になにかあったときのために、自分に代わってなのは達を護って欲しかったからだろ。お前ならきっと守ってくれるって信じてたからだろ!それなのにお前はなにをやってんだよ!!」

ドガッ!!ゴスッ!!

「うがっ!!ぐふっ!!」

「なのはをほったらかしにして、怖がらせて、それが兄貴のやることかよ!!」

ドグウッ!!!

「ぐはあっ!!!」

俺は一際強く拳を腹に叩き込む。こいつのひん曲がった根性を叩き直すように。

「恭也、兄貴ってのがどうして一番最初に生まれてくるか知ってるか？」

俺は一度殴るのをやめる。

「え・・・・？」

「それはな、後から生まれてくる弟や妹を護るためだ」

「！！」

「その兄貴が、自分の妹を苦しめてんじゃねぇっ！！」

「・・・・・・」

「お前の父親に比べればどうってことねぇだろうがな」

俺は拳を思いっきり振りかぶる。

「少しだけお前の目を覚まさせてやる。自分のやるべきことがなんなのか、もう一度よく考えやがれ！この馬鹿野郎！！！」

ドゴァ！！！

「ぐふあぁぁ！！！」

止めの一発を顔面に叩き込んだ。恭也は吹っ飛んでそのまま壁に激突して、そのままずり落ちると気絶したのか動かなくなった。

こうして俺と恭也の対決は終わった。

第十話　対決　御神の剣士（後書き）

いかがでしたでしょうか？お楽しみいただけたのならよかったです。

それでは今回はこの辺で。皆様からのご意見、ご感想お待ちしております。

ではまた次回お会いしましょう。

なるべくはやく無印編に入れるように頑張ります。

それでは！！

第十一話　これからのこと（前書き）

時間ができたので更新しました。

次の次あたりから無印編に入っていきたいと思います。

では第十一話始まります。

第十一話　これからのこと

Ｓｉｄｅ燎

恭也との戦いが決着して、俺は今翠屋で桃子さんお手製のショートケーキを食べている。ちなみに恭也はあの後帰ってきた美由希さんが部屋に運んで行った。

「いや～、ほんと美味い。これなら商売繁盛間違いなしですよ。桃子さん」

俺は出されたケーキをパクパク食べながらケーキの味を称賛した。いや、まじで美味いんだってこれ。

「そういってくれると嬉しいわ。遠慮しなくていいからどんどん食べて頂戴ね？」

笑顔で言う桃子さん。

「はい！あ、紅茶のお代わりください」

と、紅茶のお代わりを頼む俺。

「は～い。美由希、お願い」

美由希さんを呼ぶ桃子さん。

「はーい、紅茶ね」

返事が返ってきて、奥から女性が出てきた。眼鏡に髪を三つ編みにした女性だ。そうこの人が、なのはのお姉さんの高町美由希さんだ。

「はいどうぞ、燎くん」

俺のところまで来て、カップに紅茶を注いでくれる美由希さん。

「ありがとうございます、美由希さん」

美由希さんにお礼を言う。

「うん。でも、ほんとにすごいよね～燎くん。まさか恭ちゃんに勝っちゃうなんて」

笑いながら自分の兄を負かした俺を称賛する美由希さん。

「うん！りょうくんすごく強かったの！！」

嬉しそうにそう言うのは、俺の前で同じようにケーキを食べるなのは。

「でも燎くん、ほんとにごめんなさいね。うちの恭也が・・・・」

桃子さんが申し訳なさそうに言ってくる。

「いえ、平気です。俺のほうも少しやりすぎちゃったと思うし」

ま、確かにすこしやりすぎであったとは思う。いくら頭に血が上ってたとはいえ気絶するまでする必要はなかった。

「いいのよ。気にしないで。子供相手にむきになった恭也が悪いんだから」

「そうだよ。それにここのところ、恭ちゃんちょっとやりすぎてたから、いい薬だよ」

二人は気遣うように言ってくれる。そう言ってくれると少し気分も軽くなる。

「それにしてもなのは、燎くんってそんなにすごかったの？」

と、ふいに美由希さんはになのはに訊く。

「うん！りょうくんすっごくかっこよかったの！！お兄ちゃんの剣片手で受け止めちゃったんだよ」

嬉々として俺と恭也の勝負を語るなのは。

「へえ～、すごいねぇ。あたしでも未だに恭ちゃんの剣は中々見切れないのに」

感心したように言う美由希さん。

「いえ、たまたまですよ。それにあの時の恭也さんの動きはすごく単純でしたから。あれなら美由希さんも見切れますよ」

そう、実際あの時の恭也は怒りに身を任せすぎていた。怒りは確かに普段以上の力を与えてくれるがそれに溺れていまうのは三流のすることだ。もし恭也が怒りを制御して挑んできていたら正直危な

かったと思う。

「それでもすごいよ。燎くんってなにか格闘技でも習ってるの？」

興味深げに訊いてくる美由希さん。

「ええ、まあ・・・そんなとこです」

俺は言葉を濁す。正直に言えば俺には格闘技の心得などない。そんな俺が恭也に勝てたのは恭也が俺の挑発に見事に乗ってくれたのとルティアさんのおかげでＥＸランクになっている俺の身体能力、そして俺の前世の経験のおかげだ。

俺は前世で不良やチンピラに絡まれている友人やクラスメート、同じ学校の生徒を見かける度に助けていた。そんなことをしているうちにケンカの腕が上がってしまったのだ。おかげで町の不良共の間ではちょっと名の知れた有名人になってしまった。ま、今の俺にはもう関係のない話だが。

「ふ～んそっか。ね、今度はあたしとも手合せしない？」

と、美由希さんが俺の顔を覗き込んでそんなことを訊いてくる。

「え～っと、まあ・・・・機会があったら」

俺は曖昧に返事をする。不必要な戦いはしたくないんだがな・・・・。

「うんっ、楽しみにしてるね」

美由希さんはなんともいい笑顔で言ってくる。

「じゃあ、りょうくん。なのはともまた遊ぶ約束しよ?」

こんどはなのはが笑顔で言ってきた。

「ああ、もちろん。いっぱい遊ぼうな」

これには俺ははっきりと返す。

「うんっ、えへへ」

ご機嫌な表情のなのは。こんな約束で笑ってくれるならいくらでもしてやろうって気になってくる。

「あらあら、すっかり仲良しさんね」

そんな俺たちの様子を桃子さんが微笑ましい感じで見ている。

「うん!だってなのはとりょうくんはともだちだもん!!」

満面の笑顔を見せてくれるなのは。その笑顔とその言葉になんだかとても満たされる気持ちになってくる俺。今心から思う。ああ・・・この子を救えて良かった・・・・と。

「あらあら」

「あはは」

そんなのはを桃子さんも美由希さんも嬉しそうに見つめる。

「ふう～、ごちそうさまでした。さてと・・・じゃあそろそろ帰ります」

俺はケーキを食べ終えて席を立つ。

「えっ？りょうくん帰っちゃうの？」

なのはが寂しそうに訊いてくる。

「うん。いい加減帰らないと家族が心配するから」

「そっか・・・そうだよね」

しゅんと項垂れるなのは。本当に残念そうだ。俺はなのはの頭に手を置いて優しく撫でてやる。

「大丈夫だよ、また遊びに来るから。約束しただろ？」

「・・・・・うん！」

顔を上げて笑顔を見せてくれるなのは。

「じゃあ、桃子さん、美由希さん、ごちそうさまでした。ケーキ、おいしかったです」

桃子さんと美由希さんにお礼を言う。

「どういたしまして。また来てね」

「いつでも歓迎するから」

二人も笑って答えてくれる。

「はいっ・・・・あ、桃子さん？」

「なに？」

「あの・・・・よければケーキを二つほど貰えませんか？家族にも食べさせてあげたくて」

俺は少し図々しいかと思ったが桃子さんに訊いてみた。俺だけ翠屋のケーキを食べたことがヴィルヘルミナとエヴァに知られたらどんな目に合わされるか・・・考えただけでも恐ろしい。俺の脳裏に般若のオーラを出した二人の姿が浮かぶ。

「ええ、もちろんいいわよ。ご家族の方にもうちの味を知ってもらいたいし」

桃子さんは笑顔で承諾してくれた。

「ありがとうございます」

俺はペコリとお辞儀をする。

そして俺はエヴァにショートケーキ、ヴィルヘルミナにチョコレートケーキを貰い、店を出た。

俺は家への道を歩きながらこれからのことを考えていた。そう、これからなのはが巻き込まれることになるそして、俺が介入してい

くことになる事件のことを。

プレシア・テスタロッサが引き起こすジュエルシード事件。

呪われた魔導書闇の書を巡る闇の書事件。

そして十年後に起こるだろう狂気の科学者ジェイル・スカリエッティと戦闘機人たちによるＪ・Ｓ事件。

さらにはその後にある犯罪者一家フッケバインファミリーやエクリプスウィルス感染者たちとの死闘。

それだけではない。ルティアさんが言っていた俺がこの世界に来たことによって起こるイレギュラーのことも。

それらを思い、俺はこれから一緒に戦っていくことになる相棒たちに訊く。

「なあ、アラストール、マルコシアス」

『む？どうした？』

『あん？なんでえ？』

「俺は・・・・護れるのかな？なのはを、フェイトを、はやてを、みんなを・・・・護れるのかな？」

俺は自分の中にある不安を口にする。護れるのだろうか？護り切れるのだろうか？護り通せるのだろうか？そんな不安が俺の心を締め付ける。

そんな俺の問いに二人は・・・・・・。

『ふん・・・・何を言っている』

『けっ、何言ってやがる』

「・・・・・・・・え？」

『『当たり前だ（じゃねえか）』』

本当に至極当然のように答えた。

「！！」

『お前は誓ったのだろう？あの子を護ると、これから出会う者たちを護ると、ならば何を恐れる必要がある？』

『お前ぇはただ、自分のやりてぇことを、やりてぇようにやりゃあいいのさ。俺たちはどんな時でもそれに力を貸すだけだ』

二人の言葉が俺の心に深く染み込む。

『そして、忘れるな。お前は一人で護るのではない』

『俺たちと一緒に護るんだ』

その言葉は俺の心を締め付けていた不安を根こそぎ消し去っていく。

『我らは常にお前と共にある。お前が望むのなら、我らは盾にも、剣にもなろう』

『そのために俺たちはお前と一緒にいるんだからな』

なんだろう。心がすごく暖かくなってくる。

『共に行こう！そして共に護ろう！我らが主よ！！』

『行こうぜ！我が爪牙の担い手、神薙燎！！』

不安は全て消し去られた。

「・・・ああ・・・ああ！！」

二人の言葉に俺は力強く答える。そうだ。何を不安に思うことがある。俺は一人じゃない。俺には一緒に戦う仲間が、一緒に大切なものを護る仲間がいるんだ。

これからたくさんの困難や強敵が立ちはだかるかもしれない・・・だからどうした。それがどうした。そんなもので俺が歩みを止めるものか。俺は誓ったんだ。なのはたちを護ると、彼女たちの運命を変えてみせると。必ず護って見せる。そのために俺はここに来たのだから。

「行こう！！一緒に！！」

俺は前を向く、新たにした決意と覚悟を示すように。

必ず、護る。それを己の魂に誓って。

第十一話　これからのこと（後書き）

いかがでしたでしょうか？

前書きにも書きましたが次の次あたりで、無印編に入るのを予定しております。

感想、意見等がありましたら遠慮なくお送りください。いつでもお待ちしております。

ではまた次回お会いしましょう。

第十一話　全快パーティー（前書き）

次からようやく原作突入です。

これからはさらに気合を入れていきます。応援よろしくお願いします。

では第十一話始まります。

第十一話　全快パーティー

Ｓｉｄｅ燎

翠屋からの帰り道、俺は今日のことを思い返してみた。

なのはと出会い、士郎さんを治療し、翠屋へ行って恭也と決闘して、桃子さんにケーキをご馳走になった。

（なんか・・・今日は色々あったなあ・・・・・ちょっと疲れた）

そんなことを思っているうちにいつの間にか家に着いていた。俺は扉を開けて中に入る。

「ただいまー・・・・・ん？」

家の中から何やらいい匂いが漂ってきた。

（この匂いは・・・・・シチューか？）

俺は匂いのもとを辿って台所を覗いてみた。そこには・・・・・

「ヴィルヘルミナ？」

そう、ヴィルヘルミナが料理を作っていたのだ。

「！おかえりなさいであります」

『帰宅歓待』

俺に気づいたヴィルヘルミナとティアマトーがお帰りと言ってくれる。

「ああ、ただいま・・・・・なにしてるの？」

俺は思わず訊いてみた。

「？見ての通り夕飯を作っているところでありますが？」

『晩餐準備』

二人は不思議そうに答える。

「料理・・・・できるの・・・・・？」

俺は少しおかしく思った。俺の記憶が正しければ、原作のヴィルヘルミナは料理ができなかったはずだ。これはいったいどういうことだ？確かに夕飯の準備をしておくとは言ってたが、俺はてっきり弁当でも買ってくるものとばかり・・・・。

「私は燎様の身の回りのお世話をするために女神から家事能力を与えられているのであります」

不思議に思っている俺にヴィルヘルミナがそう教えてくれた。

（そういうことか・・・・ルティアさん・・・・・・・なんというか・・・まあ・・・・・グッジョブだ）

俺は心の中で俺をこの世界に送ってくれた女神様に親指を立てた。

「燎様、そろそろ出来上がるのでエヴァンジェリンを呼んできてもらってもいいでありますか？」

「ああ、わかった」

俺はヴィルヘルミナに頼まれてエヴァを呼びに行った。

「お～い、エヴァ。ご飯だぞ～」

エヴァの部屋の前に立ってエヴァを呼ぶ。

「ああ、すぐ行く」

部屋から返事が返ってきた。俺は返事を聞いて居間に戻った。

戻ってみるとすでにヴィルヘルミナが三人分のシチューを用意していた。

「ほお、今日はシチューか」

俺のすぐ後からきたエヴァが湯気がのぼるシチューを見て言う。

「美味しそうだな」

俺はシチューの出来栄えを見て感想を言った。

「冷めないうちにどうぞであります」

俺とエヴァは自分の席についた。

「それじゃあ、いただくか」

「はい」

「うむ」

「「「いただきます！」」」

俺たちは同時にシチューを口に入れた。

結論から言うとヴィルヘルミナの作ったシチューは最高の出来だった。

しばらく経って俺たちはシチューを食べ終わった。

「ごちそうさま～」

「うん、美味かったぞヴィルヘルミナ」

「恐縮であります」

いや、ホントに美味かった。俺とエヴァなんて三杯ほどお代わりをしてしまった。

「さて、夕飯も食べたしお次はデザートだな」

そう言って俺はお土産をテーブルに乗せる。

「？燎様、それは？」

「燎、なんだそれは？」

二人が質問してくる。

「今日、出かけたときにいい店見つけてさ、買ってきたんだよ」

俺は箱を開けて中を見せる。

「これは・・・・」

「ほお、ケーキか」

中には三つのショートケーキが入っていた。

「二人にお土産。ヴィルヘルミナ、お皿持ってきてくれる」

「はいであります」

俺に言われてヴィルヘルミナはすぐさま皿を三つ持ってきた。俺はケーキを皿にのせる。

「はい、どうぞ」

一つづつケーキを二人に差し出す。

「わざわざ、買ってきてくれたのでありますか？」

「我らがマスターは気が利くな」

二人は嬉しそうな感じだ。

「それじゃ、いただきます」

俺たちはケーキを食べる。・・・・うん、やっぱり美味いな。

「こ、これは・・・・」

「な、なんと・・・・」

二人はスプーンを持った手をプルプルと震わせている。

「う・・・・うまい！」

「見事な味であります」

どうやら、翠屋のケーキは二人の口に合ったようだ。

俺はケーキを食べながら、今日あったことを二人に話した。

こうして、俺のこの世界の初日は終了した。

それから数日間、俺はなのはと遊んだり、時折士郎さんを見舞って治療したりとそんな感じに過ごしていた。他にもヴィルヘルミナとエヴァを紹介したり、ヴィルヘルミナが桃子さんからお菓子作りを教わったりと大した事件もなく至って平和な日々が続いていた。

そんなある日、なのはから電話が掛かってきた。

「もしもし、なのは？どうした？」

「あ、あのね！りょうくん！おとうさんがね！怪我が治ってね！お医者さんからね！電話があって、それでこれからみんなでね！」

「・・・・うん、とりあえず落ち着け」

電話の向こうから聞こえてきたなのはの声はとても興奮していた。

ようするに士郎さんが目を覚ましたとお医者さんから連絡があって、それでこれから皆で会いに行くらしい。

「そっか・・・・よかったな、なのは」

「うん！！」

とても嬉しそうなのはの声、本当によかった。俺も頑張った甲斐があったな。

「それでね、りょうくん。おとうさんがたいいんしたらみんなでお祝いするんだけど、よかったらりょうくんやエヴァちゃんにヴィルヘルミナさんも一緒にどうかな？」

「それはうれしいけど・・・いいのか？」

「もちろん！お母さんもぜひきてほしいって！！」

そう言われたら断るのも失礼だな。

「わかった。お邪魔させてもらうよ」

「うん！じゃあまたね、りょうくん！」

「ああ」

話し終えた俺は電話を切った。さて、二人にもお祝いのこと伝えないとな。

それから一週間後、俺たちは士郎さんの退院を祝うために翠屋に来た。

「よく来てくれたね。初めまして、僕が高町士郎だよ」

士郎さんが笑顔で俺の頭を撫でてきた。

「初めまして、神薙燎です。退院おめでとうございます」

俺も挨拶を返した。

「あはは、どうもありがとう。そちらの二人も来てくれてありがとうございます」

士郎さんが後ろのヴィルヘルミナとエヴァにも声を掛けた。

「お気になさらず。呼んでいただき感謝するのであります」

「まあ、私は美味いケーキがたらふく食えると聞いて来たんだがな」

と、二人が返事をする。っていうかエヴァ、お前はちょっと自重しろ。

「あはは、もちろん。たくさんあるからね。好きなだけ食べていってくれ」

士郎さんは大して気にしたふうもなく俺たちを歓迎してくれた。

そして全快パーティーが始まった。

全員、それぞれにパーティーを楽しんでいる。ヴィルヘルミナは士郎さんと桃子さんと一緒に世間話に花をさかせている。エヴァは美由希さんと意気投合してケーキを食べまくっている。あれ？恭也の姿が見えないけどどこ行ったんだ？まあ、いいか。

そして俺はというと・・・・・・。

「はいりょうくん。あーんなの」

俺の隣に座ったなのはが俺にケーキを刺したフォークを向ける。

「い、いやなのは、自分で食えるから」

そうなぜか俺は今なのはにあーんをされているのだ。自分で食えると何度も言っているのに全く聞きゃしない。

「いいから。あーん」

さらにフォークを近づけるなのは。ったく、仕方ない。

「あーん」

俺は口を開けてケーキを口に入れる・・・・・うん、うまい。

「えへへ・・・・りょうくん、おいしい？」

「ああ、美味しいよ」

俺は笑って答える。

「えへへへ／／／／」

なんだかなのはの顔が赤いように見えるのだが・・・・気のせいか？

「おい」

ふいに後ろから声を掛けられて振り返ると恭也が立っていた。

「何か用か？」

俺は少し険しく訊いた。

「あー、その、なんというか・・・・だな」

なにやら、恭也が言いあぐねている。いったいなんだ？

「このあいだは・・・・すまなかった！」

いきなり頭を下げて俺に謝罪する恭也。・・・・え？なに、この状況？

「あのあと、お前に言われたことをよく考えてみたんだ。お前の言うとおり、俺がしなければならないことはあんなことじゃなかった。お前のおかげで目が覚めたよ。ありがとう」

恭也・・・・・・。

「別に、お礼なんていいよ。俺はただおせっかいを焼いただけだ。それに、お前が謝る相手はこっちだろ？」

俺は親指でなのはを指した。

「ふえっ！？」

いきなりふられてなのはは驚いた。

「・・・・ああ、そうだな・・・・・」

恭也はなのはと向き合う。

「なのは・・・ごめんな、お前もすごく辛かったのに、ずっとほったらかしにして。ホントに、駄目な兄貴だったな・・・・」

それは、恭也の心からの謝罪だった。それを受けたなのはは・・・・。

「ううん、そんなことないよ。お兄ちゃんだってつらかったよね。なのはも気づいてあげられなかったから、お相子だよ」

なのはは、恭也を許した。そして自分も同罪だと言った。

（やれやれ、やっぱり兄妹だな、この二人）

「なのは・・・これからも、俺はお前のお兄ちゃんでいて・・・いいかな？」

「うん。なのはもお兄ちゃんの妹でいたい」

二人はお互いを許しあった。これでもう、この二人はきっと大丈夫だ。

こうしてなのはと恭也は、再び兄妹の絆を結び合った。

第十一話　全快パーティー（後書き）

さて、次回からいよいよ無印編です。

けっこうかかってしまい、申し訳ありません。

こんな作者で恐縮ですがこれからもどうかよろしくお願いします。

感想、意見、いつでも受け付けます。

ではまた次回、お楽しみに。

無印編　第一話　原作の始まり（前書き）

ついに原作突入です。

はたして主人公は少女達を守り通せるのか。

ではお楽しみください。

あと、無印編のＯＰとＥＤ決めました。

無印編ＯＰ　ＴＥＲＭＩＮＡＴＥＤ：境界線上のホライゾンＯＰ

無印編ＥＤ　Ｉ'ｌｌ　Ｂｅｌｉｅｖｅ：灼眼のシャナ?ＥＤ

無印編　第一話　原作の始まり

Ｓｉｄｅ三人称

ドガッ！ガキッ！ゴガッ！

荘厳な雰囲気のある大理石の広間に衝突音が連続で響き渡る。その音を生んでいるのは広間を縦横無尽に駆け回り、飛び回る二つの影。神薙燎と彼の従者エヴァンジェリンだ。

彼らは今天道宮の大広間でこの三年間毎日続けている朝の模擬戦の真っ最中である。何度も何度も激突しては距離を取り、また激突する。それを繰り返し行っている。

ズガンッ！ドゴッ！バギンッ！

両者の激突は回を増すごとに激しくなっていく。それだけではない。二人の拳が蹴りが合わさる度に衝撃波が生まれ広間中に轟く。常人ではまず居留まる事すら不可能であろう。しかし、そんな状況で顔色一つ変えることなく二人の戦闘を見続ける者が一人。エヴァンジェリンと同じく燎の従者ヴィルヘルミナである。彼女はその場を一歩も動かず、向かってくる衝撃波を全身に受けてもまるで何も感じていないと言わんばかりに平然とその場に留まり二人の模擬戦とは言い難い模擬戦を見つめる。

「ははははっ、いいぞ燎！よくここまで強くなったものだ！」

「あったりまえだ！散々お前とヴィルヘルミナにしごかれたんだぞ、

強くならないわけが・・・ないだろ！！」

エヴァンジェリンの賞賛に燎は笑って答え、回し蹴りを放ち、エヴァを弾き飛ばす。

「ぐっ！」

エヴァは蹴りが当たる寸前で腕を交差させてガードした。そして空中で一回転し、着地した。

それを追って燎も大理石の床に下りる。

「さあ、まだまだいくぞエヴァ」

燎は構えをとり、全身に魔力を漲らせる。

「いいだろう。来るがいい！」

エヴァも受けて立つ気でいる。右手に断罪の剣を出した。

ゴガガガガガガ！！！！！

二人の体から溢れ出した魔力がぶつかり合い、せめぎ合っている。どう見ても模擬戦の域を逸脱していると思うのだが。

「おおっ！」

「はあっ！」

同時に床を蹴り、飛び出す両者。再度激突しようとした瞬間。

ピピピピピピッ

「そこまでであります」

『試合終了』

アラームが鳴り響き、ヴィルヘルミナとティアマトーが模擬戦の終了を告げる。

「うおっと」

「おっとお」

二人は何とか寸前で急ブレーキをかけて止まった。

「もう終わりか？」

「やれやれ、これからがいいところだったのに」

乗り気になっていたところで急に試合を止められて不満げなエヴァ。

「燎様、そろそろ支度をしなければ学校に遅れるのであります」

『早急準備』

「ああ、そうだな。じゃあ、俺は先に戻ってるから」

ヴィルヘルミナとティアマトーに言われて、家に転移しようとす

る燎。

「朝ご飯はすでに作ってあるのであります」

「ああ、ありがとっ」

ヴィルヘルミナに礼を言い家に転移した。

「しかし、燎のやつ、この三年でまさかここまでのものになるとはな」

燎を見送ってからエヴァがふいに感慨深げに言った。

「そうでありますな」

『同感』

ヴィルヘルミナとティアマトーも同意する。

「最初の頃は、私達に一撃すら当てられなかったというのにな」

そう、燎はヴィルヘルミナとエヴァと一緒に修行をし始めた時は二人に全く歯が立たなかったのだ。しかし今では、二人を同時に相手にしても引けを取らないどころか問題なく相手できてしまい、勝ててしまうぐらいの力量になっている。凄まじいまでの才覚である。

「そういえば、もうそろそろか」

「？・・・ああ、原作でありますか？」

「ああ・・・・・」

二人は天井を見上げる。この世界に来てから三年、まもなくリリカルなのはの原作が始まるのだ。自分達の主にとって、とても重要な時が。

「忙しくなるな」

「でありますな」

二人はしばらくじっとステンドグラスの張られた天井を見つめていた。

「ヴィルヘルミナ」

「？」

ふいに呼びかけられてヴィルヘルミナはエヴァに目を向ける。

エヴァもヴィルヘルミナに目を向けた。

「何があろうと・・・・必ず燎を守り抜くぞ」

その目はその覚悟を映し出したかの様に燦然と輝いていた。

「・・・・無論であります」

『絶対守護』

ヴィルヘルミナもまた覚悟を映した目でエヴァを見据え、ティマ

トーは覚悟を込めた声で答えた。

二人の従者は改めて決意の炎を己の魂に宿した。

Ｓｉｄｅ燎

朝の修行を終えて天道宮から戻った俺はヴィルヘルミナの作っておいてくれた朝ご飯を食べて制服に着替えた。もちろん私立聖祥大附属小学校の制服だ。着替えを終えてランドセルを背負い玄関で靴を履き、扉を開ける。

「いってきまーす！」

俺は勢いよく家を飛び出した。そのままバス停まで走る。

バス停に着いてしばらく待っていると二・三分ぐらいしてバスが来て乗った。

「あっ、燎くん、おはよー」

「おはよう、燎くん」

「燎、こっちこっち」

この三年間で聞き慣れた声が俺を呼ぶ。一番後ろを見てみるとよ

く見知った三人が居た。

そこにいたのはご存知聖祥の三人娘、俺の幼馴染の高町なのは、クラスメートで友達の月村すずか、同じくクラスメートで友達のアリサ・バニングス。

「おう、おはよう」

俺は挨拶をして三人が座っている場所に向かった。

さあ、いよいよ物語の幕が開く。必ず全ての悲しい運命を変えてみせる。

無印編　第一話　原作の始まり（後書き）

さあ、原作が始まりました。

これからどうなっていくのか、主人公はどのように物語を変えていくのか。

楽しんでいただければと思います。

では今回はこの辺で。

また次回をお楽しみに。

無印編　第二話　朝の会話・自分の将来（前書き）

突然ですが皆さん、子供のころの夢って何でしたか？

ちなみに私はサッカー選手でした。

と言ってもなりたいではなく、なれればいいなという感じでしたが。

皆さんはどうでしたか？

私は残念ながら断念してしまいましたが、いまこうして小説を書いて沢山の人に読んでもらっているのはとても楽しいです。

まあ、この話はこれぐらいにして・・・

では、無印編第二話始まります。

無印編　第二話　朝の会話・自分の将来

Ｓｉｄｅなのは

こんにちは、わたしは高町なのはといいます。聖祥大附属小学校に通う、ごくごく普通の小学三年生です。家族はお父さんとお母さん、それにお兄ちゃんとお姉ちゃんがいます。昔は色々とありましたが今では仲良し家族です。これも燎くんのおかげです。あ、燎くんというのはわたしの幼馴染の友達です。それで・・・・その・・・わたしの・・・・好きな人です／／／／。

もう三年越しの片思いです。でも、未だに燎くんは気付いてくれません。もうっ、燎くん鈍すぎなのっ！・・・・まあ、それはそれとして、今ではすずかちゃんとアリサちゃん、二人も友達ができて、毎日がとっても楽しいです。ところで今日、なんだか変な夢を見ました。真っ黒い怪物に男の子が襲われている夢です。それに夢にしてはなんだか妙にリアルでした。でも、ただの夢だと思って気にしないことにしました。

このとき、わたしはまだ知りませんでした。この夢がわたしの人生を大きく変える始まりであることを。

Ｓｉｄｅ燎

（今日の夢・・・ユーノだったな。じゃあ、今夜あたりが原作開始ってことになるのか。帰ったら二人にも伝えとかなきゃな）

俺はヴィルヘルミナの作ってくれたミニハンバーグを口に入れながら、今日見た夢について考えていた。あれがユーノなら、間違いなく今夜、なのはがユーノと出会い、魔法少女になる。色々と準備しておかなきゃな。

「・・・ょう・・・・りょう・・・・・燎ってば！」

「ん？」

いきなり名前を呼ばれたので俺は横を向いた。アリサがこっちを見ていた。

「なんだよ、アリサ？」

「なんだよじゃないわよ。さっきから呼んでるのに全然返事しないんだから」

どうやらかなり考え込んでいたらしい。

「ああ、悪いな。ちょっとボーっとしてた」

俺は素直に謝った。

「どうかしたの燎くん？」

今度はすずかが聞いて来た。

「なんでもないよすずか。ちょっとな・・・」

俺はそう言って誤魔化した。

「・・・・・・・・」

「・・・・？なのは？」

「ふえっ！？」

さっきからずっと黙りっぱなしだったなのはに声を掛けてみた。

なのはは俺の声に反応して驚いたようにこっちを向いた。

「な、なに燎くん？どうかした？」

慌てているなのはは少し可愛いと思ったのは内緒だ。

「いや、お前さっきから黙りこくったままだから」

「え？そ、そうだったかな？にゃははは」

俺の言葉に苦笑するなのは。

「どうしたんだ？」

俺はなのはに訊いてみた。

「うん・・・あのね、さっきの授業で先生が言ってた将来のことを考えてたんだ」

「将来？」

鸚鵡返しに訊く。

「うん・・・・」

将来、将来ねぇ。昼飯食ってるときに考えるようなことでもないと思うんだが。

「アリサちゃんとすずかちゃんと燎くんはもう大体決まってるんだよね？」

そうなのはが訊いてくる。なにか参考になるものがないか期待してるのだろうか？

「でも、全然漠然とよ。将来パパの後を継げればいいかなぁってぐらいだし」

「わたしは機械とか好きだから、工学系にすすめればなぁって思ってるだけだし」

アリサとすずかがなのはの問い掛けに答える。いや・・・・アリサ、すずか、それも小学三年生が考えるものとしては、どうなんだろう。

「そっかあ、燎くんは？」

今度は俺に振ってくる。

「俺か？俺は・・・・・・・・・別にないな」

ズルッ！

・・・・？なにやら横を向いてみるとなのはたちが椅子から滑り落ちそうになっている。どうかしたのか？

「あ、あんたねぇ、ちょっとは真面目に考えなさいよ！」

と、アリサが吠えてくる。結構真面目に答えたつもりなんだが。

「あはは、で、でも燎くんらしいかも」

すずかが苦笑しながら言ってくる。っていうかすずかよ、俺らしいってなんだ？

「そっか、燎くんはまだなんだ」

なのははすこし残念そうだ。どうやら期待してたものは得られなかったようだ。

「ま、そんなに焦って考えることもないだろ。俺たちはまだ小学三年生なんだ。考える時間なんてまだまだあるよ」

俺はなのはを元気づけるために言う。

「・・・・うん、そうだよね」

そう言ったなのはの表情は少しだけ明るくなっていた。

「でもさ、なのはは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

ふいにアリサが言ってきた。

「うん、それも将来のヴィジョンの一つではあるんだけど・・・」

そう言ってなのはは少し俯く。

「やりたいことがあるような気はしてるんだ。でも、それがなんなのかわからないって感じで。それにわたし・・・あんまりひとに自慢できるようなところもないし・・・・・」

そう言いながらどんどん暗い顔になっていくなのは。・・・・ったく、ホントにこいつは・・・・。

「バカチン!!」

ベチッ!

「うわっ!?」

いきなりアリサがなのはにレモンを投げつけた。レモンは見事になのはの頬に貼り付く。

「自分のこと簡単にそんなふうに言うんじゃないの!!」

アリサは自分を簡単に卑下したなのはに対して本気で怒っていた。まあ、気持ちは分かる。アリサがレモンを投げつけなきゃ、俺がこの馬鹿にデコピンをかましていた。

「そうだよ。なのはちゃんにしかできないこと、きっとあるよ」

すずかも同意してくる。この二人、性格は真逆だが、友達思いなところは一緒なのだ。類は友を呼ぶとはこのことか。

「だいたいあんたねぇ、理系の成績はこのあたしよりも良いじゃないの！それで自慢できるものがないとか、どの口で言うかぁ～」

アリサがなのはの頬を抓る。思いっきり抓る。なのはの頬がまるで餅のように伸びる伸びる。

「だ、だってなのは、文系苦手だし、体育も苦手だし～（泣）」

涙声でなのはが言う。その状態でまともに言えるとは器用な奴。

「あ、ああ、り、燎くん・・・」

すずかが困った感じで俺を見る。何とかして欲しいようだ。やれやれ、しかたがないな。

「おい、アリサ。その辺で許してやれよ。なのはも反省しただろうし」

俺がそう言うとアリサは俺を一瞥してなのはの頬から手を離した。

「まあ、いいわ。このぐらいで勘弁してあげる」

「あうう～、燎くん、ありがとぉなの」

なのはは真っ赤になった頬をさすりながらお礼を言ってくる。

「ま、あれだ。そんなに深く考える必要もないさ。別にやりたいことがなくても、将来素敵な相手を見つけて結婚して、幸せな家庭を作るってのも立派な夢だと思うぜ俺は」

「素敵な・・・・」

「相手と・・・・」

「結婚・・・・／／／」

何故か俺のほうを見ながら三人娘の顔が赤くなっていく。

「・・・・？どうかしたか？」

俺は不思議に思って訊いてみた。

「えっ？う、ううんっ／／／／」

「べ、べつに／／／／」

「な、なんでもないわよっ！／／／／」

と、三人は顔を赤くしたまま俺から顔を逸らした。なんなんだ、いったい？

「ね、ねえ」

「ん？」

ふいにアリサが口を開く。

「あ、あんたはさ、将来そんなふうに過ごせたらいいなって・・・・思うの？」

そんなことを尋ねるアリサ。

「あ？まあそりゃあな、そうできたらいいなって思うけど？」

と、俺は正直に答える。

「そ、そっかあ。そうなんだ。うふふふ／／／／」

「そっか、燎くんはそういうのがいいんだ。だったらわたしも・・・・／／／／」

「結婚、燎くんのお嫁さん、え、えへへへ／／／／」

なんだろう、なんだか三人が恐い。いったいどうしたというのだろう？

（なあ、アラストールよお・・・・）

（いうな、マルコシアス）

（（・・・・・・・・・はあ））

二機のデバイスは人知れずため息をついていたとか。

無印編　第二話　朝の会話・自分の将来（後書き）

さて、今日のところはここまでです。

お楽しみいただけたでしょうか？

ではまた次回お会いしましょう。

最近寒くなってきました。風邪などひかないようにお過ごしください。

それでは。

無印編　第三話　原作介入開始（前書き）

はい更新です。実は私少しばかり風邪を引いてしまいました。

といっても大したことはないんです。咳がと鼻が出るだけですから。

やっぱり、この季節は風邪を引きやすくなるんですね。皆さんも十分に注意してください。

それでは無印編第三話始まります。

無印編　第三話　原作介入開始

Ｓｉｄｅ燎

学校が終わって放課後、俺たちは雑談をしながら家路についていた。

「はぁ～あ、今日の授業も退屈だったな～」

俺は伸びをしながらぼやく。

「にゃはは、燎くん今日もほとんどの授業寝てたもんね」

俺の隣を歩いているなのはが苦笑している。

「まったく、なんでそれでいつもテストじゃいい点取れるのかしら」

アリサはなんだか納得いかないといった感じだ。・・・って言ってもな。俺の頭は二十歳の大学生なわけだし、小学校の勉強くらい簡単に解けなきゃみっともないだろ。

「でも、体育の時間じゃ、いつも通り活躍してたよね？」

と、今度はすずかが言ってくる。

「それはすずかもだろ。お前ホントに見かけによらず運動神経良いよな。どっかの誰かさんとは大違いだ」

そう、すずかは本当に見た目に反して運動が得意なのだ。これも夜の一族の血の影響なんだろうか。

「ねえ燎くん、そのどっかの誰かさんて誰のことなのかな？かな？」

なのはがジト目で俺を睨んでくる。しかも軽くひぐらし化してるし・・・・。

「さあ、誰のことかな？」

俺は口笛を吹いて目を逸らす。

「むう～。・・・・あ、そうだ燎くん。お母さんがねよかったらまたお店の手伝いして欲しいって言ってたよ」

「・・・・・・え？」

なのはの言葉に俺は固まってしまった。

「・・・・手伝い？」

「うん・・・・・」

「それってまた、あの服着て？」

「そう・・・・・かも？」

俺の脳に忌まわしい記憶がフラッシュバックする。あの悪夢がまた・・・・・・。

「なんで、男の俺があんな服着なくちゃいけないんだよ」

俺は脱力しながら愚痴る。

「にゃははは、でも似合ってたよ。燎くんのメイド服♪」

なのはが笑顔で言う。

ぎゃあああああ！やめろおおおおお！！言うなあああああああ！！・・・・・そう、以前俺は桃子さんにお店の手伝いをしてほしいと言われてどれでも好きなケーキ一週間タダの条件で引き受けたのだ。そのときに何故かメイド服を着させられて、お客さんたちに「いらっしゃいませ、ご主人様」と言いながら接客をさせられたのだ。そのときの翠屋はいつにも増して繁盛した。男だけでなく、女の人にまで人気があったのは意外だった。写メを取る人や、頭を撫でてくる人もいた。それだけならばまだいい。中には、危ない目をして俺を見てくる人もいた。正直に言ってあんなの二度とごめんだ。

ちなみにエヴァとヴィルヘルミナがメイド姿の俺を見たら鼻血が噴水のように吹き出てとてもいい笑顔で気絶した。

「なのは、桃子さんに言っといてくれ。女装なしなら引き受けるって」

俺はなのはに桃子さんに伝言を伝えるように言う。

「うん、わかったの。お母さんに言っておくね」

なのはは了承してくれた。俺は胸を撫で下す。ふぅ、これで女装させられる心配はなくなったな。

その後俺たちは雑談を続けながら歩いた。やがて雑木林のところを通り掛かる。すると・・・・。

（たすけて・・・・・）

「ん？」

「えっ？」

（今の声は・・・・）

聞こえてきた念話に俺は耳を澄ませる。

（おねがい・・・・だれか・・・・）

「え？なに？」

ふいになのはが立ち止まる。・・・・やはりなのはにも聞こえたか。

「なのは？」

「なのはちゃん？」

アリサとすずかも止まって振り返り、なのはを見る。

「どうした？なのは？」

俺はなのはに尋ねる。まあ、分かってるんだけどな。

「あの、燎くん。今、声が聞こえなかった?」

「声?」

・・・・やっぱりか。

「声ね。アリサとずすかは何か聞いたか?」

俺は後ろを振り向いて二人に尋ねた。

「ううん」

「わたしたちはなにも・・・」

二人は首を横に振って否定する。

「でも、今確かに・・・・」

(おねがい・・・たすけて・・・・・)

「!やっぱり聞こえた。・・・・こっち!」

ダダッ!

いきなりなのはは走り出し雑木林の中に入っていった。

「ちょ、なのは!?どうしたのよ!?」

「なのはちゃん!?」

ダダダッ！！

アリサとすずかもなのはを追って雑木林に入っていった。俺も三人の後を追う。

なのはの後を追って雑木林の奥に行ってみると、なのはがしゃがみ込んでいた。手に何かを抱えている。

「なのは！」

「なのは！」

「なのはちゃん！」

なのはは俺たちの声に反応してこちらを振り向く。

「燎くん、アリサちゃん、すずかちゃん・・・・この子・・・」

なのはは手に抱えていたものを見せる。

それは首に赤い宝石のついた首輪を付けたフェレットだった。・・・間違いない。ユーノだ。

「ちょ、どうしたのよ？その子？」

「怪我してるみたい」

二人は突然のことに対応できず慌てている。

「なのは、そのフェレットは？」

俺はなのはに事情を訊いた。

「あ、あのね、わたし、なにか声が聞こえたような気がして、来てみたらこの子が倒れてて・・・・」

なのはは狼狽えながらも説明した。

「そうか・・・・わかった。とりあえず、病院に連れて行こう。アリサ、確か近くに動物病院があったよな？」

俺はアリサに尋ねる。

「え？・・・う、うん。あるわよ」

アリサは戸惑いながら答えた。

「案内してくれ。このままだとヤバイことになる」

俺は真剣さをだしながらアリサに頼む。

「わ、わかったわ。こっちよ」

アリサは走り出した。そのあとを追って俺たちはユーノを連れて動物病院に向かった。

アリサの案内に従って俺たちは動物病院に辿り着き、ユーノを先生に診てもらった。

「先生、どうですか？その子の容体は？」

なのはが不安そうに先生に尋ねる。

「大丈夫。そんなに大した怪我じゃないから、少し休めばすぐによくなるわ」

先生は安心させるように言う。その言葉になのはたちはホッとする。

「あの、先生、この子・・・・フェレットですよね？」

ふいにすずかが先生にそんなことを訊く。

「フェレット・・・なのかしら？知らない種だけど・・・」

先生もよく分からないと言った感じだ。ま、無理もないかもな・・・。

「まあとりあえず、この子のことは私に任せてあなた達は今日はもう帰りなさい。あんまり遅くなると家の人が心配するわよ」

先生が俺たちに帰宅を促す。

「はい、お願いします。・・・・あれ？」

なのはがベッドで寝ているユーノを見る。

「なのは？」

「なのはちゃん？」

「どうしたのよ？」

俺たちも同じようにユーノを見る。

「あ、この子・・・」

「目を覚ましたみたい」

ユーノは震えながらも起き上がろうとするが、力が入らないのかうまくいかないらしい。

「これなら大丈夫そうね」

先生がフェレットの様子を見て言う。

「はい・・・・？」

（なのは？・・・・・・！こいつ・・・・）

なのはを見てる。どうやらなのはの魔力資質に気づいたようだな。

なのはが手を伸ばすとフェレットは匂いを嗅いだ後なのはの指の先

を軽く舐めた。・・・・ほほう、初対面の女の指を舐めるとは、噂に違わぬ淫獣ぶりだなユーノ。

なのはの指を舐めた後ユーノはまた気を失った。俺たちはユーノを先生に任せて家に帰った。

あれから時間が経って8時を回ったころ。ベッドの上で本を読んでいると、なのはからメールがきた。どうやら、ユーノを預かる許可を得られたようだ。俺はよかったな、と返信した。

さて、あとはユーノからまた念話が来るのを待つだけか・・・・。俺はベッドに横になりそれまで寝ておこうと目を瞑った。

（聞こえますか?・・・・僕の声が・・・・聞こえますか?）

・・・・・来たな。

（お願いです・・・・僕の声が聞こえた方・・・・僕のところまで来て下さい・・・・力を貸して欲しいんです。どうか・・・・お願い・・・・）

・・・ふう、やれやれ、仕方がない。行くとするか。

俺は起き上がりベッドから降りて部屋を出た。階段を下りて玄関に向かうとそこにはすでにヴィルヘルミナとエヴァがいた。どうやら二人にも念話が届いていたようだ。

「二人とも・・・聞いたな？」

俺は一応の確認を取る。

「はいであります」

『傍受』

「ああ」

二人は真剣な表情で答える。

「そうか・・・」

俺は二人の眼を見る。その眼には一片の迷いも見られない。

『・・・来たのだな・・・この時が・・・』

アラストールが重く言う。

「ああ」

俺は答える。

『ついに・・・・始まんだな・・・・』

マルコシマスが尋ねるように言う。

「ああ」

俺はもう一度答える。

「・・・・じゃあ皆・・・・・・行くか」

俺は共に戦うパートナー達に決意と覚悟を込めて言う。

『うむ』

『おう』

「（コクッ）」

『御意』

「ああ」

仲間たちはそれぞれに同じく決意と覚悟を込めて答える。

「よし・・・・行こう！！」

俺は扉を開けて外に出る。後にはヴィルヘルミナとエヴァが続く。

俺は外に出ると、魔力で身体強化し、屋根に上がる。ヴィルヘルミナとエヴァも俺に続いて屋根にあがる。屋根に上がると俺は手を

上にかざし、言葉を紡ぐ。己の力を呼び起す言霊を。

「燃え立つ空より来たりて！

正しき決意を胸に！

我は運命（さだめ）を変える剣を執る！

汝、罪を裁きし断罪の劫火！！

アラストール！・・・セットアップ！！」

『承知！セットアップ！！』

俺の全身を炎のような紅蓮の魔力光が包み込み、バリアジャケットを形成する。

形成し終わると俺を包んでいた魔力光が弾けて散った。そこにはバリアジャケットを着た俺がいた。

俺のバリアジャケットはアニメ第1話でシャナが登場したときに着ていた服の上に夜笠を着たものだ。腰には鞘に入った刀を差している。長さはＢＬＥＡＣＨの一護の天鎖斬月と同じくらいだ。この体には少し大きいが問題ない。

俺は準備をし終えて、二人と一緒に夜の町を飛んだ。目指すはユーノと恐らくなのはもいる動物病院。

俺たちが家を出て数分、動物病院が見えてきた。しかしそこは無

残な大穴が空けられていた。その病院だけでなく、周りの塀や電柱にも罅や大きな傷跡がついていた。

俺はこの惨状を作った元凶を探す。・・・・見つけた！そこには黒く禍々しい姿をしたジュエルシードの思念体がいた。

・・・・ん？あれは、なのはか。

思念体のすぐ近くにユーノを抱えて逃げ回っているなのはがいた。思念体は体から触手のようなものを出してなのはを追い立てている。なのははかろうじて思念体の攻撃を躱しているが、運動神経が切れてるなのはでは長くは持たないだろう。そして俺の予感は的中する。なのはは思念体が砕いた塀の瓦礫に足を取られて転んだ。思念体はその隙を逃さずなのはを捕えようと触手を放つ。

（なのはっ！！）

俺は炎髪灼眼を顕現させ虚空瞬動を使い一瞬のうちになのはと思念体の間に割って入り腰に差した刀を抜き思念体の放った触手を一本残さず切り落とした。

シュシュシュン！！・・・・・ボト、ボト、ボト。

「ふえっ！？」

なのはは可愛らしい声をあげる。

「よう、なのは。こんばんわだな」

俺はなんとも場にそぐわない挨拶をする。

「燎・・・・くん・・・・？」

なのはは信じられないものを見たような目で俺を見た。

「ああ、そうだよ。俺だ」

「な、なんで燎くんがここに？それにその恰好は・・・・・？」

なのはは混乱してるのかイマイチ状況を呑み込めていないようだ。無理もないがな。

「まあとりあえず、話は後だ。まずは・・・・」

「えっ？」

俺は目の前の思念体に目を向ける。思念体は邪魔されたことを怒っているのか異様な呻き声を出して俺を威嚇する。

「そこのヘドロみたいなでかぶつを片付けないとな」

俺は刀の切っ先を思念体に向ける。

「りょ・・・燎くん・・・・」

弱々しい声を聴いて振り向くとなのはが揺れる瞳で俺を見ている。

「大丈夫・・・・なのはは・・・・・・俺が護る」

なのはの目を見て迷うことなく決意を込めて宣言する。

「ふえっ!?／／／／」

なんだかなのはの顔が赤いような・・・・・気のせいか?

俺は再度思念体に目を向けた。そして声に怒りを滲ませて言う。

「おい、ヘドロ野郎。よくも俺の友達に手を出したな。お前に言葉を理解するだけの知能があるとは思わないが、言っておいてやる」

炎髪と灼眼がさらに輝きを増していく俺の怒りに呼応するかのように。

「お前は・・・震えたことがあるか?

その身を切り裂き、魂さえも凍てつかせる

死の恐怖を感じたことがあるか?」

俺は燃える灼眼で眼前の敵を見据え、覚悟の言葉を言い放つ。

「震えよ!!!畏れと共に跪け!!!」

炎髪灼眼の討ち手が修羅の巷に降り立った。

無印編　第三話　原作介入開始（後書き）

どうでしょうか。今回は中々の自信作です。

アラストールのセットアップの詠唱はデモンベインからとってみました。

燎の決め台詞は聖痕のクェイサーからです。

では次回もお楽しみに。

感想、意見、どんどん送ってください。

お待ちしております。

無印編　第四話　魔法少女誕生（前書き）

もうすぐ冬に入ってきますね。ますます寒くなってきますが体調の管理などお気をつけください。

私のほうは熱は一晩寝たらすっかり下がりました。

まあ、まだ咳と鼻が出るのですが・・・・。

皆さんも体を大事にしてくださいね。

では、無印編第四話始まります。

無印編　第四話　魔法少女誕生

Ｓｉｄｅなのはです。私は今日、放課後、燎くんとアリサちゃん、すずかちゃん、いつもの三人と一緒に帰る途中、不思議な声を聞きました。耳に聞こえると言うより、頭に直接響くような声でした。その声は、助けを求めていました。私はその声が聞こえたほうに走っていきました。雑木林を進んで少し開けたところにつくとそこに首に紅い宝石をつけたフェレットさんが倒れていました。

私を呼んだのは、この子・・・・？

私達は急いでそのフェレットさんを動物病院に運びました。そのあとフェレットさんを誰の家で預かるかを相談しました。アリサちゃんのところは犬をたくさん飼ってるし、すずかちゃんの家は猫さんがいるし、そうなるとなのはと燎くんの家ということになるのですが、私は夕飯を食べているときに皆にフェレットさんのことを話しました。私の家は喫茶店ですからちょっと心配でしたが、お父さんたちはＯＫをだしてくれました。私はそのことを燎くんたちにメールで伝えて寝ようとして目を瞑りました。しかし・・・・・。

（聞こえますか？・・・・僕の声が・・・・聞こえますか・・・・？）

「ふえっ！？」

これってフェレットさんを見つけたときに聞こえた声？

私は集中して聞こえる声に耳を傾けました。

（お願いです・・・僕の声が聞こえた方・・・僕のところまで来て下さい。・・・力を貸して欲しいんです。どうか・・・お願い・・・・）

「あ・・・ちょっと・・・・」

その声は聞こえなくなりました。これってやっぱりあのフェレットさんが・・・？わからないけど放っておけない。私は服を着替えてお父さん達に気づかれないように家を出ました。そのまま病院まで走りました。そしてようやく、病院のところまでくるとなんだか周りの雰囲気が変わったような気がしました。人気がなくなって少し不気味な感じです。なんだか怖くなって引き返そうと思いましたが、なんとか勇気を出して病院に入ろうとしたら、私の視界にあのフェレットさんが走っていくのが見えました。

「あっ、あれは・・・」

私はフェレットさんに駆け寄ろうとしましたがそれより先に黒い大きな影が現れてフェレットさんに襲い掛かりました。フェレットさんは間一髪で上に飛んで黒い影の攻撃をかわしました。そしてそのまま私のところに飛び込んできました。私はなんとかフェレットさんをキャッチしました。

「な、なになに？いったいなに！？」

私は状況がわからず混乱してしまいました。不思議な声に呼ばれたと思ったらいきなり変な影がフェレットさんを襲ってるし、いっ

たいなにがどうなってるの～!?

「きて・・・・くれたの・・・・・?」

・・・・・え?今のって・・・・・。

私はフェレットさんを見ました。

「あ・・・・ありがとう・・・」

う・・・・うそ・・・・。

「しゃ・・・しゃべった!?」

私は驚いてフェレットさんを落としそうになりました。な・・・なんで、フェレットさんが喋ってるの?

「あ、あの・・・あなたは、いったい・・・っ!!」

私がフェレットさんに聞こうとしたらあの大きな影がこっちに向かってきました。私はなんとかその影をかわしました。

「そ、その・・・なにがなんだかよく分からないけど、いったいなんなの?何が起きてるの?」

私はフェレットさんに何が起きてるのか訊きました。こんなのどう考えてもおかしいです。

「君には・・・資質がある。お願い・・・僕に少しだけ力を貸して」

私の腕の中でフェレットさんが言ってきました。

「資質？」

なんのことだろう・・・？

「僕は、ある探し物のために、此処とは違う世界から来ました」

違う世界？ますますわからないよ～。

「でも、僕一人の力では想いを遂げられないかもしれない・・・・だから、迷惑だと分かっているんですが・・・資質を持った人に協力して欲しくて・・・・」

それでわたしを呼んだの・・・・？

「お礼はします。必ずします。僕の持っている力をあなたに使って欲しいんです。僕の力を・・・・・魔法の力を！！」

「魔法・・・？」

魔法って・・・そんなものがほんとに・・・・？

「グルルルァアアアア！！」

「！！」

いつの間にか黒い影はすぐ近くまで迫っていました。影は体から触手のようなものをだして私を捕まえようとしました。私はそれをかわしながら逃げましたが、転がっていた瓦礫に足を取られて転ん

でしまいました。

「あうっ」

当然黒い影の怪物は私が転んだのを見逃さずまた私を捕まえるために触手を伸ばしました。

（助けて・・・燎くんっ・・・・・）

私は心の中でずっと思い続けている男の子の名前を呼びました。昔私が泣いていたとき、私を抱きしめて大切なことを教えてくれた男の子。初めて私の友達になってくれた女の子のような綺麗な顔をした男の子。私の大好きな男の子の名前を。

怪物の触手が迫ってきます。私は目を瞑りました。・・・しかしいつまでたってもなにも起こりません。私は不思議に思ってうっすらと目を開けました。そこには・・・・・。

「ふえっ！？」

私は思わず変な声を上げてしまいました。なぜならそこには・・・・・。

「よう、なのは。こんばんわだな」

「燎・・・・くん・・・・？」

まるで燃えているような綺麗な紅い髪と瞳をした私の好きな男の子、燎くんが立っていたからです。

（な、なんで燎くんが・・・・？それに、その髪と眼・・・・）

私は混乱していました。怪物に襲われそうになったら、髪と瞳が紅くなった燎くんが助けに来てくれるなんて、夢にも思いませんでした。でも、こんなときにおかしいですけど、燎くんの燃えているような紅い髪と瞳は暗い夜の中、より強く輝いていて、とても・・・・とても・・・・。

（綺麗・・・・・・）

私は今の燎くんの姿に見蕩れてしまいました。燎くんは手に持った刀を怪物に向けたままこっちを見て微笑みながら言いました。

「大丈夫・・・・なのはは・・・・・・・俺が護る」

その言葉を聞いて私は自分の顔が熱くなるのが分かりました。りょ・・・・燎くん／／／／。

そして燎くんは、怪物のほうに目を戻して強く言いました。

「震えよ！！！畏れと共に跪け！！！！」

そう言ったときの燎くんは、すっごく格好よかったです。

Ｓｉｄｅ燎

さて、なんとか間に合ったわけだな。後はこのヘドロ野郎を片付ければ良いだけだ。よーし・・・とその前に・・・。

（おいお前ら、手を出すなよ？こいつは俺となのはでなんとかする。二人は待機しててくれ）

俺は近くの家の屋根にいるエヴァとヴィルヘルミナに念話を飛ばす。

（了解であります）

（ふん、すこしつまらんが・・・まあ、いいだろう。お前の力、見せてやるがいい）

二人の了解が取れたところで、俺は両手で剣を正眼に構える。

「あ・・・あの」

「ん・・・？」

呼びかけられて振り向くとユーノがなのはの腕の中で俺を見ていた。

「あなたは・・・・魔導師・・・・なんですか？」

ユーノはそう質問してきた。まあ、気になるだろうな。この世界は管理外世界だし魔力資質の持ち主は滅多にいないからな。

「ああ・・・・一応な」

俺は無難な答えを返す。

「それよりも、おいフェレット、あれは一体なんだ?」

俺はユーノに思念体のことを訊く。ホントは知ってるんだけどな・・・。

「あれは、ジュエルシードが暴走した思念体です」

ユーノは俺の問いに真剣に答えた。

「ジュエルシードって・・・・ロストロギアじゃないか。なんでそんなものがここに?」

俺は再度聞く。・・・・知ってるけど。

「それは・・・・っ!あぶない!」

ユーノが叫ぶ。思念体が痺れを切らして襲い掛かってきたのだ。

だが・・・・

「遅い!!」

俺は思念体の強襲を見切り、すれ違いざまに刀を横一線に薙ぐ。

「ギェアアアア！！！」

思念体はすさまじい叫び声をあげる。

「す・・・すごい」

ユーノは俺の力量を見て感嘆の息をもらす。

「おいフェレット！なにか手があるならはやくやれ！こいつは俺が抑えておいてやる！！」

俺はユーノに向かって叫ぶ。

「は、はいっ！」

ユーノの返事を聞いて、俺は再び思念体と向き合う。さあて、こっからが本番だ。

俺は刀を構えて思念体に向かって走り出した

Ｓｉｄｅなのは

燎くんが怪物と戦っています。でも私はただ見てるだけです。なんだかすごく悔しいです。私にも力があれば燎くんと一緒に戦えるのに。力が・・・・欲しい。燎くんと一緒に戦える力が・・・・燎くんを助けられる力が・・・・欲しいよ。

「あのっ」

「えっ？」

フェレットさんに呼ばれて私はフェレットさんを見た。フェレットさんは首についている紅い宝石を口にくわえて私に差し出した。

「これを」

「これは・・・？」

私は宝石を手にとった。

「それはデバイスといって、魔法を使うための道具のようなものです」

「デバイス」

「それを使えば、あなたの中に眠っている力を目覚めさせることができます」

「眠っている・・・力？私に・・・そんなものが？」

「はい」

フェレットさんは迷わず頷いた。私にも力がある。なら・・・・燎くんの力になれるかもしれない！

「フェレットさん！使い方を教えて！私、燎くんを助けたい！！」

そう言ったとき、私の心に迷いはありませんでした。初めてあったとき、私を暗闇から救ってくれた燎くん。大切なことをたくさん教えてくれた燎くん。燎くんのおかげで私は家族とも向き合えたし、アリサちゃんやすずかちゃんとも友達になれた。だからもし、燎くんが困っていたら、苦しんでいたら今度は私が燎くんを助ける。ずっとそう思っていました。だから・・・・。

「私は戦う。私の力で燎くんを・・・大切な人たちを護れるなら。私は・・・・戦う!!」

キイイイイイン!!!

「ふえっ!?」

「これは・・・・」

手が暖かくなっていくのを感じて見てみると、私の手にある宝石が輝いていまいした。

「デバイスが・・・あなたを主に選んだ・・・」

「え?」

「いいですか?これから僕が言うことに続いて言って下さい」

「う、うん」

「いきますよ・・・我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

私はフェレットさんに言われたとおり続いて言葉を紡ぐ。それはまるで呪文のような言葉。

「契約の下、その力を解き放て」

「契約の下、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

その呪文を紡ぐたびに私の中にある心臓じゃない何かが激しく脈打つのが分かる。

「そして、不屈の心は・・・」

「そして、不屈の心は・・・」

最後の呪文を紡ぐ。鼓動が最大にまで高まる。

「「この胸に!!!」」

ドクンッ!!

「「この手に魔法を!!!」」

私は腕を上げデバイスを高く翳した。そしてこれから一緒に戦っていく私の相棒の名前を呼んだ。

「レイジングハート・・・セットアップ!!」

『スタンバイレディ・・・セットアップ!!』

レイジングハートの声が聞こえて桜色の光が私の体を包み込んだ。

Ｓｉｄｅ燎

思念体と戦っていると、後ろから凄まじい魔力を感じて振り返ると桜色の閃光が天を衝かんばかりに伸び上がっていた。その光景はどこか神秘的なものを感じさせるものだった。

「魔法少女の誕生だな」

俺はそんなことを呟いた。

今、少女の物語は幕を上げた。

無印編　第四話　魔法少女誕生（後書き）

いかがでしたでしょうか。ついになのはが魔法少女として覚醒しました。

さて、今回は皆さんにお願いがあります。

燎の使うオリジナル魔法・技なのですが、なにかいいものが思い浮かんだなら是非とも送っていただければいいなと思います。もちろん私のほうでも考えていますが一人だとやはり限界があるので、できたら協力していただけるとありがたいです。

ほかにも感想・意見・誤字脱字の指摘等、どんどん送ってください。お待ちしております。

それではまた次回をお楽しみに。

ご協力お願いします。

無印編　第五話　ジュエルシード封印（前書き）

近頃、冷え込んできましたが、皆さんはお体のほうは大丈夫ですか？

体調を崩さないようにお気を付けください。

私のほうはもうすっかり良くなりました。

それでは無印編第五話はじまります。

無印編　第五話　ジュエルシード封印

Ｓｉｄｅ三人称

桜色の閃光が夜の闇を瞬く間に駆逐していく。どこか幻想的とさえいえるその光景のなか異世界からの来訪者ユーノは目の前の現象に固唾をのんだ。

「なんて・・・魔力だ」

ユーノが驚くのも無理はない。なのはの体から溢れ出る魔力の総量は軽く見積もっても間違いなくＡＡランクを超えている。まさか管理外世界の魔力保持者が滅多にいないこの地球でこれほどの魔力の持ち主が見つかるとは思わなかったのだろう。ユーノにとってはなんとも嬉しい誤算だった。

「フェ、フェレットさん、これ、どうしたらいいの・・・？」

桜色の光の中から、なのはの声が聞こえてきた。どうすればいいのかわからず戸惑っているようだ。その声にユーノははっと我にかえり、なのはに指示を送るべく念話を飛ばす。

（お、落ちついて、まずはバリアジャケットをイメージするんだ。自分の身を護るための服を。そして君が魔法を使うための武器である杖を）

「わ、わかった。やってみる」

なのはは桜色の光のなかで思い浮かべる。己の身を護るための強靭な鎧となる服を、そして自分の相棒に戦う為の武器としての形を与える。

ゴオオオォォォ！！

光は徐々に収束していきやがて球状になる。そして突如その光の玉が弾けた。四方八方に飛び散った光の玉の残骸は大気に消えていった。そこに現れたのは白を基礎とした服に赤いリボンを付けたコスチュームに身を包み、その左手に先端に半月状の金の輪の中に大きさを増した赤い宝玉の浮かぶ杖を持ったなのはがいた。

「ふぇ～・・・すごい、これが魔法なんだ・・・・」

なのはは目を見開いて自分の姿を凝視する。自分でやったこととはいえ、こんなにも簡単にいくとは。

「あっ、そうだ。燎くんを助けなきゃ！」

なのはは、はっと当初の目的を思い出し未だに怪物との戦闘を続けている燎のほうに目を向けた。そこにはまるで舞い踊るように立ち回り、鮮やかな剣技で怪物を圧倒し追い詰めていく燎のすがたがあった。

Ｓｉｄｅ燎

ジュエルシードの思念体が獣のような叫び声をあげて四つの触手を俺へと放つ。俺はそれを全て見切り躱して、瞬動で思念体の懐に飛び込む。そして下段に下げていた刀を真上に切り上げる。思念体

の顔の部分に縦一文字の傷ができる。

「ガアアアァァァ！！」

思念体はまたも叫び声をあげる。しかしこいつ、何度切っても、突いてもすぐさま再生してしまうのだ。現に今しがた付けた傷は瞬く間に回復してしまった。斬っては治り、また斬ってはまた治る。さっきからこれの繰り返しだ。いい加減うんざりしてくる。いっそ魔法使ってこのでかぶつ消し飛ばしてやろうかと考えたがやめた。下手に強力な魔法ぶつけて、ジュエルシードを暴走させたら元も子もない。ここはやはり、なのはに任せよう。と、俺が思考していると後ろから、

「燎くんっ！右に避けてっ！！」

なのはの声が聞こえてきた。俺は反射的に後ろを振り返るとそこには、

「ディバイイイィィィン・・・」

レシジングハートの先端をを音叉のような形に変えてその先端に桜色の光を構えたなのはがいた。俺はそれを認めると口端を吊り上げて言われた通り右に跳んだ。

「バスタアアアァァァァ！！！」

俺が右に避けた一瞬後に桜色の砲撃が先ほど俺が立っていた場所を通り抜けた。その桜色の砲撃は狙いを過たず不意を突かれて動けなかった思念体を呑み込んだ。

「！！！！！！！」

思念体は叫び声を上げることも許されず桜色の極光に呑み込まれて消滅した。

思念体を完全に討滅した極光は徐々に細くなっていき、ついには消えた。俺は思念体が消滅した場所をみるとそこには、青い燐光を放つひし形の宝石が浮いていた。・・・あれがジュエルシードか。

「燎くんっ、大丈夫！？」

なのはがこっちに駆け寄ってきた。俺は振り返って返事をする。

「ああ、大丈夫だよ。お前こそ怪我とかないか？」

俺は逆になのはに訊いた。

「うん。大丈夫」

なのはは笑って答えた。俺は一先ず安心する。

「ねえ、燎くん・・・・あれって・・・」

なのはがジュエルシードを指差す。

「ああ。あれがジュエルシードだよ。そうだろ、フェレット」

ユーノに目を向けて訊く。

「は、はい。そうです」

「そっか。えっと・・・どうすればいいのかな?」

「はい。そのレイジングハートでジュエルシードに触れてください」

なのははユーノに言われた通りにジュエルシードに近づいてレイジングハートをジュエルシードに向けた。

「えっと・・・こう?」

レイジングハートがジュエルシードに触れた。

『シーリング』

レイジングハートの声が聞こえるとジュエルシードが一瞬光り、レイジングハートのコアの中に収納された。

「よかった・・・ありが・・・とう・・・」

ジュエルシードが封印されたのを見届けるとユーノは安心したのか糸が切れたように気を失った。

「あっ・・・ちょ、ちょっと・・・・」

なのはいきなり気絶したユーノを慌てて抱き上げた。

「ど、どうしよう?燎くん・・・」

おろおろした感じで俺を見るなのは。

「うーん、そうだな・・・」

俺は顎に手を当てる。

「とりあえず・・・逃げるか？」

「え・・・・・？」

なのはは何を言ってるのかわからないといった顔をした。

「聞こえないか？この音」

「音・・・・？」

俺の言葉になのはは耳を澄ませる。

ファーン、ファーン、ファーン。

「・・・え？これって・・・・」

「警察だな。間違いなく」

俺は断言した。というかこれだけの騒ぎを起こして警察が来ないほうがおかしいだろ。

「にゃあああああ！！ど、どうしよう～～～！！」

慌てふためくなのは。見てると結構面白いな。ま、今はそんな場合じゃないか。

「落ち着けなのは！」

なのはを落ち着かせるために少し強く言う。

「で、でも・・・燎くん」

涙ぐんだ目でこっちを見るなのは。

「とにかく、今はここから離れるんだ。そのフェレットのことも気になるし」

「う・・・うん。わかった」

こくりと頷くなのは。

「よし・・・・ヴィルヘルミナ！」

シュンッ

「はい」

俺の声に応えてヴィルヘルミナが即座に俺の後ろに現れた。

「ふえっ！？ヴィ、ヴィルヘルミナさん！？」

なのはが驚きの声を出す。

「私もいるぞ」

シュンッ

「え、エヴァちゃん!?」

続いてエヴァが出てくる。

「な、なになに、これ。いったいどうなってるの!?なんで二人が!?」

うーん、完全にパニック状態だなこれは。無理ないけど・・・。

「説明は後でな。ヴィルヘルミナ、なのはを頼む。急いでここを離れるぞ」

「了解であります」

『承知』

「やれやれ、慌ただしいな」

できれば、この辺りを直してから行きたいんだけど、そんな暇ないか・・・・。

「よし、行くぞ」

「失礼するのであります。なのは嬢」

「ふえっ!?」

ヴィルヘルミナがなのはをお姫様抱っこする。

「あ、あの、ヴィルヘルミナさん？」

「燎様でなくて申し訳ないのであります」

ヴィルヘルミナがなのはになにか耳打ちする。

「にゃあああああああ！！！／／／／／」

ボンッ！！

なのはの顔が真っ赤になり、なにやら湯気が出てる。おいヴィルヘルミナ、お前なのはに何を言ったんだ？

「特に大したことは」

『些少言辞』

しれっとした顔で言う鉄面皮メイド。しかし俺の直感がこれは嘘だと告げている。言及したいところだが今はそれどころじゃない。俺たちはサイレンの音を背に地面を蹴り、屋根へと上がり、そのまま屋根から屋根へと飛び移り、その場を離脱した。

「ごめんなさ～～～～い！！！」

ヴィルヘルミナに抱えられたなのはの謝罪が夜の街に木霊した。

無印編　第五話　ジュエルシード封印（後書き）

いかがでしたでしょうか。

もっと更新速度を上げられればいいのですが、なかなか難しいです。

冬休みに入れば時間も取れるかと思いますが。

では今回はこの辺で失礼します。

くどいようですが、体調の管理にお気を付けください。

次回をお楽しみに。

無印編　第六話　異世界からの来訪者（前書き）

あと一週間で十二月突入ですね。

きっとこれから、ますます寒さが増すでしょう。

防寒対策は万全ですか？

それでは無印編第六話始まります。

無印編　第六話　異世界からの来訪者

Ｓｉｄｅ燎

ジュエルシードの思念体を撃破し、無事ジュエルシードを封印することに成功した俺たちは気絶したユーノと混乱しているなのはを連れて、警察が来る前にその場を後にした。そして俺たちは公園に来ている。今はユーノが目を覚ますのを待っている状態だ。なのはは自分の腕の中で気を失っているユーノを心配そうに見つめている。

「う・・・うん・・・」

おっ、どうやらお目覚めのようだな。ユーノはゆっくりと目を開けて、首を上げる。

「あっ、気が付いたんだね。よかったぁ」

なのはが安心したように言う。ま、いきなり気を失ったんだしな。心配にもなるか。

「もう、大丈夫なのか？」

俺は一応ユーノに訊いておく。

「あ、はい。お二人のおかげで自己回復に専念することができましたから」

ユーノは元気そうに答える。これなら心配いらないか。

「そうか」

俺は相槌をうつ。

「さてと、目が覚めたばかりで悪いが、お前は一体誰で、一体何が起きているのか説明してもらおうか」

俺はユーノに先程の思念体のことと、自分のことを話すように要求する。

「はい、わかりました。お話しします」

ユーノは姿勢を正して説明を始める。

「まずは自己紹介を。僕の名前はユーノ・スクライアといいます。スクライアが部族名だから、ユーノが名前です」

そう言って自分の名前を名乗るユーノ。・・・俺は知ってるけどね。

「ユーノくんっていうんだ。わたし、高町なのは。よろしくね」

「俺は燎、神薙燎だ。よろしくなユーノ」

俺となのはも自己紹介をした。

「で、こいつらは俺の従者のエヴァとヴィルヘルミナだ」

俺は後ろにいる二人を親指で指して紹介した。

「ヴィルヘルミナ・カルメルであります。どうぞよしなに」

「エヴァンジェリン＝A＝K＝マクダウェルだ。呼びにくければエヴァでいいぞ」

ヴィルヘルミナは軽くお辞儀をして、エヴァはいつも通り尊大に自己紹介をする。

「はい。・・・それで、先程の怪物のことですが・・・・」

ユーノは真面目な雰囲気を出す。いよいよ本題か。

「あれはジュエルシードの思念体です」

ユーノは思念体について話し始める。

「ジュエルシードの・・・・・思念体？」

鸚鵡返しに訊くなのは。

「はい。ジュエルシードという宝石から生まれた怪物です」

「ジュエルシードってさっき、レイジングハートのなかに入ったあの宝石？」

なのはが質問する。

「そうです。僕はこの町に散らばったジュエルシードを回収するためにこの世界に来たんです」

「この世界って、どういう意味？」

「さっきも言った通り、僕はこの世界とは違う世界・・・異世界からやってきました」

そしてユーノは全てを包み隠さずに話してくれた。次元を跨いで数多く存在する次元世界のこと。ジュエルシードは元々、自分がある世界で発掘したものであること、それを管理局という組織に届ける途中、ジュエルシードを運んでいた船が原因不明の事故に会いそのとき、ジュエルシードがこの海鳴市に落ちてきたということ。責任を感じて自分がジュエルシードを回収しようとしたこと。

なんか訊いてみるとものすごく無謀なことのように思えてきた。実際俺たちが来なかったらこいつ今頃どうなってたか。

「本当にありがとうございました。皆さんにはとても感謝しています。でも、ここからは僕一人でやります」

は？おい、今こいつなんて言った？

「だ、駄目だよそんなの。危ないよ！」

なのははユーノの無謀な行動を止めようとする。

「でもこれは、僕がやらなきゃいけないんです。それに本来、皆さんは関係なフギャ！？」

俺はユーノが言い終わる前にユーノにデコピンをかました。まったくこのバカイタチが。

「ここまでひと巻き込んどいて今更なに言ってんだ。このバカイタチ」

「りょ、燎くん・・・・」

「で、でも・・・」

「でもじゃねえよ！いいか？お前の責任感の強さは買ってやる。だがな、もうこれはお前一人で収拾できるレベルを超えてるんだよ。実際、俺やなのはが来なかったらどうなってたと思ってる！ジュエルシード一つ一人で満足に封印できないのにこれからどうやっていく気だ」

俺は畳み掛けるように言葉を叩きつける。まったくなのはといい、こいつといい、ホントに世話の焼ける。

「でも！これ以上皆さんを巻き込むわけには」

まだ言うか、この野郎。

「阿呆！これはもうお前一人の問題じゃないんだよ！この町で起きていることである以上、この町の住人である俺たちにだって関係のある問題だ。黙って指咥えて見てるわけにいくかっ！！」

俺はさらに声を荒げる。自分の住んでいる町に危険なものが落ちてきてそれを関係ないから関わるななどと言われて、はいそうですかと引き下がれるか。

「いいかユーノ。自分の限界を理解して認めろ。それをせずに何か

をなせるなんて思うのはな、勇気なんかじゃない。無謀と傲慢だ」

俺はユーノに自分のやろうとしてることがいかに愚かしいことかを告げる。そう、自分の限界を受け入れずに何かを為そうなどと思うのはとても愚かで傲慢な考えだ。それはいづれ、自分の身を破滅へと追いやるだろう。その意味では原作のなのはも似たようなものだったのだろう。己の体の限界を無視し続けて戦い続けたのだから。

「・・・・・・・・はい」

俯くユーノ。俺の言った言葉を噛み締めているようだ。

「しかし、本当に良いんですか？これから先もっと危険なことが起きるかもしれません。命を落とさないという保証はないんですよ？」

ユーノはなおも食い下がる。俺たちの身を案じる一心なのだろう。

「大丈夫だよ。俺の力量はさっき見ただろう？エヴァとヴィルヘルミナだってかなりの腕だぞ」

ユーノを安心させるように言う。

「そ、それは・・・」

「で・・・なのははどうする？」

俺はなのはに目を向けて訊く。

「もちろん、私も手伝うよ」

即答だった。まあ、予想通りだな。

「なのはさん・・・・」

「ユーノくん、燎くんの言うとおりだよ。自分一人でできることなんて自分が思ってるよりずっと少ないんだよ。だから一緒にやるの。自分一人じゃ出来なくても、誰かと一緒なら出来るかもしれないから。これ、燎くんがなのはに教えてくれたことなの」

覚えててくれたんだな。嬉しいけどちょっと恥ずかしいな／／／

「私は自分の住んでる町にそんな危険なものがあるなら、一刻もはやく回収したい。それのせいで私の友達や家族が危ない目に合うのは嫌だから。私なんかにでも出来ることがあるならしたいの。だからお願い。私に出来ることをやらせて！！」

それは嘘偽りのないなのはの心からの言葉。自分の住んでいる町を護りたい。大切な人たちを護りたい。そんな思いがその言葉には込められていた。

「・・・・わかりました。正直、心苦しいですけど、お願いします。僕に力を貸してください！！」

その言葉はユーノの心に届いたようだ。

「うんっ！これからよろしくね、ユーノくんっ！！」

「極めて了解だ。ユーノ」

こうして、俺たちのジュエルシードを巡る戦いはここに幕を開け

た。

無印編　第六話　異世界からの来訪者（後書き）

今回はこの辺で。

また次回お会いしましょう。

感想、意見、いつでもお待ちしています。

やってほしいことがあればそれでもかまいません。

出来る限り、ご期待に添えられるようにします。

それでは次回をお楽しみに。

無印編　第七話　日常と非日常（前書き）

もうすぐなのはのゲームの新作が出てきますね。

僕は買うつもりですが、皆さんはどうですか？

どんなストーリーが展開するのか今からすごい楽しみです。

登場キャラも前作に比べてオリジナルキャラを加えて増えましたし、はやくプレイしたいです。

それでは無印編第七話始まります。

無印編　第七話　日常と非日常

Ｓｉｄｅ燎

一つ目のジュエルシードを封印して一日が経った。俺たちはいつも通り学校で授業を受けている。と言っても俺は先生の説明を真面目に聞いているわけではなく、適当に聞き流しているのだが。なのははどうやらユーノから念話で魔法についての説明を受けているようだ。授業と魔法の説明の両方を同時に聞くことができるとはまったく器用なやつ。そうこうしているうちに授業も終わり、俺たちは帰る準備を済ませて学校を出た。いつもならアリサとすずかも一緒なのだが、今日は二人とも用事があるとかで先に帰ったのだ。てなわけで俺はなのはと二人で雑談をしながら家に向かっている。

キィイイイイン

「！」

「！？」

今のは・・・・

「燎くん・・・今のって・・・」

なのはも感じたか。

「ああ、ジュエルシードのようだな」

俺はすぐさまユーノに念話を飛ばす。

（ユーノ、聞こえるか？ジュエルシードだ！）

（うん、僕も感じたよ。すぐにそっちに合流するから！）

ユーノから念話が返ってくる。こっちに来るらしいがそれなら・・・

（ジュエルシードが発動した場所は恐らく、この近くにある神社だ。合流するならそこにしよう）

俺はユーノに合流場所を提案する。

（わかった。それじゃあ、そこで落ち合おう！）

（ああ！）

念話を切ってユーノとの連絡を終える。

「いくぞなのは！ジュエルシードは神社だ！」

「うん！」

俺たちはジュエルシードのある場所へと走り出した。

数分して、俺たちは目的地の神社でユーノと合流し、神社の階段

を一気に駆け登った。そこには・・・・

「グルルルルルゥウゥウ」

異様な姿に変貌した巨大な犬が唸り声をあげて俺たちを威嚇していた。その犬の近くに女性が倒れていた。恐らくこの犬の飼い主だろう。

ジュエルシードの影響を受けてこんな姿になってしまったのだろう。しかしこれでは、犬というより狼だな。

「ジュエルシードの反応はあの犬から出てるな」

「ちょ、ちょっと恐いかも・・・」

「気を付けて。実体を持ってる分、昨日の思念体よりも手強い」

ユーノの言葉に気を引き締め、俺たちは自分のデバイスを構える。

「グルアァァァ！！」

俺達の攻撃の意思を感じたのか犬は咆哮し、襲いかかってきた。

「ちっ、アラストール、セットアップ！！」

俺は瞬時にアラストールをセットアップした。

「はあっ！！」

ドガッ！

「ギャウッ！」

セットアップした俺は腰の刀を抜き放ちそのまま刀の峰で犬の横っ面をぶっ叩いた。予想外の反撃にあった犬は叫び声をあげて吹っ飛んだ。俺は気を緩めず犬から目を離さず刀を構える。

「燎くん、やっぱりすごいの」

なのはが呆然とした感じでこちらを見ている。つか、早くお前もセットアップしろよ。

「な、なのは、君もセットアップを」

ユーノがなのはにセットアップを促す。

「え？え、えっと・・・どうやるんだっけ！？」

「昨日と同じようにパスワードの詠唱をして！」

「あ、あんな長いの覚えてないよ～」

涙声になるなのは。・・・はあ、しょうがないなあ。

「なのは、デバイスの名前を言ってセットアップって言ってみろ。多分それでいけるはずだ」

見ていられなくなり、なのはに助言する。

「わ、わかったの。えっと・・・レイジングハート、セットアッ

プ！！」

『スタンバイ・レディ。セットアップ』

レイジングハートが起動し、桜色の光がなのはを包み込む。光が消えると白いバリアジャケットを身に着けたなのはがいた。

「で、できた。ありがとっ、燎くんっ」

笑顔で礼を言うなのは。

「どういたしまして。それより、油断すんな。まだ終わってねえぞ」

俺は緊張感を滲ませながらなのはに忠告する。

「えっ？」

なのはは俺の背中越しに犬を見る。犬は再び立ち上がり、怒気のこもった目で俺たちを睨む。

「ウウウウウ・・・・・グオオオオオオ！！」

犬はまた牙を剥き、突進してくる。だが・・・・・

「ワンパターンなんだよ！！」

俺は上に飛んで犬の爪を躱す。そして刀を上段に構え、そのまま落下と同時に刀を振り下ろし、犬の脳天に叩き付ける。

「はあっ！！」

ゴガアッ！！

「ギャウンッ！！」

頭にモロに食らって犬は悲鳴を上げる。俺はさらにダメ押しとばかりに右手に気を溜めて、それをアッパーのように犬の下顎に打ち込む。

「魔神拳！！」

ドゴアッ！！

「ガギャウッ！！！」

打ち上げられた犬は地面に落ちて動かなくなった。なんだ、これで終わりか？あっけないな。

「す、すごい。ジュエルシードの力を取り込んだ生物をこんなあっさり・・・・」

「やっぱり、燎くんは強いの！」

後ろで二人がなんか言ってるけど、なんだろう？・・・・まあ、いいか。

「お～い、なのは。封印頼む」

俺はなのはを呼んで封印を任せる。

「あ、うん。わかったなの」

なのはは気絶した犬に近づいてレイジングハートを翳した。

「リリカル・マジカル。ジュエルシード、封印！」

『シーリング』

犬の体が一瞬光ると体からジュエルシードが飛び出しレイジングハートに収納される。犬は見る見るうちに元に戻り、子犬になった。俺は念のため子犬の体に異常がないか調べたが、どこにも異常はないようだ。

「燎くん、その子、大丈夫？」

なのはが心配そうに訊ねる。

「大丈夫。俺もちゃんと手加減したし、体にはどこも異常はない」

「よかった～」

俺の言葉を聞いてなのはは安心したようだ。

「それじゃ、この人とこの犬、このままにしておくとまずいから、こうやって・・・」

俺は女性を神社の賽銭箱に寄りかからせて、子犬を女性の膝の上においた。

「これで、大丈夫だろ。しばらくすれば目を覚ますよ」

「うん」

「んじゃ、この人が目を覚ます前に、行こうぜ」

「うんっ」

「はいっ」

俺たちは頷きあい、神社の階段を下りて行った。

「そういえば、燎くん。今日はあの姿にならなかったね」

帰り道、なのはが突然そんなことを言ってくる。あの姿って、炎髪灼眼のことか・・・・

「ああ、あれはな、俺の本気を出すときの姿なんだ。昨日の思念体や今日の犬程度の相手なら別になる必要はなかったんだよ」

「そうなんだ・・・あれ？じゃあなんで、あのときはなったの？」

なのはは不思議そうに訊いてくる。

「あのときはな、なのはが危ないって思ったら、思わず出ちまったんだ」

「そ・・・・そうなんだ／／／」

ん?なんかなのはの顔が赤いような・・・・

「おいなのは、顔赤いぞ。熱でもあるのか?」

俺は心配になって訊いてみる。

「ふぇっ!ちちちち違うよ!だだ大丈夫だよ!／／／」

ぶんぶんと腕を振って否定するなのは。

「そっか・・・それならいいけど・・・・・」

「う、うん。ありがとね燎くん・・・・／／／／」

こうして俺となのはは夕暮れの道を並んで歩いて行った。

無印編　第七話　日常と非日常（後書き）

さて、ついに次回はあの娘が登場です。

お楽しみに。

それではまた次回お会いしましょう。

無印編　第八話　もう一人の魔法少女（前書き）

ついに金髪娘の登場です。

さて、どうなるか？

では無印編第八話始まります。

無印編　第八話　もう一人の魔法少女

Ｓｉｄｅ三人称

夜の街、色とりどりの灯りが街を照らしている。その様はとても美しく人を魅了してやまない魅力がある。そんな夜景を高層ビルの屋上から見下ろす影が二つ。一つは金色の髪に黒いマントを羽織った少女だ。もう一つは仔牛ほどの大きさの狼である。その狼は少女に付き従うように寄り添っている。少女は顔をあげ、光煌めく街を見渡して呟く。

「ここに・・・ジュエルシードが・・・」

「ウォオオオオオオオン！！」

少女の呟きに応えるように傍らの狼が吠えた。その遠吠えは夜の街に響き渡っていった。

Ｓｉｄｅ燎

今日は俺はなのはと一緒にすずかの家にお呼ばれしたのである。今はバスに乗って移動中だ。ちなみに恭也も同伴している。理由はもちろんすずかのお姉さんで自分の彼女である忍さんに会う為だろう。っていうか、会いたいならわざわざ、俺たちのお呼ばれにかこつけなくても普通に会いに行けばいいだろうに。やれやれ・・・・

ジュエルシード集めも概ね順調な方と言えるだろう。この間も士郎さんが監督を務めているサッカークラブの試合の時、クラブ員の一人が持っていたのを俺が作った宝石と交換したのだ。どうやら気になっていた子にあげるつもりだったようだ。危うく街中で発動するところだったぜ。危ない危ない。

「燎くん、もうそろそろ着くよ」

俺の隣に座っているなのはが言ってきた。なのはも楽しみなようでさっきからウキウキしっぱなしだ。

「おう。それにしても随分嬉しそうだなお前。そんなに楽しみか？」

「うん！すずかちゃんの家って可愛い猫さん、いっぱいいるし！」

そうかい。なのはって動物好きだよな。・・・俺も好きだけど。こうもふもふするとなんか凄い癒されるんだよなぁ。

「おっ、着いたみたいだぞ」

バスが着いたことを恭也が教えてくれた。俺たちはバスを降りてすずかの家に向かった。

少し歩くと、すずかの家が見えてきた。本当にいつ見てもデカい家だな。家って言うよりも屋敷っていったほうがしっくりくるな。アリサの家もここと同じくらいデカいんだよな。俺たちは扉の前で止まって恭也がインターホンを鳴らした。

「はい」

扉が開い家の中からメイド服を着た長身の女性が出てきた。月村家のメイドのノエルさんだ。

「ようこそおいでくださいました。恭也様、なのはお嬢様、燎様」

ノエルさんが恭しくお辞儀をする。

「ああ、お招きに預かったよ」

「こんにちは、ノエルさん」

「どうも、アリサはもう？」

俺はアリサはもう着ているのかノエルさんに訊く。

「はい。今はすずかお嬢様とご一緒に庭でお茶をしております」

ノエルさんは丁寧に答えた。

「ところで、燎様。カルメルさんは今日は・・・」

今度はノエルさんが訊ねてくる。

「ああ、はい。ヴィルヘルミナは今日はちょっと用事があってこられなくて」

「そうですか・・・」

ノエルさんはとても残念そうだ。ノエルさんとヴィルヘルミナ、実はこの二人、けっこう仲が良いのだ。初めて会ったときからなに

やら意気投合し、今ではすっかり友人の間柄だ。同じメイド同士、なにか相通ずるものがあるのだろうか？

「ヴィルヘルミナもノエルさんによろしくと言ってました。次は必ず自分も一緒に来ると」

俺はヴィルヘルミナの伝言をノエルさんに伝える。

「はい。お待ちしていますとお伝えください」

そう言ってノエルさんは笑顔を見せる。

「はい、必ず」

俺も笑って答える。

「恭也～♪」

屋敷の奥から女性が走ってくる。すずかによく似た顔つきをしている。この人がすずかのお姉さんで恭也の恋人の忍さんだ。忍さんは笑顔でこちらに駆け寄ってくる。

「いらっしゃい、恭也♪なのはちゃんと燎くんも」

「ああ、忍」

見つめあう恭也と忍さん。・・・ちょ、甘い空気がこっちにまで。自重してください御両人。

「こんにちは忍さん」

「こんにちは！」

俺となのはも忍さんに挨拶する。

「それじゃ、私たちは上にいるから。ノエル、なのはちゃんと燎くんを案内してあげて」

「かしこまりました」

そう言って恭也と忍さんは二階に上がっていった。ま、二人であま～い時間を過ごせばいいさ。

「それではなのはお嬢様、燎様、こちらへ」

俺たちはノエルさんの案内に従ってすずかたちの処に向かった。

ノエルさんに案内された庭にはアリサとすずかがテーブルに座ってお茶を飲んでいた。二人の周りには猫、猫、猫である。

「アリサちゃ～ん、すずかちゃ～ん」

なのはが二人に手を振る。

「なのはちゃん、燎くん」

「もう、遅いじゃない」

俺たちも同じようにテーブルに座る。

「それでは私はこれで。あとでファリンがお菓子をお持ちしますので」

そう言い、ノエルさんは下がって行った。

「はい」

「ありがとうございます。ノエルさん」

俺となのははノエルさんにお礼を言った。

「それにしても、相変わらずすずかの家は猫屋敷だな」

俺は足に摺り寄ってきた猫を一匹抱いて膝の上に乗せる。猫は気持ちよさそうに俺の膝の上で丸くなる。俺は頭を撫でてやったり、首をくすぐってやる。

「う、うん。・・・まあね。（いいなあ、あの子）」

（あの猫さん、羨ましいの）

（べ、別に、頭撫でてもらいたいわけじゃあ・・・ないんだからね／／／）

「・・・？どうかしたか？」

なんだか三人が俺の膝の上の猫をジーっと見てる。なんだ、お前らも撫でたいのか？

「「「・・・・・なんでもない」」」

「？」

なんなんだ？

「それにしても、あんたってホントに動物に好かれるわよねぇ」

アリサがそんなことを言ってくる。

「うん、私もそう思う」

なのはも同意する。

「そうだよねぇ。燎くんがくるとうちの子達、すっごく喜ぶし」

すずかも同意見なようだ。まあ、確かにそうかもしれない。すずかの家に来るたびに家中の猫たちが俺の処に集まってくるのだ。現に今も集まりつつあるし。

「あたしの家に来ても家中の犬が寄ってくるし」

一度、追い掛け回されて酷い目にあったけどな。

「キュ、キュウ～！」

あ、ユーノが猫に追い掛け回されてる。

「ユ、ユーノくん！」

「こら、駄目だよ！」

「キュウ～～～！！（助けて～～～！！）」

・・・・うん、しばらくほっとこ。面白いし。

「は～い、お待たせしました～。お菓子ですよ～」

俺が猫に追いかけられるユーノを見物していると、ノエルさんと同じメイド服を着た小柄な女性がお菓子を持ってきた。この人はファリンさん。ノエルさんと同じ月村家のメイドでノエルさんの妹だ。

「キュウ～～～！！」

ユーノが猫に追われてファリンさんのほうに走っていく。そしてファリンさんの足の周りをグルグルと回る。

「え？え？あの、ちょっと？」

突然のことに混乱するファリンさん。

「ほえぇぇ～～」

やがてファリンさんは目を回してトレイを放り投げ、倒れかける。

「ファリン！危ない！！」

「ファリンさん！！」

すずかとなのはがファリンの身を案じて叫ぶ。

シュンッ！！

ファリンさんが倒れる寸前に俺は、瞬歩を使い、ファリンさんの所まで一瞬で移動して片手でファリンさんの体を支えて、もう片方でトレイを受け止めた。ふう、間一髪。

「ほえ？・・・あ、あわわわ。りょ、燎くん、ご、ごめんなさい。ありがとうございます／／／」

俺に助けられたことに気付いたファリンさんは顔を赤くして俺に礼を言う。

ゴゴゴゴゴ

「！！？」

俺はいきなりすごい殺気を感じて後ろを向いてみるとそこには・・・背中に般若の貌を浮かばせた三人の修羅がいた。

「え、え～っと・・・・どうかしましたか？」

三人の殺気に威圧されて敬語になってしまった。

「別に・・・・」

「なんでもないの・・・」

「それより、いつまでそうしてる気よ？」

アリサに睨まれて俺はすぐさまファリンさんを立たせて、トレイ

を渡し、離れた。

その後も色々な話をして盛り上がった。そんな中俺はそれとなく周りに気を集中させた。もうそろそろジュエルシードが発動するころだ。そして、このジュエルシードを狙ってきっと、あいつも来る。

キイイイイン！！

・・・・きた。

（なのは、ユーノ）

（燎くん、これって・・・・）

（ジュエルシード。この近くだ）

（まったく、こんな時に）

俺は思わず愚痴を漏らす。

（ど、どうしよう。アリサちゃんとすずかちゃんもいるのに・・・・）

なのははどうやってこの場を離れるか考えている。

（良い手がある。ユーノ・・・・行け）

俺はユーノに指示をだす。

（えっ？）

ユーノはいきなりの指示に反応できない。

（お前がまず、なにかを見つけた感じを装って森の中に入れ。そんで俺となのはがお前を追う形でこの場を離れる）

（わ・・・わかった）

（なのはもいいな？）

（うんっ）

（よし・・・いけっ）

俺の号令と同時にユーノは森のほうへ走り出した。

「あ？ユーノくん？」

「どうしたのかしら？」

突然走り出したユーノをアリサとすずかは不思議そうに見る。

「なにか、見つけたのかも。ちょっと行ってくるね」

「俺も行ってくる。なのは一人じゃ心配だからな」

そう言って俺たちは席を立つ。

「うん、気をつけてね」

「早く戻ってきなさいよ」

二人に見送られて俺たちはユーノを追って森の中に入る。

少し奥の方まで来てユーノを見つけた。そこには・・・デカい、とにかくデカい・・・猫がいた。

実際に見てみるとマジでデカいな。

「なあ、ユーノ・・・・あれって・・・・・」

俺はデカネコを指差す。

「多分、あの猫の大きくなりたいって願いがジュエルシードを発動させたんだろうけど・・・・」

ユーノはそう説明する。

「確かに・・・大きくは・・・・なってるけど」

「絶対、こういう意味じゃないよな・・・？」

ジュエルシードの願いの叶え方って、けっこう適当だな。

「まあいいや。とにかくさっさと封印しよう。こんなのすずかが見たら卒倒しちまう」

俺は気を取り直してセットアップの準備をする。

「そ、そうだね・・・」

なのはも苦笑しながらレイジングハートを取り出す。

ヒュンッ・・・・・・バシュッ！！

「ニャッ！」

「えっ！？」

突如、どこからか黄色の魔法弾が飛来してデカネコに打ち込まれた。・・・・・来たか。

「な、なに！？」

なのはは慌てて、周りを見回す。

「！！なのは、上だ！！」

「！！」

俺の声に反応してなのはは上を見上げる。そこには・・・・・・。

「誰・・・・・・？」

金色の髪に黒いマントを身に纏い手には漆黒の斧のようなデバイスを持ったなのはや俺と同い年くらいの少女が空中に浮かんでいた。

無印編　第八話　もう一人の魔法少女（後書き）

さあ、フェイトの登場です。

次回はフェイトとの戦闘ですがうまく書けるか不安です。

でも、精一杯書くので待っててください。

それではまた次回お会いしましょう。

無印編　第九話　激突（前書き）

しばらく更新できず申し訳ありませんでした。

ここの所、少しばかり立て込んでいまして。

今日からはいつものペースに戻すことができそうです。

こんな作者ですがこれからもよろしくお願いします。

それでは無印編第九話始まります。

無印編　第九話　激突

Ｓｉｄｅ燎

俺たちは突如襲来した襲撃者と今、ジュエルシードで巨大化した猫を挟んで向かい合っている。俺たちと相対しているのは金色の髪と漆黒のマントを靡かせ、手に戦斧のようなデバイス、バルディッシュを持ち空に浮かびルビーのような紅い瞳でこちらを見下ろす少女、フェイト・テスタロッサだ。もっともあちらは俺が自分の名前を知ってるだなんて夢にも思ってないだろうがな。

（金色（こんじき）の髪に真紅の双眸、黒い斧のようなデバイス・・・燎、もしやあの娘が・・・）

アラストールから念話が来る。アラストールとマルコシアスには今日出会う奴のことについて昨日のうちに話しておいてある。

（そうだ。あの娘がフェイトだ）

俺も念話で答える。

（ほーう、こりゃまた・・・なのは嬢ちゃん達に負けず劣らずの別嬪さんだな）

マルコシアスが軽口を叩く。

「お前・・・・誰だ？」

俺はフェイトに問い掛ける。一応聞いておかないとな。向こうは俺のこと知らないわけだし。

「・・・・・・・」

フェイトは無言のまま俺たちを見つめる。答える気無しかよ。

「バルディッシュ・・・・フォトンランサー連撃」

フェイトはバルディッシュを再び猫に向ける。

『フォトンランサー・フルオートファイア』

バルディッシュが主の命に応え金色の魔力弾を形成し放つ。おいおい、俺たちは無視かよ!?

「ちいっ、アラストール!!」

「レイジングハート、お願い!!」

『承知、セットアップ!!』

『スタンバイレディ、セットアップ』

俺となのはは即座に自分のデバイスを起動させバリアジャケットを纏う。

「はあっ!!」

シュンッ・・・バシンッ、バシッバシッ!

俺は瞬動で魔力弾と猫の間に割って入り、魔力弾を全て刀で弾いた。

「!!・・・・魔導師?」

フェイトは一瞬目を見開き驚きを露わにする。俺は猫を庇うようにフェイトと向かい合い刀を構える。

「燎くん!」

なのはも遅れて俺の隣に立ち、レイジングハートを構える。

「・・・・・同系の魔導師・・・・・ロストロギアの探索者か・・・・」

フェイトは俺となのはを交互に見て静かな声で言う。

「間違いない。僕と同じ世界の住人。そしてこの娘、ジュエルシードの正体を・・・」

フェイトを見てユーノが確信する。

「・・・・バルディッシュと同系のインテリジェントデバイス・・・・」

フェイトはレイジングハートに目を向ける。

「バルディッシュ・・・・?」

なのはもフェイトの持つバルディッシュを見る。

「ロストロギア・・・ジュエルシード」

『サイスフォーム・セットアップ』

フェイトの声に応えるようにバルディッシュの斧のような部分が上に跳ね上がり金色の魔力刃が鎌のように出現する。

「！！」

なのはが驚愕する。

「申し訳ないけど・・・頂いていきます」

変形したバルディッシュをこちらに向けるフェイト。俺は全身に魔力を漲らせていつでも応戦できるように身構える。

「・・・・燎くん」

「？」

ふいに隣にいるなのはが話しかけてきた。

「なんだ・・・？」

「あのね・・・お願いがあるんだけど・・・」

「お願い？」

なんだ・・・？

「あの娘の相手・・・私にやらせて欲しいの」

なのはは俺の方を向いて言ってきた。

「な、なのは！？」

ユーノが驚きの声を上げる。

「・・・どうして？」

俺はなのはの目を見据えて訊く。

「あの娘と・・・お話がしたいの・・・・・だから・・・・お願い」

なのはも俺の目を見据えて答える。その目の奥には強い決意が宿っていた。

「・・・勝てるのか？一人で・・・・・？」

「それは・・・・・わからないけど・・・・・でも・・・・」

目の奥の決意は変わらない。・・・・これは・・・・何言っても無駄かな・・・・

「・・・・・わかったよ」

俺は刀をおろして鞘に納める。

「り、燎！」

ユーノ、諦めろ。こうなったなのはに説得は無意味だ。

「なのは、ここはお前に任せる。遠慮なくやってこい」

「燎くん・・・・・うんっ、ありがとっ！」

なのはは満面の笑顔を見せた。俺もつられて笑ってしまう。

「おい、そこの金髪」

俺はフェイトに向き直る。

「聞いての通りだ。お前の相手はこいつがする」

俺は親指でなのはを指す。

「俺はこの戦いには一切手は出さない。お前が勝ったらジュエルシードを持っていくなり好きにすればいい」

俺はそう言って、ユーノを連れて瞬歩を使って離れる。そして二人は改めて向かい合う。

「燎、どうして・・・・？」

ユーノは理解できないといった感じに訊いてくる。

「ユーノ、お前はまだなのはのことが分かってないようだな」

「え・・・？」

「ああなったなのははにはな、何を言っても無駄だ。あいつは昔から一度ああなると梃子でも譲らない」

俺はボリボリと頭を掻く。付き合いの長い俺はなのはの筋金入りの頑固さをよく理解していた。伊達に長いこと幼馴染はやっていない。

「ま、ここはなのはに任せよう。一対一の戦いに首を突っ込むような無粋な真似は好きじゃないしな」

言い終わると俺は未だに睨み合っている二人の方に目を向けた。ユーノも不承不承といった感じだが納得してくれたようだ。猫の方も怖がっているのか、動く気配はないようだ。さて、二人のお手並み拝見と行くか。

Ｓｉｄｅなのは

私は燎くんに無理を言って目の前のいきなり現れた魔導師の女の子と一対一をさせてもらうことになりました。・・・・ごめんね燎くん。・・・ありがとう。

私はレイジングハートを構えたまま、女の子と向き合ってます。どうして燎くんに無理を言ってまでこの娘と一対一になりたかったのか・・・それは・・・・。

（きっと・・・私と同い年くらい。・・・・綺麗な瞳と、綺麗な髪・・・・だけど・・・・この娘）

ダンッ！

「！！」

女の子はすごいスピードでこっちに向かってきました。そして鎌になったデバイスを大きく振りかぶって横薙ぎにしてきました。

『フライヤーフィン』

でも、金色の鎌が当たるより先にフライヤーフィンを発動させ上に飛んでなんとか避けられました。

こんどはこっちから攻撃しようかと思い、レイジングハートを女の子に向けましたが、もうそこに女の子はいませんでした。

（！・・・あの娘は？）

『マスター！後ろです！！』

レイジングハートの声を聴いて私は後ろを振り返りました。そこには女の子が今にもデバイスを振り下ろそうとしています。

「っ！！」

ガキンッ！！

間一髪で女の子の攻撃をレイジングハートで受け止めましたが、力負けして吹き飛ばされてしまいました。

「きゃあっ！」

私は吹き飛ばされながらもなんとか体勢を整えて女の子を見ました。女の子はデバイスを元の形に戻してそれを私に向けていました。

「・・・・・・ごめんね」

「え・・・・？」

『ファイア』

女の子が何か呟いたような気がしましたがそれよりも先に金色の魔力弾が私に撃ち込まれました。薄れていく意識の中で私が見たのはあの娘の目でした。

（あの娘は・・・どうしてあんな・・・・・悲しい目を・・・）

私の意識はそこで途絶えました。

Ｓｉｄｅ燎

俺は魔力弾を撃ち込まれて落ちるなのはを受け止めた。やはりまだなのはにフェイトの相手はきつかったか。

俺はフェイトに目を向けた。どうやらジュエルシードは回収したようだ。フェイトも俺を警戒してデバイスを構える。

「心配するな。言ったろ、俺は手は出さないって」

俺がそう言うとフェイトは俺たちに背を向けて去ろうとする。その前にこちらを一瞥した。その目は俺にお姫様抱っこされているなのはに向けられている。心配してるのか？ホントに優しいなこいつは。

「こいつなら大丈夫だよ。気絶してるだけだ」

俺は一応フェイトを安心させるために言う。それを聞いたフェイトは今度こそ俺たちの前から飛び去って行った。

こうして俺たちとフェイトのファーストコンタクトは終わったのだった。

無印編　第九話　激突（後書き）

こんなところですがいかがでしたか？

次の更新もなるべくはやく出来るように頑張ります。

ではまたお会いしましょう。

次回をお楽しみに。

無印編　第十話　温泉旅行へ　前編（前書き）

もうすっかりクリスマスの感じが漂ってますね。

みなさんサンタさんっていくつぐらいまで信じてましたか。

ちなみに私は幼稚園卒業までです。

無印編　第十話　温泉旅行へ　前編

Ｓｉｄｅ燎

おっす、オラ燎！・・・って、ちょっと古いか。まあ、それはともかく、フェイトとの邂逅から丁度一週間。あれからジュエルシードの発動もなく今日も町は概ね平和だ。・・・で今俺の家になのはが来ているのだが。

「燎くん、今度の連休にね、皆で温泉に行くことになったの！」

嬉しそうに連休の予定を話すなのは。なるほど、温泉イベントか。たしかそこでもフェイトと戦うことになるんだったな。

「へぇ～、楽しそうだな」

俺はとりあえずそう答える。

「それでね、よかったら燎くんたちも一緒にいかない？」

と、上目遣いに俺を誘うなのは。

「俺たちも？・・・まあ、別に連休中は何も予定は無いけど・・・いいのか？」

まあ、俺としては願ったりな展開だ。フェイトと接触する機会は出来るだけ多い方がいいからな。

「うん！すずかちゃんとアリサちゃんも一緒だし、お父さんたちも是非って言ってたの！」

士郎さんたちの許可は出てるわけか。やっぱりアリサとすずかも一緒なんだな。

「わかった。それじゃ俺たちも一緒に行くとしよう。二人も良いよな？」

俺はエヴァとヴィルヘルミナにも確認を取る。

「問題ないのであります」

『同行受諾』

「温泉か・・・いいかもしれんな」

二人も大丈夫なようだ。

「ってなわけで、俺たちも御同行させてもらうとするよ」

「やったー！（うふふ・・・これで燎くんと一緒にお風呂に・・・・うふふふ／／／）」

ゾクッ！

なんだ？今、悪寒を感じたような・・・気のせいか？

こうして、俺たちも温泉旅行に同行することとなった。

そして数日後、連休の初日、俺たちはなのはの家の前に集まっている。旅行に行くメンバーは俺とエヴァ、ヴィルヘルミナ。高町家全員、すずか、アリサ、ノエルさん、ファリンさん、忍さん、ユーノ。

「士郎さん、俺たちまで誘ってくれて、ありがとうございます」

俺は士郎さんにお礼を言う。

「別にいいさ。こういうのは人数が多い方が楽しいからね」

と笑って答える士郎さん。うん、確かに。

「そうですね。俺も同感です」

「それじゃ、そろそろ車に乗って行こうか」

「はい」

乗る車は二台のワゴンだ。この日のためにすずかの家が用意してくれたらしい。さすがブルジョワ。

さて、俺も乗ろうとするのだが、何やらなのはとすずか、アリサが揉めていた。

「燎くんの隣はわたしなの！」

「何言ってんのよ！燎の隣はあたしよ！」

「わたしも燎くんの隣がいい！」

・・・・何言ってんでしょうかね？このお嬢さんたちは。なんだか背中に般若が見えるんですが。

「あらあら」

桃子さんは微笑ましそうにこちらを見ている。俺としてはお宅の娘さんの暴走を止めてほしいのですけど。他の皆さんの方を見ると一斉に顔を背けた。そうですか、無理ですか。ヴィルヘルミナとエヴァはもうさっさと車に乗り込んじゃってるし。

はあ・・・・仕方ない。俺は未だに睨み合ってる三人に近づいた。

「あの～、お三方？ここはひとつ、恨みっこなしでジャンケンで決めるのはどうでございましょう？その方が平和的だし公平に決まると思うんですが？」

愛想笑いを浮かべながら三人の般若に提案する俺。こちらを見る三人。正直、めっちゃ怖いです。今にも腰が抜けそうです。しかし、ここで引いてはならないと俺は足を踏ん張って耐える。

「まあ、それもそうね」

「それじゃあ、ここは恨みっこなしのジャンケンで・・・・」

「「「勝負(なの)！！！」」」

・・・・あれ？なんでジャンケンでこんな鬼気迫る感じがするんだ？もしかして俺、選択肢間違えた？

あの後、ジャンケンの結果はアリサとすずかの勝ちとなり、二人は俺の両脇に座った。なぜか二人して俺の両腕に自分の腕を絡ませてべったりとくっついてきた。負けたなのはは旅館に着くまでものすごく悔しそうな目をこちらに向けていた。なんだか胃に穴が空きそうだった。

そんなこんなで旅館に到着し、手続きを済ませて、それぞれの部屋に荷物を置いた。ちなみに部屋割りは俺となのは、アリサ、すずかの子供組。士郎さんと桃子さんの夫婦組。恭也と忍さんの恋人組。そして美由希さん、ノエルさん、ファリンさん、エヴァ、ヴィルヘルミナの女性組といった具合だ。

で、俺は今、一人で旅館の庭園を散歩中だ。ジュエルシードが発動するのは夜のはずだし、せっかくの旅行なのだ。それまでは思いっきり楽しませ貰ってもバチはあたらないだろう。

「ん～、日差しが気持ちいいな～」

俺は足を止めて軽く伸びをする。

『そうだな。それに、空気も澄んでいる』

アラストールが同意してくる。

「そうだ。せっかくこんないい場所に来たんだし・・・」

俺は近くの木に寄りかかってポケットからあるものを取り出した。

『ん？燎、それは・・・』

そのあるものとは・・・・・・・

『ハーモニカ・・・・？』

そう、ハーモニカだ。

『おめぇ、吹けんのか？』

マルコシアスが訊いてくる。

「ああ、少しだけな」

そう言って俺はハーモニカを口に着け息を吹きメロディーを奏でる。

～♪　～♪　～♪

『ほう』

『こりゃあ・・・』

俺の奏でる旋律は辺りの森に広がっていき、大気に染みわたっていく。

俺はそのまま、時間が過ぎるのも忘れて吹き続けた。

三十分くらい経ち、俺は口から離し演奏を終了した。ふう、久々だったから少し不安だったけど、まだ鈍ってはいないようだな。

パチパチパチ

「？・・・あ、士郎さん、桃子さん」

拍手の音が聞こえて振り向くとそこに士郎さんと桃子さんが揃って手を叩いていた。

「いやあ～、素晴らしかったよ。思わず聞き入ってしまった」

「本当に。すごく綺麗な音だったわ」

二人とも俺の演奏を称賛してくれる。

「いや、そんな。ただでたらめに吹いていただけですよ。褒めてもらうほどのものじゃ・・・」

手放しで褒められると照れくさくなってしまう。

「そんなことはないよ。見事な演奏だった」

「ええ」

「あはは、ありがとうございます」

なんだか頬が熱くなってくる。

「よかったら、また聞かせてもらえるかな?今度はなのはたちも一緒に・・・・ね?」

「私も、また聞きたいわ」

二人にそう言われて俺の胸に嬉しさが込み上げてくる。

「はい・・・わかりました」

俺は嬉しさのあまり笑って答えた。そして俺たちは旅館へと戻った。

旅館に戻ったらさっそく温泉に行こうということになって俺たちは浴衣に着替えて向かった。

男湯と女湯に分かれる所で俺が士郎さんたちに続いて男湯に入ろうとしたときに後ろから腕を掴まれた。振り向くとなのはが笑顔で俺の腕を掴んでいた。

「どうした?なのは」

「・・・燎くん・・・・・一緒に入ろう?」

・・・・・・・は?一緒?

「一緒って、まさか・・・・」

俺が顔を引きつらせるとなのはは笑顔を崩さずに女湯を指差した。

「あ、アホなこと言うな！俺は男だぞ？女湯に入れるわけないだろ！」

俺は断固抗議した。当たり前だ。俺は某名探偵と同じで見かけは子供だが中身は二十歳を超えた大人なのだ。女湯なんぞに入ったらどんなことになるか・・・想像したくもない。

「大丈夫。さっき旅館の人に聞いたら、十歳までなら女湯に入っても良いんだって♪」

な、なんと用意周到な。ユーノを見ると、すでにアリサに捕まってしまっている。

「お前はよくても、アリサ達は嫌だろ？！男と一緒なんて！」

尚も俺は抵抗を続ける。一縷の望みをアリサ達に託すが・・・・・

「あたしは別に良いわよ。（っていうかむしろ願ったりだし／／／）」

「わたしも良いよ。（燎くんとお風呂。背中の流しっことかできるかも／／／）」

その希望はあえなく崩れ去った。お前らはもうちょっと恥じらいをもてや！！

俺は士郎さん達を見るが二人は二人はなのはの出すオーラに気圧されて何も言えないようだ。弱いな、御神の剣士。

「さ、というわけだから行こ、燎くん♪」

なのはが俺の腕を引っ張る。俺は引きずられる形でなのはに連行される。

「ちょ、まて、なのはっ。は、はなしてっ、い、いやあああああああ!!!」

このとき、俺の頭にドナドナが流れたのであった。

無印編　第十話　温泉旅行へ　前編（後書き）

長くなりそうなので前、後篇に分けてみました。

それでは今回はこの辺で

次回をお楽しみに。

Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｎｅｘｔｔｉｍｅ．

無印編　第十一話　温泉旅行へ　後篇（前書き）

今回は短めです。申し訳ございません。

次回はオリジナル話にしようと思います。

それでは無印編第十一話始まります。

無印編　第十一話　温泉旅行へ　後篇

Ｓｉｄｅ燎

ひどい目に合った。なのはに女湯に連行されて、一緒に風呂に入ったり、なのは達に体を洗ってほしいと言われて洗ったり。その後、桃子さん達からも洗って欲しいと言われて断れなかったり、そのお礼だと言われ桃子さんと美由希さんに体を洗ってもらったり。

・・・・なに？男のロマンを堪能しただろって？・・・アホ言え！緊張しっぱなしで逆に疲れが溜まっちまったわ！これじゃ温泉に入った意味ねえし！その上エヴァとヴィルヘルンッミナまで悪乗りしてベタベタしてくるし・・・・はぁ～。

まあ、そんなこんなで俺は今なのは達と旅館の中を雑談しながらぶらぶらしている。ふと前から一人の女性が近づいてくる。なにやら妙な女性だった。というのもその女性の頭に犬の耳のようなものがあり、腰のあたりからはふさふさの犬の尻尾のようなものがあったからである。

俺は一目でこの女性がフェイトの使い魔のアルフだと分かった。まあ、分かりやすすぎるしね。アルフは俺達・・・というか肩にユーノを乗せたなのはを見ている。俺たちの所まで来ると立ち止まり行く手を塞ぐように立ちはだかった。

なのは達もアルフに気付いて立ち止まり困惑した表情を浮かべた。まあ、いきなり知らない人が現れたらね。アルフは俺やアリサ、すずかには目もくれず、なのはだけをじっと見ている。

「あんたかい？うちの子をアレしてくれちゃったのは？」

剣呑な感じを隠そうともせずアルフはなのはに言った。

「え？あ、あの・・・・・」

当のなのはは完全に困惑しきっている。初対面の相手にいきなり険悪な雰囲気で話しかけられたのだから無理もないが。

「あんまり強そうには見えないねぇ。どこにでもいそうな普通のガキって感じだよ。フェイトの障害になりそうとは思えないけど」

アルフの方はなのはの反応になどかまわず、好き勝手に言葉を並べる。

「あの・・・・この子、私達の友達ですけど。何か用ですか？」

アリサがなのはを庇うように割り込んだ。ホントこいつ、物怖じとかしないよな。

「ん？・・・・あー、ごめんね？よく見たら人違いだったよ。悪かったねーおチビちゃんたち」

アルフは笑いながら謝ると俺たちの横を通って去ろうとする。

（警告しとくよ。子供はいい子でいないと・・・・・・ガブッといくよ）

と、念話が飛んできた。邪魔をするなら容赦はしない、といった

ところか。

（！！）

なのははバッと振り向くがアルフはかまわず歩き去っていった。

「まったく、なんなのよ！さっきのは！！昼間っから酔っぱらってんの！！」

アリサは随分ご立腹のようだ。

「あ、アリサちゃん、落ち着いて？ね？」

「まあまあ、癒し空間だし、いろんな人がいるよ」

なのはとすずかがアリサを宥めている。

「あーいうやつはいるもんさ。関わっちまったら、忘れるのが一番だ」

俺もアリサを宥めるのに加わる。

「でも！」

アリサはまだ納得できないといった感じだ。

「せっかく温泉に来たんだ。いつまでも怒ってたらもったいないぞ

？いやなことはさっさと忘れて楽しもうぜ」

アリサを落ち着かせるように言い聞かせる。

「う～～・・・・わかったわよ」

まだ幾分か不満そうだが、とりあえず落ち着いてくれたようだ。

そして俺たちはまた雑談を再開する。

（ねえ、燎くん。あの人・・・・・・）

雑談を続ける中、なのはから念話が来た。さっきのアルフのことか。

（ああ、間違いなく、あの時の金髪の関係者だろうな）

俺はそう言っておく。

（うん。僕もそう思う）

ユーノも俺と同意見のようだ。

（そっか、あの娘もここに来てるのかな？）

（多分な）

（じゃあ、ここにも、ジュエルシードが？）

（あいつらがここにいる以上・・・そうなんだろうな）

（・・・・・・）

俺の意見に黙ってしまうなのは。

（どうする？今回はジュエルシードはあいつらに任せておくか？）

まあ、答えは分かり切っているけどな。

（・・・・ううん、大丈夫。それにわたし、あの娘に訊きたいことがあるから）

（もちろん、僕も）

ほらな。まったくこいつらは、とんだお人好しだぜ。

（他人のこと、言えんのかよ？）

（まったくだな）

うるさいぞ、デバイス共。

（それじゃ、今夜、みんなが寝静まったころにな）

俺は今日の夜、皆に気付かれないように旅館を抜け出してフェイト達の所へ行くことを伝える。

（わかったの）

（うん）

それまで俺たちは旅行を思いっきり満喫した。

そして、夜。ジュエルシードの発動を感知し、俺たちは士郎さん達が眠っているのを確認すると、起こさないように忍び足で部屋を出て旅館を抜け出し、ジュエルシードのもとに向かった。きっとフェイト達もいるはずだ。ちなみに何かあった時のためにエヴァとヴィルヘルミナは待機してもらっている。

旅館を出て少し奥のほうにある庭園にフェイトとアルフはいた。すでにジュエルシードの封印はすんでいるようだ。向こうも俺たちに気付いたみたいだ。

「おやおや、子供はいい子でって言わなかったけ？」

アルフは挑発的な言葉を言ってくる。

「生憎、素直にはいそうですかって言えるほど、聞き分けは良いほうじゃないんでな」

俺はこれに挑発で返す。

「生意気なガキだね。だったら少し痛い目にあってもらおうか！」

そういうやいなや、アルフは人間形態を解き、本来の姿である、狼の姿に変化した。

「やっぱり、あの女の人、あの娘の使い魔だ！」

ユーノが叫びながらアルフの正体を教える。

「使い魔？」

聞き慣れない単語をおうむ返しに訊くなのは。

「簡単に言うなら、魔導師が作った人工的な生命体のことだ」

俺はなのはに使い魔について端的に説明する。

「そういうこと。主の敵となるものをこの爪と牙で引き裂くのが、あたしの役目ってわけさ！！」

言い終えた瞬間にアルフは牙を剥きだしにして飛び掛かってきた。

「させない！！」

ユーノがなのはの肩から飛び出し魔法陣を展開する。

「なに！？」

アルフは目を見開いて驚く。その隙をついてユーノは魔法を発動させる。

カッ！

緑色の光が二匹を包み込む。光りが消えた後には二匹の姿はなかった。ユーノは強制転移魔法で自分とアルフを別の場所へと飛ばし

たのだ。

「強制転移魔法・・・・いい使い魔を持ってる」

フェイトは静かな声で言う。

「ユーノくんは使い魔じゃないよ。わたしの友達！」

なのははデバイスを起動させフェイトと向かい合う。

「ねえ、どうしてあなたはジュエルシードを集めるの？」

なのはがフェイトに問い掛ける。なぜジュエルシードを狙うのか、何が目的なのか。・・・・俺は知ってるんだけどな。

「答えても・・・・多分意味がない。それに君もジュエルシードを集めているなら、私たちはジュエルシードを巡って戦う敵同士ってことになる」

フェイト・・・・それは少し乱暴な見解じゃないか？

「だから！そういうことを簡単に決めつけないために、話し合いって必要なことだと思う！そんなことを言ってたら、誰とも分かり合えないままだよ！」

なのはは叫ぶ。どこまでも真っ直ぐにフェイトの心に呼びかける。しかし・・・

「言葉だけじゃ伝わらない。思いだけじゃどうにもならない」

この少女の心を縛り付ける鎖は容易くは解けない。

「でも！」

なのはは尚も言葉を重ねようとするが・・・

「賭けて！お互いのジュエルシードを一つづつ！！」

フェイトはなのはの言葉を遮りデバイスを向ける。それはこれ以上の話し合いは無用と言外に語っていた。

「・・・・・・燎くん・・・・・」

なのはが俺を一瞥する。俺はなのはの目を見つめる。

「・・・・・・わかってるよ。お前に任せる」

俺はそう言って一歩下がった。俺はなのはと約束をしているのだ。フェイトのことは自分に任せてほしいと。決して手を出さないでほしいと。俺はその約束を順守する。

「ありがと」

再びフェイトに目を向けるなのは。あたりの空気が張り詰めていくのを感じる。

二人はじっと睨み合い、微動だにしない。俺はその様子を瞬きせずに見守る。

「！！」

「！！」

ダッ！！

同時に二人は地面を蹴り激突した。

戦いは今のところ互角の様子を呈しているように見えるが実際はフェイトがやや優勢だ。やはり魔導師としての経験はフェイトの方に一日の長がある。それでも以前よりは動きも格段に良く、何とか凌げているが長くは保たないだろう。

そして俺の読み通りとなりフェイトはなのはの油断を突き、一瞬でなのはの懐に入り込みバルデイッシュの刃をなのはの喉元に突きつける。

詰んだな。

レイジングハートがジュエルシードを排出する。

「レイジングハート！？」

突然の相棒の行動に驚くなのは。

「きっと、主人思いの良い子なんだ」

フェイトがレイジングハートを称賛する。フェイトはそのままジ

ュエルシードをバルデイッシュに収納する。

刃を引いて離れるフェイト。そして己の従者に呼びかける。

「アルフ、帰るよ」

主人の命を聞いた狼は人型になり駆け寄る。

「やったねフェイト～。さすがあたしのご主人様だよ♪」

主の手柄を我がことのように喜ぶアルフ。

フェイトはこちらを向き静かに告げる。

「もうこれ以上ジュエルシードに関わらないで。次は、手加減できなくなるかもしれない」

それだけ告げるとフェイトは背を向けて飛び去ろうとする。

「ま、まって！あの、名前・・・あなたの名前を教えて！」

なのはがフェイトの背中に呼びかける。

「・・・・・・・・・フェイト・テスタロッサ」

フェイトは自分の名をなのはに告げた。

「わ、わたしは・・・・」

なのはは自分の名前を言おうとしたが、言うより先にフェイトは

夜の空へと飛び去って行った。

「じゃ～ね～、おチビちゃんたち」

アルフもフェイトの後を追い、飛び去った。俺たちはそれを黙って見送った。

「・・・・・フェイト・テスタロッサ」

フェイト達が去った後、なのははボソリとフェイトの名前を呟いた。

無印編　第十一話　温泉旅行へ　後篇（後書き）

いかがでしたか。

次回はオリ話です。

お楽しみに。

それではまた。

無印編　第十二話　炎髪灼眼と金の閃光（前書き）

今回はオリジナルの話になります。

私なりに精一杯書いたつもりです。

楽しんでくれれば良いなと思います。

では、無印編第十二話

始まります。

無印編　第十二話　炎髪灼眼と金の閃光

Ｓｉｄｅ燎

フェイトと二度目の戦いがあった温泉旅行から早や五日、俺は学校を終えて一人で家に帰る途中だ。ちなみになのは達はそれぞれ用事があるとかで、今日は別行動。一人での帰宅は実に久しぶりだ。

それはそれとして、最近なのはの様子が少しおかしい。授業中もボーっとしてたり、俺たちが話しかけても上の空のときがあったりと。いかにも私悩んでますってのが丸分かりだ。

まあ、原因は間違いなく、フェイトのことだろうがな。アリサとすずかも気づいているようだし。伊達に長年友達はやっていないしかし、どうしたもんか。このままじゃ、原作のとおり、アリサと喧嘩になってしまう。アリサもなのはの様子にイラついているみたいだし。

アリサとしては悩んでるくせになにも相談してこないなのはにも友達が困ってるのに何も出来ない自分にも腹が立ってるんだろうな。あいつあれで友達思いだし。やっぱり俺が何とかするしかないか。

と、そんなことを考えているうちに家に着いた。俺は玄関の戸を開けて、中に入る。

「ただいまー」

靴を脱いで家に上がる。

「おかえりなさいであります」

居間からヴィルヘルミナが出てきて出迎えてくれた。

「ただいま、ヴィルヘルミナ」

俺はヴィルヘルミナにただいまを言って二階に上がろうとするが。

「燎さま」

「ん？」

ヴィルヘルミナに呼び止められた。

「なに？ヴィルヘルミナ」

どうかしたのか？

「このあと、一緒に天道宮に行って貰いたいのでありますが、よろしいでありますか？」

天道宮に？

「別に良いけど、どうして？」

「訳は後ほど、とりあえず着替えたら、居間に来てほしいのであります」

「ああ、わかった。すぐいくから」

俺はそう言って二階に上がり、自分の部屋で学校の制服から、私服に着替えた。ちなみにどんなのかというと、紺色のジーパンに黒いセーター、俺のお気に入りの一張羅だ。着替え終わった俺は部屋を出て居間に向かった。居間にはエヴァとヴィルヘルミナが待っていた。

「お待たせ。じゃ、行こうか？」

俺の言葉に二人は頷く。

「それじゃ・・・・開け！天道宮の扉！！」

俺は天道宮に行くための呪文を唱え、俺達は一瞬で天道宮へと転移した。

天道宮に転移した俺達はヴィルヘルミナに先導されて、城内を歩いている。俺はここに来た理由をヴィルヘルミナに訊いてみた。

「なあヴィルヘルミナ、どうしてここに来たんだ？」

いつもの修行というわけではないだろうし。

「はい。実は、女神ルティアより、手紙が届いたのであります」

「ルティアさんから？」

「はい。こちらであります」

ヴィルヘルミナは立ち止まり、こちらを向いて俺に一枚の手紙を差し出した。俺はそれを受け取り、内容を読んだ。

『やっほ～、燎。久しぶり～、元気にしてる？頑張ってなのはちゃん達助けてる？今日はそんな頑張り屋さんの燎くんにプレゼントがあるんだ～。実はね、天道宮にある部屋を二つ作ってみたの。どんな部屋かは開けてみてのお・た・の・し・み☆それじゃ、これからも頑張ってね。応援してるよ～。ルティア』

・・・・・・・なんというか、相変わらずだな。ルティアさんは。まあ、それはともかく・・・・

「部屋ね。ここに来たのはそれがなにか確かめるためか」

と、俺は納得した。

「そうであります」

「まあ、あの女神の作ったものだからな。お前にとって危険なものである可能性は低いが、念の為確認しておこうと思ってな」

ヴィルヘルミナは頷き、エヴァが説明してくれる。

「なるほどね。それでその部屋ってのは？」

「この先を真っ直ぐ行ってすぐなのであります」

ヴィルヘルミナは廊下の向こうを指して言う。ちなみになぜ分かるかというとヴィルヘルミナはこの天道宮を管理する闇の・・・いや夜天の魔導書でいうところの管制人格のような役割をもっているからである。この天道宮に何か異常があれば、即座にヴィルヘルミナが気付く様になっている。だから、ルティアさんに作られた部屋の場所もヴィルヘルミナには把握できるというわけである。ホント俺のデバイスたちは俺には勿体無いくらいのハイスペックだよな。

そして俺達は目的の部屋に着いたのだ。

「ここか・・・」

俺は並ぶ二つの扉を見上げて言う。どちらも随分でかい扉だ。・・・ん?上のほうになにか書いてある。右の扉の上には「仮面の間」と書かれたプレートが、左の扉の上には「戦士の間」と書かれたプレートが貼ってあった。

(「仮面の間」と「戦士の間」か・・・どういう意味だ?)

俺はそんなことを思いつつも扉を開けようとする。

「開けるぞ?」

後ろの二人にそう言い、二人は頷く。

ギィィィ。

俺は扉を開けて、中に入る。二人もそれに続く。

「こ、これは・・・」

俺は言葉を失った。仮面の間の中には昭和から平成にかけての全ての仮面ライダーの変身ベルトが宝物のように飾られていたのだ。否、ベルトだけじゃない。よく見ると、ライダー達が使っていた、武器まで飾られていた。

ドラゴンロッドにタイタンソード、キングラウザーにデンガッシャー、ザンバットソードにメダガブリューまで揃っている。その様は当に圧巻の一言だった。エヴァとヴィルヘルミナも開いた口が塞がらないようだ。なるほど仮面の間とはこういう意味か。まてよ、ということはまさか。

俺は仮面の間を出て隣の戦士の間に走り、扉を開けた。そこには・・・

「やっぱりか・・・・」

そう、そこには歴代のスーパー戦隊が使っていた変身装置と武器が仮面の間と同じように並んでいたのだ。さすがに数はこちらのほうが若干多いが。

「ルティアさん・・・・あなたって女神(ひと)は」

どこまでサービスすれば、気が済むんですか?まあ、たしかにありがたいですけど。っていうかこれって、どれもこれも完全にロストロギアだよな。大丈夫なのか?・・・などと俺が不安に思っていると・・・・

『燎!!』

突然アラストールの声が耳を打ち、俺は我に返った。

「どうした？アラストール・・・！？」

俺は何事かと相棒に訊こうとしたが、それより先にあるものを感じた。これは・・・・・

「・・・・ジュエルシードか」

そう、これはジュエルシードが発動した気配だ。

『うむ、間違いない』

『どうするよ？』

マルコシアスが訊いてくる。

「決まってるだろ？」

俺は不敵に笑って相棒達に言う。

『ふっ』

『へっ、だな』

二人も笑って答える。

「行くぞ！！」

俺は天道宮から転移しようとする。

「燎！」

「燎様！」

呼ばれて振り返るとヴィルヘルミナとエヴァがいた。一緒に行きたいみたいだが。

「ごめん、もうしばらく我慢してくれ」

俺は二人に謝りながら待機しているように言う。

「今回も留守番か」

エヴァが不満そうな声で言う。

「ごめん、二人の力は最後の方で頼りにさせてもらう。だから、それまで・・・」

俺は精一杯謝罪する。

「・・・わかったのであります」

『不承不承』

「ふん・・・仕方がない。だが、そのときは思う存分暴れさせてもらうからな？」

なんとか納得してくれた。

「ありがとう。じゃあ、行って来る！」

「ああ、行って来い」

「お早い、お帰りを」

二人に見送られ、俺はジュエルシードの場所へ転移した。

ジュエルシードの気配を辿って転移した場所はどこかの森の中だった。俺は辺りを見回しジュエルシードを探す。

（どこだ？・・・・ん？この魔力反応は・・・）

俺はジュエルシードの魔力とは別の魔力を感じ取った。初めはなのはが先に来ているのかと思ったがこれは違う。これは・・・・・フェイトの！

フェイトが来ていると分かった俺は、即座にデバイスを起動させバリアジャケットを纏う。そして脇目も振らずにフェイトのもとに向かった。

Ｓｉｄｅフェイト

私はジュエルシードの気配を感知してアルフを連れてこの森にやってきたのだが。

「ギェェエアアアアア！！！」

「くっ！」

今、ジュエルシードを取り込んだと思われる巨大な怪鳥と戦っていた。ここに来た途端にいきなり襲われて不意を衝かれてしまい、腕に深手を負ってしまった。さらに悪いことに利き腕の方だ。腕が痛んで上手くバルディッシュを振るうことが出来ない。

出来ることなら、あの白い子達が来る前に終わらせたかったけど。

「ギェアアア！！」

そんなことを考えている間にも怪鳥は勢いを休めることなく、襲ってくる。・・・・く、このままじゃ・・・

「こんのおおお！！」

アルフが怪鳥に向かって殴りかかるが、怪鳥は翼を大きく広げて勢いよく振るう。

ゴアッ！！

「うわあっ！」

怪鳥が起こした突風を叩きつけられたアルフは吹き飛ばされ後ろの木に激突した。

ドゴァ！！

「ガハッ！」

アルフはそのまま地面に落ちた。

「アルフ！！」

私は呼びかけるがアルフは動かない。気を失ったようだ。

「アルフ！・・・っく！」

「ギェエエエ！！」

アルフの所に行こうとするが怪鳥が行く手を阻む。

「このっ、邪魔だぁ！！」

私はバルディッシュを振り上げ、意識を集中させ魔法を発動させようとするが・・・

ズキッ！

「ウグッ！」

腕の傷が痛みで集中力が乱れて、魔法が発動できない。

「ギェアッ！！」

その隙を突いて怪鳥がまた翼を広げて、羽ばたかせ、突風を私に放ってきた。私は回避しようとするが、傷の痛みのせいで回避が遅れてしまった。

「しまっ・・・・きゃあああああ！！」

ブォン！！・・・ドガアッ！！

「ぐはっ！！」

アルフと同じように木に叩きつけられた私はそのまま地面に落ちた。

「うっ・・・くうっ・・・・」

急いで起き上がろうとするが体に力が入らない。まずい、このままじゃあ。

顔を上げると怪鳥が止めを刺そうとこっちに突進してくる。逃げなきゃ、でも体が動かない。

ゴオオオオッ！！

怪鳥はどんどん迫ってくる。ダメだ。動けない。

（いやだ・・・こんなところで・・・・終わるなんて。私はまだ、あの人の・・・・）

私の脳裏に私の大切な人達が浮かんできました。アルフ、リニス・・・・・・母さん。

怪鳥はもう間近に来ています。もうダメだと、私は目を瞑りました。

・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・おかしい。いつまでたっても衝撃がこない。

私は不思議に思って、目を開けました。そこには・・・・・・

「やれやれ、何で俺はこう誰かのピンチによく遭遇するんだか」

怪鳥の突進を大剣で受け止めている、あの白い子と一緒にいた、もう一人の黒い髪の子が私に笑いかけていた。

無印編　第十二話　炎髪灼眼と金の閃光（後書き）

フェイトのピンチに駆け付けた燎。

燎がフェイトを助けるところは一護が双極の矛を受け止めているところを想像してみてください。

では今回はこの辺で。

また次回お会いしましょう。

お楽しみに。

無印編　第十三話　炎龍咆哮（前書き）

今回はオリジナル技を出します。

フラグも立つかも？

それでは無印編第十二話

始まります。

無印編　第十三話　炎龍咆哮

Ｓｉｄｅ燎

ジュエルシードの力で巨大化した鳥にフェイトがやられそうになってるのが見えて、吸血鬼（ブルートザオガー）をルティアさんから貰った能力「神具創造」で作り出し、鳥の突進を間一髪で防ぐことはできた。しかし、なんで俺ってこうも誰かのピンチに良く出会うんだ？・・・・まあ、いいか。

とにかく今はこの鳥を倒すのが先だ。俺は呆然と俺を見ているフェイトを見る。うわー、完全にポカーンとしてるよこいつ。まあ、いきなり敵対しているはずの奴が現れて自分を助けてるんだからな。無理ないか。・・・ん？フェイトの腕に傷が・・・・なるほど、これのせいで苦戦していたのか。やってくれるじゃないか・・・・この阿呆鳥が。

「大丈夫か？」

「えっ・・・あ、あの」

俺に話しかけられてフェイトは狼狽える。だが俺はかまわず続ける。

「少し、待ってろ。・・・・・・すぐ終わる」

「え・・・・？」

ギシッ！・・・・ギャアンッ！！

「ギエッ！」

俺は吸血鬼（ブルートザオガー）を振るい、鳥を弾き飛ばす。

「おい、くそ鳥、お前は震えたことがあるか？」

俺は全身から殺気を迸らせる。

「その身を切り裂き、魂さえも凍てつかせる、死の恐怖を感じたことがあるか？」

吸血鬼（ブルートザオガー）を正眼に構え魔力を流し込む。大剣に血色の波紋が浮かび上がる。

「震えよ！畏れと共に跪け！！」

恐れることなく、眼前の魔鳥に言い放つ。

「ギアアアアアア！！」

魔鳥は耳障りな叫び声をあげ、こちらに突進してくる。避けるのはたやすいが、俺の後ろには動けないフェイトがいる。・・・ならばっ。

「うおおおおおお！！」

ガアンッ！！

俺はまた魔鳥の突進を大剣の腹で受け止め、今度は足の裏から魔力を放出しブーストを掛けて、魔鳥を押し戻す。

「うぉりあああああ！！」

ゴォアアアア！！

魔鳥は俺の勢いに押され、後退していく。俺は十分にフェイトとの距離が離れたところで、剣を突き出し魔鳥を弾き飛ばす。魔鳥は翼を使い空中で体勢を立て直す。

「さあ、ここなら思い切りやれる。仕切り直しといこうぜ」

俺は大剣を肩に担ぎ不敵に笑う。・・・そうだ。

「そういえば、新しく作った技があったんだった。丁度いい、お前で試すとしよう」

俺はブンッと大剣を振るい、大地に突き刺した。

ドスッ！

「さあ、とくと味わえ。アラストール、魔力変換『炎熱』！！」

『承知！』

カッ・・・ゴアアアアアア！！！

俺は魔力変換『炎熱』を発動させた。俺の周囲に炎が円形に湧き上がり、巨大な火柱となって天を衝かん勢いで燃え上がる。やがて、

火柱は形を変える。それは・・・・・・

グォオオオオオオオン！！

とぐろを巻いた巨大な炎の龍となった。

これが俺のオリジナル魔法、炎を身に纏い、自身が炎の龍となる。
名付けて・・・・・・

「炎龍天舞（えんりゅうてんぶ）！！」

ゴオオオオオオオオオ！！！

魔鳥は巨大な龍となった俺を見上げる。その眼には恐怖の色が見て取れた。今の俺の姿に威圧され完全に戦意を失ったようだ。しかしだからと言って、許してやるつもりはない。お前は俺の護るべき相手を傷つけたんだ。相応の代償は払ってもらうぞ！

俺は炎龍の中で吸血鬼（ブルートザオガー）を構える。狙うは眼前の魔鳥、容赦は無し！

「焼き鳥にしてやるぜ。・・・・・阿呆鳥！！」

炎龍を纏い魔鳥に向かい突撃する。

「はあああああああああっ！！」

俺の意思に応えるように眼前の敵を食らいつくさんと巨大な喢を開く炎龍。それは一切の慈悲無く全てを燃え散らす。

「紅蓮覇龍剣(ぐれんはりゅうけん)！！！」

ゴッ・・・バアアアアアア！！！

炎龍の牙が魔鳥を屠り去った。

「ギェエエエアアアアアアア！！！」

炎龍に焼き焦がされけたたましい叫び声をあげて、焼き尽くされていく魔鳥。足掻こうと無駄だ。俺の炎からは逃れられない。やがて叫び声も消え、俺の目の前にジュエルシードが現れる。俺は手を伸ばしジュエルシードを掴む。

「灰は灰に、塵は塵に。・・・・討滅完了」

俺は手の中にあるジュエルシードを見て呟いた。

Ｓｉｄｅフェイト

私は離れたところからあの子の戦いを見ていた。それは殆ど一方的なものだった。あの子の生み出した炎の龍が瞬く間に怪鳥を焼き尽くした。圧倒的、そんな言葉が相応しい場景だ。私は一瞬で理解した。あの子はあの白い子やそして私よりも間違いなく格上だ。

勝てない。それどころか、挑むことさえ愚かしいとさえ思えてし

まうほどの歴然たる実力差。もしあのとき戦っていたのがあの白い子じゃなく、あの子だったなら、私は間違いなく負けていただろう。そう思うとゾッとする。震えが止まらない。

あの子の魔法の余波で周りはまさに煉獄とさえ思えるほどの火の海だ。そんな地獄のような光景の中で少しも動じることなく悠然とその中に佇んでいるあの子の姿に私は、炎の化身を幻視した。

この先あの白い子が私たちの前に現れるならこの子とも戦わなくちゃいけなくなるかもしれない。でも私にはこの子に勝てる気が微塵もしない。きっとアルフと一緒に戦っても勝てないだろう。それほどまでに私とこの子の力の差は隔絶しているのだ。でも・・・それでも私は・・・あの人のために、ジュエルシードを・・・・・

ザッ

「!!」

そんなことを考えているとあの子がこっちにやってくる。ど、どうしよう?私じゃこの子には勝てない。逃げるしかない。でもアルフを置いていけない。そうこうしているうちにもう私の目の前に来ていた。黒い瞳が私を見下ろしている。私も見上げてその子の目を見る。それは数秒間の沈黙だっただろう。しかし私には永遠のように感じられた。その沈黙を破ったのはあの子だった。

「大丈夫か?」

「・・・・・え?」

その子は優しい声でそう語りかけた。

Ｓｉｄｅ燎

阿呆鳥を倒してジュエルシードを回収した俺は、フェイトの所に戻った。フェイトの近くまで来て、体を見る。見たところ、腕の傷以外で、目立った外傷はないようだ。うん、よかった。

「大丈夫か？」

「・・・・・え？」

俺の言葉にフェイトは未だに呆然としたままだった。おいおい、ホントに大丈夫か？まあ、とりあえず腕の傷を治そうか。しゃがんでフェイトと顔の位置を合わせる。

「腕、出してみ？」

「え？」

「腕だよ腕。怪我してるんだろう。治してやるから」

「で、でも」

「いいから」

「う・・・・うん」

根負けしたのかフェイトは怪我をした腕をだす。俺は患部に手を

かざした。

「活力に満ちよ。ファーストエイド」

俺は基本的な治癒呪文をフェイトにかけた。このぐらいの傷なら、これで大丈夫だろう。暖かさを感じる光がフェイトの傷を癒す。そして光が消えたあとにはフェイトの腕には傷跡も残っていなかった。

「すごい」

感嘆の声を漏らすフェイト。

「あ、あの・・・」

「ん？」

「あ・・・ありがとう」

顔を真っ赤にしながらお礼を口にするフェイト。

「どういたしまして」

俺も笑って答えた。

「！！／／／／」

ん？なんかフェイトの顔がさっきよりも真っ赤になっているような・・・気のせいか？

「で、でも・・・どうして？」

「え？」

「どうして助けてくれたの？私はあなた達の敵なのに」

敵ねえ。俺は別にフェイトのこと敵だなんて思っちゃいないけど。まあ、それはなのはも同じだろうがな。

「ん～逆に訊くけどさ。お前、目の前で困ってる人がいたらどうする？」

「え？そんなの助けるに決まって・・・」

「どうして？」

「どうしてって、それはただ、助けたかったから」

フェイトの言葉に俺は笑みをこぼす。

「同じだよ」

「え？」

「俺も同じ。ただお前を助けたかった。それだけだよ」

「それだけの・・・理由で？」

「そうさ。人が人を助けるのにな、御大層な理由や理屈を並べたてる必要なんてないんだよ。ただ助けたい。放っておけない。それだけでいいのさ、人を助ける理由なんて」

そうだ。誰かを助けるのに、いちいち御大層な理由なんてものは要らない。ただ助けたい。護りたい。それだけで人は誰かのために頑張ることができるのだから。

「そう・・・なのかな？」

「そうだよ」

それだけ言って俺は立ち上がる。

「じゃあな。俺はもう行くよ。あっちで倒れてる使い魔も特に外傷はないから安心しろ。んじゃあな」

俺は転移しようとするが・・・・・・

「ま、まって！」

「あん？」

フェイトに呼び止められた。

「あ、あの、名前・・・教えてくれないかな」

こりゃ驚いたな。まさかフェイトの方からこんなことを言われるとは。まあ、断る理由はないな。

「燎・・・神薙燎だ」

「わ、私はフェイト・・・フェイト・テスタロッサ」

フェイトも自分の名を名乗る。

「知ってる。じゃあな、フェイト」

俺はフェイトの頭を優しく撫でる。おおう、すっげえ髪つやつや。

「／／／／」

あれ？フェイトの顔がまた赤いような。

「あ、あの燎・・・・ま・・・・また、会えるかな？／／／」

「・・・・ああ、また会えるさ。・・・・・・だからまたな、フェイト」

そう言って、俺は転移した。

無印編　第十三話　炎龍咆哮（後書き）

ではまた次回お会いしましょう。

お楽しみに。

無印編　第十四話　惑う心（前書き）

今回から各マンガやアニメの名台詞を載せていこうと思ってます。

なにかお勧めのがあれば是非とも送ってください。

ちなみに今回のはＦａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔから

「問おう、貴方が私のマスターか」

やっぱりＦａｔｅと言えばこのセリフでしょう。

それでは無印編第十四話始まります。

無印編　第十四話　惑う心

Ｓｉｄｅ燎

「いいかげんにしなさいよ！！」

放課後の教室にアリサの怒声が響いた。皆何事かとアリサのほうを見やる。何があったのかというと、フェイトのことで未だに悩みっぱなしのなのはにいい加減アリサの堪忍袋の尾が切れたのだ。アリサにしては結構持った方だと思う。

「アリサちゃん・・・・」

当のなのはは戸惑った目で長年の友人を見る。

「ふんっ！」

そんななのはを尻目にアリサは足早に教室から出て行ってしまった。

「あ、アリサちゃん！」

すずかがその後を追う。

「・・・・・・・・」

一人残されたなのはは二人を追うことなく俯いてじっとその場を動かなかった。

「・・・・なのは」

俺は俯いているなのはのそばに寄る。

「・・・・燎くん」

なのはは顔を上げて俺を見る。

「アリサのことならあんまり気にするなよ。あいつなりにお前のことが心配なんだ」

俺はそうなのはを励ます。

「うん・・・わかってる。悪いのは、私の方だから」

あまり効果はなかったようだ。なのははまたも俯いてしまう。あぁ～もう、本当にこいつらは世話の焼ける。

「そうか・・・・」

そして俺達も教室を出た。それからなのはと別れて家に帰る途中、公園の前を通りかかった。ふと公園を見てみるとアリサとすずかがいた。アリサの方は目に見えて落ち込んでいるようである。大方、さっきなのはに怒鳴ってしまったことを気にしてるんだろう。すずかのほうも元気がないように見える。

放っておけず、俺は二人のところに向かう。

「よう、お二人さん」

俺が近づくと二人は気付いてこちらを見た。

「「燎(くん)」」

二人の声にもいつものような元気がない。

「どうした？なんか元気ないな」

「そ、そんなこと・・・」

「う・・・うん」

はぁ～～・・・やれやれ。

「気にしてるのか？なのはに怒ったこと」

俺は容赦なく図星を突いた。

「う・・・」

図星を突かれアリサは呻く。

「はぁ～～、気にするぐらいなら最初からしなきゃいいのに」

「だ、だってしょうがないじゃない！あんただってわかってるでしょ？あの子、悩んでるのが丸分かりじゃない！」

俺の言葉にアリサが反論する。そりゃあな、俺はなにで悩んでるのかも分かってるし。

「なのに、なんで・・・なんで言ってくれないのよ?」

悔しそうに歯噛みするアリサ。

「アリサちゃん」

それを沈痛な面持ちで見つめるすずか。

「あたしだって、あんなことしたくなかったわよ。でもあの子、全然話してくれないし、ずっと一人で考え込んでるし、あたしたち、頼りにならないって思われてるんじゃないかって思って、そしたらカッとなって・・・う・・・うう・・・ぐすっ・・・・」

アリサの目から涙が滲み出る。きっとこいつが本当に許せないのは、なのはじゃなくて、なのはが悩んでいるのに何もできない自分自身なんだろうな。

「う・・・うう、ひっく・・・ぐすっ・・・」

見てみると、すずかも嗚咽を漏らしながら泣いている。すずかも同じ気持ちなようだ。

まったくなのはは果報者だな。こんなに友達思いな友人に恵まれて。

「アリサ・・・すずか」

フワッ・・・・・・ギュウ

「えっ？」

「ふわっ」

俺は二人をいっぺんに抱き締めていた。

「バカだな。なのはがそんなこと思ってるわけがないだろう。あいつがそんな奴じゃないってこと、よく分かってるだろう？」

優しく二人に言い聞かせる。

「で、でも」

「あいつはな、何か困ったことが起きるとすぐに一人で抱え込もうとするんだ。周りに迷惑をかけたくないって言ってな」

「そんな・・・迷惑だなんて」

「ああ、わかってる。お前達はそんなこと気にしないってことは十分にな。でもそれだけ、あいつにとってお前達が大切な存在だって証拠だ」

「それは・・・・・」

「それにな、誰にだって簡単に人に言えないことはあるもんだ。俺にだってあるし、二人にだってあるだろう？」

俺にとっては前世のこととか、転生のこととかな。

「・・・・・うん」

「だからさ、信じてやれよ、なのはを。信じて待っててやれ。それは友達にしかできないことだ」

他人を信じるのは、口で言うのは簡単だけど、実際はとても難しいし、とても恐いことだ。裏切られるかもしれない。無意味になるかもしれない。そんな恐怖が常に付きまとう。でも、信じるものがあるからこそ人は生きていけるのもまた事実だ。信じられるものがあるから、本当の意味で生きていけるんだろう。

「きっとなのはは、大丈夫だ。あいつは強い。それに決して一人じゃない。こんなにあいつを想ってる友達がいるんだからな」

友達がいる。それはきっとこの世で一番素晴らしい奇跡だろう。誰かがそばにいてくれる。それはこの世で何にも代えがたいことだろう。

「「・・・・・うん」」

二人は俺の肩に顔をうずめて言った。

これで二人は大丈夫だな。さて次は、なのはだ。

無印編　第十四話　惑う心（後書き）

アニメやマンガの名台詞でお勧めのものをよろしくお願いします。

感想、意見など至らないところがありましたら、遠慮なく送ってください。いつでもお待ちしております。

では次回をお楽しみに。

無印編　第十五話　少女の決意（前書き）

鉄槌の騎士様からのおススメの名台詞

「生きる方が戦いだっ！」

アニメ「機動戦士ガンダムＳＥＥＤ」のカガリ・ユラ・アスハの名台詞です。

生きることの尊さ、大切さを訴えかける、そんな台詞ですね。

このような作者に協力していただいて、鉄槌の騎士様、ありがとうございます。

ほかにもこれがお勧め！という名台詞があれば遠慮なくお送りください。

送っていただいた名台詞は作中でも使おうかと思っております。

それでは無印編第十五話始まります。

無印編　第十五話　少女の決意

Ｓｉｄｅ燎

俺はあの後、アリサ達と別れて一旦家に帰って私服に着替えてから、今なのはの家に向かっている。その道中、俺はさっきのことを思い返していた。思い返して顔が熱くなるのがわかった。

流石にあれは少しやりすぎたかと思う。いくらなんでも抱き締めるのは不味かったな。あの後二人ともすごい顔真っ赤にしてたし。つい年上感覚で接してしまうんだよな、なのはのときもそうだったし。気を付けてはいるつもりなんだが。あんまりやりすぎると嫌われるかもしれないしな。うん、もっと気を付けよう。

思案に耽っているうちになのはの家に着いた。俺はチャイムを鳴らすと、なのはが出てきた。今家にはなのはとユーノだけらしい。

俺はお邪魔して、なのはの部屋に入った。ベッドの上にユーノがいたので軽く挨拶をする。

「よう、ユーノ」

「やあ、燎」

俺はそのまま、床に座る。なのはも俺の対面に来る。

「それで燎くん、どうかしたの？」

なのはが訪問の理由を尋ねてくる。

「いや、お前がアリサと喧嘩して落ち込んでるんじゃないかと思ってな」

俺はとりあえず、そう答える。

「心配してくれたんだ」

なのははわずかに顔を綻ばせる。

「いや?落ち込んでるお前の顔を見物しようかと思っただけ」

俺はニヤッと笑いながらからかうように言った。

「むう~。燎くん、いぢわるなの」

ふくれっ面になって怒るなのは。全然怖くないけどな。

「あはは」

俺たちのやり取りをみて苦笑するユーノ。

「まあ、それは冗談として、あんま気にしすぎるなよ?あれでもアリサもお前のこと心配してるんだ」

と、なのはにアリサの胸の内を伝える。

「・・・うん、分かってる。・・・・・・悪いのは私だから・・・・・」

顔を俯かせるなのは。・・・・・まったくしょうがないな。

「なのは」

ポンッ

「ふえっ？」

俺はなのはの頭に手を乗せてそのまま優しく撫でる。抱き締めるのは自重した。さっき反省したばかりだからな。

「りょ、燎くん・・・・／／／」

抵抗せずにされるがままのなのは。恥ずかしいのか、ほんのり顔が赤い。

「お前が最近悩んでる理由は分かってる」

「！」

俺の言葉になのはが顔を上げる。

「フェイトのことだろ？」

・・・・・・・コクッ

なのはは無言で頷いた。

「あの娘・・・フェイトちゃん、すごく悲しい目をしてたの。まる

で、燎くんに会うまえの私みたいな・・・・」

そう呟くなのは。

確かにフェイトのあの目は出会った時のなのはと同じ目だ。悲しみや苦しみを押し殺して、その悲しみや苦しみに心が押し潰されそうになっている目。

なのははフェイトと以前の自分とを重ねて見ているのか。

「そうか・・・それで、なのははどうしたいんだ?」

「え?」

「それが分かったうえで、お前はどうしたい?このまま、フェイトと戦うか?これまでと同じようにジュエルシードを賭けて」

「・・・私は・・・・・」

なのはは目を瞑って考え込む。今なのはは自分の心に問うているんだろう、自分がどうしたいのか。

「私は・・・・・知りたい。どうしてあんな悲しい目をしているのか、フェイトちゃんの口からちゃんと訊きたい!」

目を開けて決然とした声でそう言い放った。

「それを知ってどうする?」

俺は重ねて訊く。

「もしなにか事情があるのなら、力になってあげたい。私にも、なにか出来ることがあるかもしれないから」

「それをあいつが拒んでもか？」

「・・・・うん」

「それはお前の独善だぞ」

「そうかもしれない。でも、それでも私は、フェイトちゃんを助けたい！」

なのはは迷いなく言葉を紡ぐ。

「フェイトちゃんは、私と同じなの。悲しくて、苦しくて、辛くて、それを全部押し殺して、涙を堪えて、でも心の中じゃずっと独りぼっちで泣き続けてる。誰かに助けて欲しくて、でも誰にも言うことができなくて、何もかも全部一人で抱え込んで苦しんでる」

なのはの目から涙が滲み出る。なのははそれを手の甲で拭う。

「でも、私は燎くんに助けてもらった。燎くんが私を暗い闇の中から引っ張り上げてくれた。私の涙を止めてくれた。だから今度は、私がフェイトちゃんを助けたい。フェイトちゃんの涙を止めてあげたい。フェイトちゃんの手を掴みたい。だから私、何度でもフェイトちゃんに呼びかけるよ。フェイトちゃんの心に私の言葉が届くまで」

俺はなのはの目を見つめる。その目は決意の光で眩しいくらいに

輝いていた。

「そうか」

俺は一言そう言った。

「まあ、そういうわけだユーノ。悪いんだが、協力してくれないか？」

そしてベッドの上のユーノに言う。

「もちろん僕はかまわないよ。元々、二人を巻き込んだのは僕なんだし、そういうことならいくらでも力になるよ」

ユーノは快く承諾してくれた。

「悪いな。もちろんジュエルシードのほうも放っといたりしねぇから」

「うん」

「ごめんねユーノくん。私のわがままに付きあわせて」

なのはもすまなそうにユーノに謝る。

「ううん、いいんだよなのは。気にしないで」

ユーノは穏やかに答える。

「・・・・・うん」

「あとなのは、明日学校でちゃんとアリサとすずかに謝っておけよ？二人ともすげー心配してたんだからな」

「うん、わかったの。ありがとう、燎くん」

満面の笑顔を見せるなのは。こいつの笑顔は、なんだかこっちまで幸せな気持ちにさせるんだよな。

さて、なのはの決意も固まったし、ここからが正念場だな。フェイト、プレシア、お前たちの運命は必ず俺が変えてやるからな。

無印編　第十五話　少女の決意（後書き）

これからも、お勧めの名台詞がありましたら、どんどん送ってください。

他にも感想、意見等もお待ちしています。

それではまた次回をお楽しみに。

無印編　第十六話　災厄の暴走（前書き）

今回はパール様からのおススメの名台詞

テイルズオブグレイセスのパスカルより

「（ソフィ）のために、皆のために！あたしは、勝利を具現する！」

パール様からはこの台詞ははやてに使って欲しいと言われました。

自分としてもそうしたいと思っています。

使いどころとしてはA's編の闇の書の防衛プログラムへの全員総攻撃のあたりでしょうか。

では無印編第十六話、始まります。

無印編　第十六話　災厄の暴走

Ｓｉｄｅ燎

なのはの決意から三日が経った。あの翌日、学校でなのははアリサとすずかに謝り、悩んでいた理由を打ち明けた。もちろん魔法やジュエルシードのことは伏せたが。

それを聞いた二人は、笑ってなのはを応援すると言ってくれた。それを聞いてなのはも笑顔になり二人にありがとうと言った。やっぱ友達っていいもんだなと、俺はしみじみそう思った。

そして今日もいつも通りに授業終えて、いつもの様になのはたちと談笑しながら家に帰った。今は自分の部屋でベッドの上に寝転がりながら本を読んでいる。

これ読んだら、少し寝ておくか。多分今夜あたりがジュエルシードの暴走の日だろうし。俺は本を読み終えて、今夜に備えて目を瞑った。すぐに眠気が襲ってきて俺は抵抗せずに身を任せて眠りについた。

Ｓｉｄｅフェイト

私は今、ベッドの上で横になっている。さっきアルフが食事を持ってきてくれたけど、なんだか食欲がわかない。アルフは今下の方で買ってきたドッグフードを食べている。美味しいのか訊いてみたら、中々いけるらしい。

今私の頭の中にはある人の顔が浮かんでいる。

それはあの子の顔。あの白い魔導師の子と一緒にいた、綺麗な黒い長い髪の子。数日前に私とアルフを助けてくれた子。

「神薙・・・・燎」

私は無意識にあの子の名前を呟いていた。何故だろう、あの子の顔を思い出す度、あの子の名前を呟く度に心臓の動悸がより強くなる。

あの子に・・・燎に助けられてから、ずっとこんな調子だ。私は一体どうなってしまったんだろう?

目を瞑るとあの時のことが瞼の裏に浮かび上がる。数日経った今でも強く鮮明に思い出すことができる。あの時、ジュエルシードの力を受けた鳥に不意を突かれてやられそうになったとき、颯爽と現れて圧倒的な力で瞬く間に鳥を焼き尽くした。

最初私は燎のあの力に恐怖した。けれど、あの後の私の怪我を治してくれたときに見せた、燎のあの笑顔。燎はあの時、とても優しい目をして笑っていた。その笑顔を見た瞬間、私の中から恐怖は消えていた。代わりに胸の鼓動が強くなるのを感じた。

あの後、私は燎にまた会えるかと訊いた。どうしてあんなことを訊いてしまったのかは解らない。でも、あの時私はまた会いたいと思った。また会ってあの笑顔をもう一度見たいと思ってしまった。

その問い掛けに燎はまたなって言ってくれた。それを聞いたとき

私は嬉しさが込み上げてくるのがわかった。

今日も私はジュエルシードを探しにアルフを連れて街に出る。私が魔法を使えばそれを察知してきっとあの白い子と燎もくるだろう。燎とまた会える、そう思うだけで私の心臓の音は早くなる。

燎にまた会いたい。そう思っている私がいるのがわかる。でも会えば、きっと戦わなくちゃいけなくなる。燎とは戦いたくない。力の差とかそんなの関係なしにそう思う。でも、ジュエルシードは手に入れなくちゃならない。

それにきっとあの白い子も来るのだろう。できればあの子とも戦いたくない。あの子が傷つけばきっと燎は悲しむだろう。私は燎を悲しませたくない。それになんとなくだけどあの白い子もきっと優しい子なんだろうと思う。だってあの燎が力を貸しているんだから、悪人なはずがない。そんな子を傷つけるのは・・・やっぱり、嫌だな。

でも、私はどうしてもジュエルシードを手に入れなければならない。母さんがそれを望んでいるから。私は母さんの娘として母さんの望みを叶えたい。

（だから・・・・ごめんなさい）

私は心の中で燎とあの白い子に謝る。

さぁ、もう起きよう。出来る限り速く、そして確実にジュエルシードを回収して撤収する。そうすればあの二人とも戦わずに済むかもしれない。

私はようやく心臓の動悸の治まった体を起こして、ベットから出る。そして、魔力でマントを作りそれを羽織る。

「さあ、行こう。母さんが待ってるんだ」

その言葉で決意を奮い立たせて、私は下にいる相棒の元へと向かう。

Ｓｉｄｅ燎

・・・・・・・・！！

魔力反応を感じて俺の意識は現実に引き上げられた。この魔力は、フェイトのものじゃないな。とすると、アルフか？ったくあいつら・・・結界も張らずに街中でおっぱじめやがって。

ん？・・・・結界？これはユーノか。ははっ、中々ナイスだ。ユーノ。

「アラストール、マルコシアス」

俺は相棒達に呼びかける。

『うむ、行くか』

『おっしゃあ、今日もいっちょ暴れるかぁ！』

どうやら、二人もやる気満々のようだ。

「今日はエヴァとヴィルヘルミナも連れて行くか」

『あん？いいのか？』

俺の言葉にマルコシアスが怪訝そうに訊いてくる。

「ああ。ここらで少し発散させてやらないと、後々やりすぎるかもしれないからな。・・・・特にエヴァは」

『ぎゃはははは！！ちげぇねぇ！！』

大笑いするマルコシアス。

（おい、二人とも、今の感じたか？）

俺は二人に念話を送る。

（はい。感じたのであります）

（ああ、私もだ）

二人からの返事が返ってくる。

（なのはたちも向かってるだろう。俺もこれから向かう。それと喜べ、今日はお前たちも一緒だ）

俺は二人に一緒に行く旨を伝える。

（おお、本当か）

（了解したのであります）

エヴァは嬉しそうな声を上げた。ヴィルヘルミナは分かりにくいが声の中に喜びがわずかに混ざっていた。

（つーわけでだ。ちゃっちゃと行って、ちゃっちゃと済ませるぞ）

『『（（うむ（おう）（ああ）（了解））』』

そして俺達も現場へと向かった。

Ｓｉｄｅなのは

ユーノくんと一緒に街を歩いてジュエルシードを探していたら、突然魔力を感じた。それに続いて、ジュエルシードの光が空に向かって伸びていくのが見えた。ユーノくんが結界を張ってくれたから、町の人に気付かれずに済んでよかった。

私も気持ちを切り替えて、レイジングハートを起動させた。

「レイジングハート、お願い！」

『スタンバイ・レディ、セットアップ』

私はいつものバリアジャケットを身に着け、杖になったレイジングハートを握りしめる。

「行くよ、ユーノくん、レイジングハート」

「うん」

『オールライト』

フライヤーフィンを展開して私はジュエルシードの所へ飛んだ。

ジュエルシードの光の下に来ると丁度、路の真ん中あたりにジュエルシードが浮いているのが見えた。私は道路に下りて、レイジングハートを変形させ、ジュエルシードに狙いを定める。ふと上を見るとフェイトちゃんもデバイスをジュエルシードのジュエルシードに向けていた。

私はフェイトちゃんよりも先に封印するために、自分の呪文を唱える。

「リリカル・マジカル」

「ジュエルシード、シリアル１４」

フェイトちゃんも同じように言葉を紡ぐ。

「「封印！！」」

私とフェイトちゃんの声が重なり、私たちは全く同時に、ジュエ

ルシードに魔法を放った。

ドウウウウウウウウウン！！！

私たちの魔法がジュエルシードに当たり、封印は完了した。

（これでジュエルシードは大丈夫。燎くんもきっと、こっちに向かってくれてるはずだし）

そう思った私はゆっくりと電灯の上に立っているフェイトちゃんに近づく。

「なのは、早く確保を！」

ユーノくんが言ってくる。

「そうはさせるかい！」

あの狼のお姉さん・・・・アルフさんだっけ？彼女が私を阻もうと上から襲いかかってきた。でも、寸でのところでユーノくんが防御壁を張ってくれたおかげでアルフさんを退けられた。

「ありがとう、ユーノくん」

私はユーノくんにお礼を言い、改めてジュエルシードを挟んでフェイトちゃんと向かい合う。

「ねえ、フェイトちゃん。私達にはお互いに目的がある。どうしても果たしたい目的が。だからぶつかり合うのは仕方がないのかもしれない。だけど・・・・私は、やっぱり知りたいんだ」

「・・・・？」

「この間は、ちゃんと自己紹介できなかったけど、私、なのは、高町なのは。私立聖祥大附属小学校の三年生」

私はまず自分の名前を伝える。それをしなきゃ、何も始まらないように思えたから。

でも、フェイトちゃんは、かまわず前の様にデバイスを鎌の形に変形させて、それを私に突きつける。私もレイジングハートを両手で持って構える。

（どうして、そんな寂しい目をしているのかを・・・・）

少しの沈黙の後、私達は合図もなしに、同時に動いた。

ドゥンッ、ガガァン、ズバゥッ、ゴアァッ

私とフェイトちゃんはお互いに夜の街を縦横無尽に飛び回り、お互いの魔法を撃ち合う。私も初めの頃よりは大分、魔法を使うのにも慣れてきたけれど、それでもやっぱりフェイトちゃんは強い。どれだけ魔力弾を撃っても、かすりもしない。全部避けられてしまう。スピードはフェイトちゃんの方が圧倒的に上だ。

フェイトちゃんも隙を見ては黄色い電撃を私に放ってくる。私はそれを紙一重で躱す。うん、やっぱり思った通りだ。この電撃、威

力は凄いけど、狙いがなんだか、単調で避けやすい。多分フェイトちゃんは私みたいに遠くから狙って撃つよりも、お兄ちゃんや燎くんみたいに近づいて戦う方が得意なんだ。

（このまま、フェイトちゃんを近づけさせなければ・・・・・）

そう考えていると、いきなり私の前からフェイトちゃんが消えた。

・・・ううん、違う。これは！

『フラッシュムーブ』

私はほぼ反射的に魔法を発動させていた。私の体は一瞬だけど高速で移動する。移動した場所は、私の後ろに来ていた、フェイトちゃんのさらに後ろ。多分、フェイトちゃんは私が使った魔法と同じような魔法で私の後ろに回って、私の首か頭にデバイスを撃ち込んで気絶させるつもりだったのだろう。でも悪いけど、そう簡単にはいかない。

『ディバインシューター』

私は魔力弾を形成し、撃ち出す。

ドゴァッ！！

『デイフェンサー』

しかし、フェイトちゃんは一瞬早く、魔法で私の攻撃を防いだ。

私はさらに追い打ちをかけるようにデバイスをフェイトちゃんに向ける。フェイトちゃんも素早くデバイスを向ける。

「フェイトちゃん！」

私はフェイトちゃんに向かって叫ぶ。届くかどうかはわからない。でもやらずにはいられない。

「言葉だけじゃ、思いだけじゃ、何も伝わらないって言ったけど、だけど言葉にしなきゃ伝わらないこともきっとあるよ！」

私はさらに言葉を紡ぐ。あの時、燎くんが私にしてくれたように、私は自分の言葉にありったけの想いを込める。そうじゃなきゃ、きっとフェイトちゃんには届かない。

「ぶつかりあったり、競い合うことになるのは・・・仕方がないのかもしれない。でも！なにも分からないままぶつかり合うのは、私は嫌だ！」

前に燎くんが言っていた。自分と誰かは違う存在、だから、意見が食い違ったり、反発しあって争うことになってしまうこともある。でもそれもまた、分かり合うための一つの形なんだって。悲しいけれど、そうすることでしか、分かり合えない時もあるって。だからこそ、ぶつかり合うのを恐がっちゃいけないって。そして、最後に燎くんは言ってた。争いを乗り越えた先にある、分かり合えた未来を、信じなきゃいけないって。

「私がジュエルシードを集めるのはユーノくんを手伝いたいから。ユーノくんは自分の失敗に責任を感じてた。良く知らない世界で、たった一人で頑張ろうとしてた。私はそんなユーノくんの力になってあげたかった。それが理由の一つ。もう一つは、私が住んでいるこの町を護りたいから。この町に一緒に暮らしている、大切な家族や友達を護りたいから。ジュエルシードとか、そんな分けのわから

ない物のせいで私の大切な人たちが、傷ついたり、苦しんだりするのは、私は耐えられない。それがもう一つの理由。きっと燎くんも、同じ理由だと思う」

「・・・・・・・・・」

私の言葉をフェイトちゃんは黙って聞いていた。何を考えているのかは解らないけど、これで少しでも私の気持ちが伝わってくれたら。

「・・・・・・・・・私は」

「フェイト！答えなくていい！」

「っ！」

フェイトちゃんが何か言いかけたところをアルフさんが遮った。

「優しい人たちに囲まれて、ぬくぬく育ってる甘ったれたガキんちょに言うことなんか何もない！あたしたちの最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！！」

アルフさんの言葉を聞いたフェイトちゃんは、一瞬だけ逡巡すると、私に背を向けてジュエルシードへ飛んで行った。私も慌てて後を追う。私達はお互いに、先にジュエルシードを確保しようとスピードを上げる。そして間近に来たとき、私達はお互いのデバイスをジュエルシードを挟み込むようにぶつけた。

でもその時、レイジングハートとフェイトちゃんのデバイスに罅が入った。そして次の瞬間、

ドォオオオオオオオオオン！！！！

耳が痛くなるほどの轟音と共にジュエルシードから凄まじいまでの閃光が溢れ出した。

「きゃあああああああああ！！」

思わず悲鳴を上げてしまう。一体、どうなってしまうのだろう？

無印編　第十六話　災厄の暴走（後書き）

パール様、ご協力していただいて、ありがとうございます。

他の皆様もこれぞ名台詞！というものがあれば、是非とも送ってください。

感想も意見も、お待ちしております。

ではまた次回をお楽しみに。

無印編　第十七話　氷獄凍土（前書き）

今回、感想を送っていただいた漆黒の堕天使様、★フェル★様、ＳＰＥＬ様、ありがとうございます。まさか一日に三人も来るとは思いませんでした。

今回は送られた名台詞が多かったので中から一つ、選ばせてもらいました。

どれを選ぶか迷いに迷いましたが、私が選んだ名台詞は★フェル★様からＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ　ＢＵＲＳＴの主人公のハンニバル戦のラストの名台詞。

「生きることから逃げるな！これは命令だ！」

どんな状況であっても、諦めることに、死ぬことに逃げてはならない。逃げた先には死しかないのなら、最後まで生きるために戦わなければならない。そんな思いの籠った名台詞ですね。

漆黒の堕天使様もＳＰＥＬ様も本当にありがとうございます。

これが今年最後の投稿になります。

来年も頑張ってまいりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

では、無印編第十七話始まります。

無印編　第十七話　氷獄凍土

Ｓｉｄｅ燎

俺が現場に着いた時にはすでにジュエルシードが暴走を始めていた。

「ちぃ！遅かったか！」

俺は舌打ちしながらも周囲を見る。幸いなのはとフェイトに目立った外傷は無い。代わりに二人のデバイスは酷いことになってるが。

「なにやらとんでもないことになっているが、どうする、燎？」

隣にいるエヴァが訊いてくる。

「とにかく今は、ジュエルシードの暴走を止めるのが先だ」

俺は腰の刀を一息で抜く。

「エヴァ、ヴィルヘルミナ、お前たちは二人を「燎様、あれを！」！？」

エヴァとヴィルヘルミナになのは達のことを任せようとしたら、ヴィルヘルミナが慌てた様子で指を差す。俺はやな予感がして指差した方向を見ると、

「！！・・・あの馬鹿！！」

俺の予感は的中した。フェイトの奴が素手でジュエルシードを掴み、暴走を抑えようとしているのだ。しかし、そんなことでジュエルシードは止まるわけはない。溢れ出る膨大な魔力を抑えきれず、フェイトの手から血が飛び散る。

『まずいぞ。あのままではあの娘の手がもたん！』

アラストールが警告する。

「ああ、分かってる。ったくなのはといい、フェイトといい、この世界の魔導師は無茶をしたがる病気にでも罹ってるのか！？」

愚痴を漏らしつつも俺は二人に指示を出す。

「エヴァ、ヴィルヘルミナ、ジュエルシードの暴走を止めるぞ。まずはフェイトをジュエルシードから引き離す。ヴィルヘルミナ！」

「了解であります」

ビュンッ！・・・・・ギュルッ！

指示を聞いたヴィルヘルミナは一条のリボンをフェイトへと飛ばす。飛ばされたリボンはフェイトの腰に巻き付く。

「ふっ！」

グンッ！

そのリボンを思いっきり引っ張るヴィルヘルミナ。

「うぇ！？」

いきなりすごい力で引っ張られたフェイトは悲鳴みたいな声を上げ、ジュエルシードから引き剥がされた。そのまま、ポスンとヴィルヘルミナの腕に収まる。

「へ？え、ええと・・・あの、あなたは・・・・？」

なにがなんだか分からず、混乱するフェイト。

「失礼したのであります。フェイト様」

そんなフェイトにかまわず、いつも通り冷静に無表情で応対するヴィルヘルミナ。

「落ち着けフェイト。そいつは俺の仲間だ」

俺はフェイトの前に顔を出す。

「あ・・・り、燎」

俺の顔を見るとフェイトは若干落ち着いた感じになる。まあ、それは良いとして、

「・・・・フェイト？」

「へ？な、なに？」

「このバカチン！！」

ズビシッ！！

「ふぎゃっ！？」

俺はフェイトの脳天に某砂漠の国の王様バリの制裁チョップを食らわせた。

「あ、あう・・・り、燎？」

よほど痛かったのか両手で頭を押さえ涙目で俺を見るフェイト。

「な・に・を・考えてんだ？お前は？あ～ん？」

俺はお次にフェイトの両頬をグニーっと引っ張る。おおう、伸びる、伸びる。

「ひ、ひふぁい、ひふぁいよ。ひょう～」

泣きながら抗議するフェイト。しかしこの程度でお仕置きをやめるつもりはない。

「いくらデバイスが壊れたからって、素手でジュエルシードを止めようとするやつがあるか！自分がどんだけ危険なことをしたのか解ってるのか！」

さらに力を込めて頬を引っ張る。柔らかいなー、こいつのホッペ。

「ひたたた！ご、ごめんなひゃ～い。ゆるひて～（泣）」

頬を引っ張られて泣くフェイトの顔を可笑しいと思ってしまったのは秘密だ。

「ちょ、ちょっとあんた、フェイトに何して・・・・」

後ろからアルフが何か言ってくるが、

「うっさい駄犬！黙ってろ！おすわりっ！！」

「は、はいっ！」

俺は一喝で黙らせ、アルフは俺の剣幕にビビッてその場に正座してしまった。

「はぁ～～、まったくこのアホ金髪」

俺はため息をついてフェイトの両頬から手を放す。

「うう～～～」

フェイトは赤くなった自分の頬を涙目でさする。

「そこで見てろ。ジュエルシードは俺が何とかする」

俺はジュエルシードの所に向かう。

「えっ、で、でも・・・・」

フェイトは何か言いたそうにしてるが、

「デバイスがそんなんじゃ、封印なんてできないだろ？安心しろ、一時的に預かるだけだ。なのはに渡したりしねぇから」

とりあえず今はそう言って納得してもらうことにする。フェイトが良しとするかは分からないが。

「・・・・・うん、わかった」

あれ？けっこうあっさり納得した？もう少し渋るかと思ったんだが。

「フェ、フェイト！？い、いいのかい！？」

自分の主のあり得ない判断に動揺するアルフ。その反応はもっともだ。

「い、いや、俺が言うのもなんだが・・・いいのか？」

俺はフェイトに確認をとるがフェイトは首を縦に振って肯定の意を示す。

「うん。燎は絶対、嘘つかないって思うから」

・・・・・なんだろう？やけに信用されてる？・・・・・なぜ？

「まあ、フェイトがそう言うなら、信用してもいいけどさ」

アルフも一先ず納得してくれたようだ。っていうか、もう正座はしなくてもいいんだけど。

「あ、ああ。ありがとう。それじゃあ行ってくる。・・・エヴァ！」

俺が呼ぶとエヴァがふわりと軽く、空から降りてきた。

「ようやくか。いい加減待ちくたびれたぞ？」

若干不機嫌そうな顔をするエヴァ。

「悪い悪い、待たせた分、思いっきりやらせてやるから」

俺は手を合わせてエヴァに謝罪する。

「ふん、まあそういうことなら、大目に見てやろう」

尊大な態度をとるエヴァ。

「え、ええと・・・？」

「誰だい・・・？」

エヴァの登場に目を白黒させているフェイトとアルフ。

「ああ、こいつはエヴァ。こいつも俺の仲間だよ」

と、俺はエヴァを二人に紹介する。

「おい燎、そんなことより、あれを何とかしなければならないんじゃないのか？」

エヴァがジュエルシードを親指で差す。

「ああ、そうだな。いくぞエヴァ、ユニゾンだ！」

「あっははは！！ああ、いいだろう。私たちの力、とくと見せてやろうではないか！！」

俺たちは目を瞑り、互いの魔力の波長を合わせる。そして・・・・

「ユニゾン」

「「インッ！！」」

俺とエヴァの声が重なり、俺たちは一つになった。エヴァとユニゾンした俺は銀色の髪をした姿になった。

「ふ、ふえええええ！？」

「こ、これは！」

「え、えええっ！？」

「ど、どうなってんだい！？」

なのはたちが驚いたような声を上げる。まあ、この時代のなのはたちはまだユニゾンデバイスのことをしらないからな。

「ユニゾン完了。どうだエヴァ、どこかおかしくないか？」

俺は合体したエヴァに異常がないか訊く。

「ああ、問題ない。ふふっ、これがユニゾンか。成程、成程、これは中々・・・悪くないな」

どこか恍惚とした声音で答えるエヴァ。本当に大丈夫か？

「アラストールとマルコシアスはどうだ？」

『うむ、不備はない』

『ああ、むしろ、いつもより力が漲る感じだぜ』

そうか、なら・・・・・

「行くぞ！」

「『『ああ（うむ）（おうよ）！！！』』」

俺は上空へと飛び上がる。

「それで燎、どうやってあれを黙らせる？」

「これだけの魔力を放出してるとなると生半可な魔法じゃ無理だ。エヴァ、あれで行くぞ」

「あれか。確かにあれなら、問題なくやれるな」

「よしいくぞ。エヴァ、魔力変換『氷結』！！」

「承知した！！」

俺の魔力がエヴァの力によって冷気へと変換していき、俺は詠唱を唱える。

「リク・ラク・ララック・ライラック　契約に従い、我に従え氷の女王」

俺の詠唱に応えるように辺り一帯に冷気が満ちはじめる。

「な、なに？これ・・・」

「急に、周りの温度が・・・」

「さ、寒い」

「ううっ、ひ、冷えるよ～」

なのは達が急激な温度低下に身を震わせる。

「来たれ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが」

大気に満ちるすべての水分が冷気へと変わり、やがてそれは氷霧となる。

「全員っ、上に飛べっ！！」

俺の号令に全員がハッとなり、すぐさま上空に飛翔する。

それを確認した俺は最後の一言を唱え、魔法を完成させる。

「こおるせかい」

キィィィイイイイン・・・・・・パキパキパキパキ・・・・・・
キシィィィイイイイン!!!

俺が詠唱を唱え終えた後にはジュエルシードごと辺り一帯が白銀の世界と化していた。

「う、うそ・・・・・」

「すごい・・・・・」

なのはとフェイトは唖然としている。ユーノとアルフは声も出ないといった感じだ。

俺は先に氷漬けになった道路に降り、氷の中に閉じ込められたジュエルシードに手を突っ込んで中から取り出す。そして上にいるなのはとフェイトに向かって言った。

「こいつは一旦、俺が預かる。デバイスを修理し終えた後日、勝負をして勝ったほうに渡すってことで異存はないな?」

二人はお互いに目を合わせ、頷く。そして俺の方を見て再度首肯する。

「よし、なら今日はここまでだ」

俺は今夜の騒動を締めくくった。

無印編　第十七話　氷獄凍土（後書き）

来年はさらに頑張っていきたいと思っています。

変わらぬ応援をどうかよろしくお願いします。

では皆様、良いお年を。

次回もお楽しみに。

無印編　第十八話　大魔導師（前書き）

皆様、少し遅くなりましたが明けましておめでとうございます。

今、振り返ってみると去年は色々あって大変な年でしたが、日本の絆を確認することができた年であると私は思っています。

今年はもっといい年になるように頑張っていきましょう。

では新年最初の投稿です。

無印編第十八話　始まります。

無印編　第十八話　大魔導師

Ｓｉｄｅ燎

ジュエルシードの暴走事件から三日後、俺はいつも通り起きて居間に降りる。まだ少し眠気が残ってるが、目を袖でこすり目ヤニを取る。

朝飯の良い匂いが漂ってくる。今日は焼き鮭と味噌汁のようだ。

「おはよう～」

頭をボリボリ掻きながら居間に入る。

「おはようございます」

『起床歓待』

台所で朝食を作っているヴィルヘルミナとティアマトーが返事をしてきた。エヴァは・・・まだ起きてないのか。

「もうすぐ出来上がるので、顔を洗ってくるのであります」

『洗顔覚醒』

「へ～い」

二人の言葉に従って洗面所に行き、冷水で顔を洗う。水の冷たさで寝ぼけ眼が徐々に覚醒していく。

顔を洗い終えて居間に戻るとすでにエヴァが来ていた。

「おはよう、エヴァ」

「おう、おはよう」

挨拶を交わして、俺もエヴァの対面に座る。ヴィルヘルミナが朝食を運んできて、準備が終わる。

「それじゃあ、いただきます」

「「いただきます」」

いただきますをして朝飯を食べ始める。・・・・・・今朝の鮭は中々、美味かった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

朝食を食べ終わって俺は鞄を取りに部屋に戻ろうとしたが、

「お待ちください、燎様」

「ん？」

ヴィルヘルミナに呼び止められた。

「なに？」

俺が訊くとヴィルヘルミナはいつも通りの無表情で、

「実は私、昨夜考えたのであります」

なにやらいつにも増して真面目な雰囲気だ。一体どうしたのだろうか。

「う、うん」

少し気圧される俺。

「燎様には・・・・・・・」

え？俺？・・・・・俺がどうかしたのか？

「お、俺には・・・・・・・？」

な、なんなんだろう？

「・・・・・・・・」

「？・・・・ヴィルヘルミナ？」

しばしの無言。何だか空気が重いような・・・・。

「燎様には・・・・・・・」

「（ごくりっ）」

つばを飲み込み、ヴィルヘルミナの言葉を待つ。そして・・・・・・

「ポニーテールが似合うとっ！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

え？なに？ポニー？仔馬？・・・なんだって？

なんか拳をグッと握って力説するヴィルヘルミナ。

「奇遇だな。私もそう思っていたところだ」

「ちょ！エヴァさん！？」

さりげなく同意するエヴァ。一体何言ってんだ。こいつら？

「というわけで燎様」

いやいやいや、まてまてまて、なにがというわけ？

「そういうわけだ。燎」

いや、だから、なにがそういうわけなんだよ！ってかなに二人してにじり寄ってきてんだよ！怖いんだけど！なんか目がすごい据わってるし！

二人の尋常じゃない雰囲気に押されてジリジリと後退するが、やがて背が壁に付き進退窮まった。

「ちょ、まてお前ら。お、落ち着こう。まず落ち着こう。な？」

しかし、二人は一向に正気に戻る様子はない。

「大丈夫だ。燎」

「じっとしていれば、痛くはないのであります」

手をワキワキさせて近づいてくるな～（泣）

「い、いや、ちょ、まっ・・・・あ、あああああぁぁぁぁ～～～～！！！」

晴天の空の下、家中に俺の悲鳴が響き渡った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

はあ～、ひどい目に合った。ったくあいつら、人の髪の毛オモチャにしやがって。

『まあ、よいでないか。いい具合に仕上げてもらえたのだから』

『ギャ～ハッハッハ、よ～く似合ってんぜ。我が可憐なる御子、神薙燎』

後で覚えてろ、このガラクタども。

二人に無理矢理、髪をポニーテールにさせられ俺は廊下を歩いていた。なんだか周りからすごい視線を感じるのは気のせいか？ここに来るまでに町でも同じような視線を感じたし。

ようやく教室に着いた俺はドアを開いて中に入る。なのはたちが話をしているのが見えたので声を掛ける。

「お～っす、お三方」

俺の声に反応して振り向く三人。

「あ、燎く・・・ん」

「遅いじゃ・・・・な・・・い」

「おは・・・・よ・・・・う」

三人とも俺をみた途端にピシリと硬直してしまった。

「?・・・・・おい、どうした?」

三人の顔は見る見るうちに真っ赤になっていく。

「ちょ、ちょちょちょ・・・・り・・・燎、あ、あんたそ、その髪」

アリサがプルプル震えながら、俺の髪を指差す。っていうか大丈夫か?お前。

「あー、この髪型か?今朝、ヴィルヘルミナとエヴァに無理矢理・・・な」

(((・・・・ヴィルヘルミナさん、エヴァ(ちゃん)・・・・・・グッジョブ!!)))

・・・・・・・今・・・・背中にすごい悪寒が・・・・・・

「やっぱり・・・変か?」

なのはたちの挙動不審を見てやっぱりおかしかったと思う。

「そ、そんなことないよ！似合ってるよ！ね、なのはちゃん、アリサちゃん！」

首をブンブン横に振って否定するすずか。そんなに振ったら首の骨おかしくなるぞ。

「うんうんうん！！燎くん、すっごく綺麗なの！！」

なのは・・・それは男に言う褒め言葉じゃないと思うんだが。

「い、い、いいんじゃない？わわわ・・・悪くない・・・・と、お、おおおおもうわ・・・・よ」

いつも通りの態度を取ろうとするアリサだが、未だに震えているうえに明らかに無理してるようにしか見えない。まあ、ここは敢えて突っ込まないでおくのが無難か。

「そ、そうか・・・・ありがとな」

正直、複雑な気分だが、一応お礼を言っておくことにした。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

そして昼休み、俺たちは屋上のいつもの場所で、昼餉にしている。

（それでなのは、レイジング・ハートの状態はどうなんだ？）

念話を使って、なのはにレイジング・ハートの修理状況を訊く俺。

（うん、ユーノくんの話じゃ、まだもうしばらく修復に時間がかかるって）

答えるなのはの声は落ち込んでいる感じだ。

（駄目なマスターだね、私。レイジング・ハートに無茶なことさせて・・・・）

（あんまり、気にしすぎるなよ。レイジング・ハートだって、お前のこと駄目なマスターだなんて思ってないさ）

こうなったなのはは早めに元気づけた方がいい。長年幼馴染みやってきて分かったことだ。

（燎の言うとおりだ。己が主の想いに応え、その力となることこそ、我らデバイスの存在意義。彼女はそれを全うしたにすぎぬ）

（いつまでもお前さんがそんなんじゃ、それこそあそこまでボロボロになってまで踏ん張ったレイジング・ハートが報われねぇってもんだぜ）

アラストールとマルコシアスもなのはを励ましてくれる。

（レイジング・ハートに悪いと思うんなら、お前もあいつの気持ちに応えてやれ。それはあいつのマスターである、お前にしかできないことだ）

（・・・・・・うんっ）

やれやれ、これでなんとか大丈夫そうだな。

（ありがとう。燎くん）

（フッ・・・どういたしまして）

（アラストールとマルコシアスも）

（礼を言われるほどのことではない）

（俺たちゃ、当たり前のことを言っただけだしな）

元気を取り戻したなのはは再び桃子さん特製の弁当を食べ始めた。
俺もそんななのはの横顔を見てヴィルヘルミナ特製の弁当を食べる。
ちなみに今日のおかずのコロッケは絶品だった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

それから時間が過ぎ、今は夜。俺は屋根の上でバリアジャケットを着ている。何故かって、これからプレシアの本拠地の時の庭園に行くからだ。ちなみに未だにポニーテールのままだ。おろそうとすると二人が怒るんだよ。

恐らくフェイトがもうすでに行っているはずだ。俺も速く後を追って、あの虐待紛いなことをやめさせないとな。

『燎、時の庭園の位置が分かったぞ』

プレシアは上手く、時の庭園の場所を隠しているようだが、俺のデバイスをそこいらのやつと一緒にしてもらっては困る。アラストールはものの数分で庭園の座標を割り出した。

「よし、行くぞ」

と、転移しようとするが、

「お待ちください。燎様」

振り向くとヴィルヘルミナが立っていた。

「ヴィルヘルミナ？どうした？」

「今回は私も同行するのであります」

『同伴申請』

「別にいいけど、エヴァは？」

何故ヴィルヘルミナがいてエヴァがいないのか、気になって訊ねてみた。

「今日はなんだか気が乗らないとのことであります」

「ああ・・・そう」

まあ、エヴァらしいっちゃらしいか。

「そんじゃあ、行こうか？」

「はい」

そして俺たちは転移した。向かうは大魔導師プレシア・テスタロッサの居城、時の庭園。

◇◇◇

先が霞んで見えない。実際見て思ったけど、この庭園、俺の天道宮と同じくらいのデカさじゃないか？

まあ、それはともかく、今はフェイトを探さないと。俺は意識を集中して、フェイトの魔力を探る。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・っ！見つけた！」

かなり弱々しいが、間違いなくフェイトの魔力だ。

「行くぞ、ヴィルヘルミナ！」

「了解であります」

『承知』

俺たちは長い廊下を全力のスピードで飛んでいく。フェイトの魔力は段々と弱っていっている。くそっ、プレシアのやつ。目を覚まさせる前に、少し痛い目に合わせてやる。

やがて、大きな扉が見えてきた。そのすぐ近くで、人影が座り込んでいる。あれはアルフか。

「アルフッ」

俺が呼ぶとアルフはビクッとこちらを振り向く。俺とヴィルヘルミナはアルフの前に降り立つ。アルフは信じられないものを見る目で俺とヴィルヘルミナを見る。

「あ、あんたたち、ど、どうしてここに？」

俺たちの登場に動揺するアルフ。しかし今は取り合ってはいられない。

「説明は後だ。フェイトはこの扉の向こうか？」

俺は座り込んでいるアルフからフェイトの居場所を訊きだす。

「あ・・・ああ。・・・・そうだよ」

動揺しながらも答えるアルフ。

「わかった」

俺は扉に向かうが、不意にバリアジャケットの裾を引っ張られるのを感じた。

「？」

振り返ると、アルフが服の裾を握っている。その瞳は今にも泣きだしそうだった。

「どうした？」

尋ねるとアルフは震える声で言ってきた。

「こんなこと、頼める義理じゃないってことは、分かってる。でも、でも、お願いだよ。フェイトを、フェイトを・・・助けておくれよ」

アルフはこらえきれなくなったのか、涙を流し、俺に懇願する。

「敵のあんたたちに、そんなことをする筋合いはないってわかってる。でも・・・頼むよ・・・あの子を・・・・・フェイトを・・・・助けて。このままじゃ、フェイトが殺されちゃう。ボロボロにされて、ゴミみたいに捨てられてしまう。だから、お願いだよ。あたしじゃあ、駄目なんだ。どんなに頑張っても、あたしはあの子の使い魔だ。主人の命令には逆らえない。今は、あんたたちにしか、頼めないんだ。だから・・・・だから・・・・・」

アルフのその痛々しい姿を見た俺は、

ギュッ

「え？」

アルフを抱き締めていた。

「あ、あんた・・・」

アルフは分けが分からない様子だが俺はかまわず、

「大丈夫だ」

「え？」

「フェイトは・・・お前のご主人様は、必ず俺が助ける。そのためにここに来たんだ。それにフェイトだけじゃない。フェイトも、お前も、俺が必ず助けてみせる」

「あたしも・・・・？」

「ああ。だからもう泣くな。せっかくのいい女が台無しだぜ？」

「い、いい女って／／／・・・あ、あたしは使い魔だよ？」

「だからなんだ。お前は間違いなくいい女だ。主人思いの立派な相棒だ。誇れよ。それにいい女にはな泣いてる顔より、笑ってる顔の方が百倍も似合う。だから笑え。お前が笑わなきゃ、フェイトだって笑いたくても笑えねぇよ」

「う・・・ううう／／／」

なんか、顔が赤いけどどうしたんだ？

「燎様、急ぐのでは？」

ヴィルヘルミナの声で俺はハッと目的を思い出す。しかしなんか、ヴィルヘルミナ、不機嫌になってないか？

俺はアルフはから体を離し、扉に向かう。扉の前に来ると、俺は固く握った拳を思いっきり振りかぶり、そして・・・・・

ドゴォォオオオン！！！

全力で拳を扉に叩き込んだ。

扉はまるでクッキーの様に粉々に砕け散った。俺はなんの遠慮もなく、扉の向こうへ足を踏み入れる。そこで俺が見たのは、まるで十字架に磔にされるように魔力の糸で吊るされているフェイトに、手に鞭を持っている妙齢の女性。

「あなたは・・・・・誰？」

妙齢の女性が凄みをきかせて睨みながら訊いて来た。その質問に俺は・・・・・

「初めまして、大魔導師プレシア・テスタロッサ。ちょっとあんたと、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩに来たぜ」

顔を不敵な笑みで歪ませながら答えた。

無印編　第十八話　大魔導師（後書き）

いかがでしたでしょうか。

今年中に完結できるように頑張っていきたいと思います。

感想、意見、どんどん送ってください。

あと、皆さんがこれぞ名台詞☆っとおもうマンガやアニメの台詞も送ってくれると嬉しいです。

では今年もよろしくお願いします。

次回をお楽しみに。

無印編　第十九話　アリシア（前書き）

黒崎白亜様、ミサ?様、お勧めの名台詞、ありがとうございました。

黒崎白亜様からは、

鋼の錬金術師から

「ロイ・マスタング&マーズ・ヒューズ」

ロイ「お前はなぜ戦うヒューズ」

ヒューズ「簡単だ。“死にたくねぇ”ただそれだけだ。理由はいつだって単純だよロイ」

Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔから、

「衛宮士郎」

「その道が。今までの自分が、間違ってなかったって信じてる」

そしてミサ?様からは、

Ｐａｎｄｏｒａ　ｈｅａｒｔｓから、

「オズ・ベザリウス」

「無関心じゃなければ・・・それはもう無関係じゃないだろう！！？」

お二人ともご協力ありがとうございます。ミサ?様の名台詞は今回使わせてもらいました。

それでは無印編第十九話、始まります。

無印編　第十九話　アリシア

Ｓｉｄｅ燎

プレシアの目を覚まさせるために、時の庭園に潜入した俺とヴィルヘルミナ。発見したアルフからフェイトの救出を頼まれ、俺は、目の前の扉をぶち壊し、部屋の中に踏み入った。

部屋の中では今まさに、プレシアがフェイトを虐げているところだった。それを目にした俺は危うく怒りに我を忘れそうになるが、自制心を総動員させて、なんとか止まる。ここに来た目的を履き違えてはいけないからな。

俺は険しい目でプレシアを見据える。プレシアは突然現れた侵入者を睨んでいるが、俺は目を逸らすことなく抜刀する。

「あなたは・・・・！！」

ゴウッ！！

俺はプレシアの言葉を遮るように、刀を振るう。音速の速度で振るわれた刀からは剣圧が放たれ、プレシアに叩きつけられた。

プレシアは一瞬早く、障壁を展開し剣圧を防ぐが、剣圧の威力に押されて、吹き飛ばされてしまった。

ドォンッ！！

「うああっ！！」

ズザザァァァ！！

プレシアを部屋の一番奥まで、吹き飛ばし、フェイトから引き離すことに成功した。俺はヴィルヘルミナに目配せをする。ヴィルヘルミナは目配せの意味を察し、すぐさま二本のリボンを飛ばし、フェイトを吊るしていた魔力糸を切断し、フェイトの体が床に落ちる前に体に巻きつける。

そしてフェイトの体を引っ張り、フェイトは俺の所に来る。俺はフェイトを上手くキャッチする。フェイトは気絶しているのか、反応がない。

俺はフェイトをアルフに渡す。アルフは受け取るとフェイトを優しく抱き締める。

「ああ、フェイト。フェイトォ。こんなに傷だらけになって・・・ごめん、ごめんね。いつもいつも、守ってあげられなくて、助けてあげられなくて・・・ごめんねぇ。あたし、あたし・・・ウウッ、ウウウッ・・・・」

涙を流し、腕の中で眠るフェイトに謝るアルフ。それを見た俺は、怒りが一層激しく燃え上がるのを感じる。

「ヴィルヘルミナ、二人を連れてここから脱出しろ。ここは俺一人で十分だ」

俺は前を向き、ヴィルヘルミナに指示を出す。

「な、なに言ってんだい！？あんた一人で、あの鬼ババアの相手をするっていうのかい！？それはいくらなんでも無茶だよ！！」

プレシアの実力をよく知るアルフが警告してくる。まあ、相手は大魔導師なんて呼ばれてるぐらいだしな。だがしかし、ここで引きさがるわけにはいかない。

「なあに、そう簡単に後れを取る気はねえよ。あいつには言いたいことが山ほどあるんでな」

不敵に笑って言い返す。

「で、でも・・・」

アルフは尚も心配そうな顔で見つめる。

「ありがとうな、アルフ。・・・心配してくれて。でも大丈夫だ。俺は負けない。あんな後ろばかり振り返って、前を見ようとしない奴に、負ける気なんかまったくしない」

「あんた・・・・」

俺は後ろを向き、笑いかける。

「もう一度言う。・・・・大丈夫だ。先に帰ってフェイトと一緒に待っててくれ。必ず帰るから」

「／／／／！！？」

なんかアルフの顔が赤いんだけど・・・風邪か？

「わ、わかったよ。で、でも、ちゃんと帰ってくるんだよ！約束だからね！破ったら、承知しないからね！！」

ビシッと指差して真っ赤な顔のまま吠えるように言うアルフ。その様子が少し可笑しくて小さく笑ってしまう。

「ああ・・・約束だ」

答えて、また前に向き直る。

「ヴィルヘルミナ、二人を俺の家に連れていけ。そこでフェイトの治療を頼む」

「了解であります」

『承知』

「リ、リョウ！」

ヴィルヘルミナとティアマトーの返事に続いてアルフが俺の名前を呼んだ。

「ん？」

「そ、その・・・・・気をつけ・・・て」

消え入りそうなほど小さな声で言うアルフ。

「・・・おう。行けっ、ヴィルヘルミナ！」

短く返し、己の従者に命を下す。

「ご武運を」

その言葉を最後にヴィルヘルミナはアルフとフェイトと一緒に転移した。

シュンッ

・・・・・行ったか。・・・・・さて・・・と。

「待たせたな。プレシア・テスタロッサ」

三人が無事に転移したことを確認し、再度プレシアと対峙する。

「あなたは一体何者なの？この時の庭園には絶対に感知不可能の隔離結界を張っているはずなのだけど」

不思議そうな顔をするプレシア。

「俺のデバイスは優秀でな。その程度の結界なら破るのは容易い」

嗤って挑発する。

「人の家に土足で踏み込んでおいて、随分と偉そうな物言いね」

「悪いな。顔見知りがあんな拷問紛いな扱いを受けてるのを見て、ジッとしてられるほど大人じゃないんだよ」

プレシアの放つ威圧感にも怯むことなく言い返す。

「私があの子になにをしようと、あなたには関係のないことよ」

冷たく言い放つプレシア。

「関係ないか・・・確かにそうかもな。でもよ、それは俺がお前のやることに無関心だったならの話だ」

「なんですって？」

「無関係だから口を挟むな？無関係だから首を突っ込むな？・・・ふざけるなよ、そう言われて無関心を決め込むほど、俺は人間できちゃいない」

「っ！！」

「無関心じゃなければ・・・それはもう無関係じゃないだろう！！」

「くっ・・・黙りなさい！！」

プレシアは杖を掲げた。杖の先端に紫色の光が集まり、やがてそれは稲妻へと姿を変える。

「サンダー・レイジ！！」

杖を俺に向け、紫色の稲妻を放つプレシア。

カッ・・・ドオオオォォォォォン！！！！

紫色の稲妻が直撃するが、俺は微動だにせず、その場に立っている。

「なっ！？何故、なんともないの！？私の攻撃は確かに当たったはず！」

プレシアは目の前の出来事に驚愕の声を上げる。

「よく、周りを見てみろよ」

「なにを・・・・！？」

俺の言葉にプレシアは目を凝らし、そして気付いた。俺の両脇の床が焼け焦げていることを。

「まさか・・・・」

「そう、そのまさかだよ。斬ったのさ、お前の稲妻を」

そう、俺は稲妻が当たる直前に刀で稲妻を一刀両断にしたのだ。

「そんなことが、できるわけが・・・」

眼前の現実が受け入れられないのかプレシアは首を横に振る。

「できるから、やったんだ。お前の眼が見ている現実が紛れもない証拠だ」

俺は刀の切っ先を向けプレシアに現実を突きつける。

「くっ！！」

歯ぎしりするプレシア。相当悔しそうだ。

「プレシア、お前がジュエルシードを集めている目的を当ててやろうか」

「なんですって？」

「お前の目的・・・それは・・・・・・アリシアの蘇生・・・だろ？」

「！！」

プレシアの目が驚愕に見開かれる。誰にも、それこそフェイトにさえ明かしていない自分の目的を今日初めて会った俺に言い当てられたのだから無理もないが。

「あなた・・・どこで、そのことを？」

プレシアは口を震わせながら訊く。

「色々、調べてみたのさ。フェイトの性、テスタロッサの名に聞き覚えがあってな」

まあ、嘘だけど。実は原作を知ってるからですなんて言っても何のことだか分からないだろうし。

「そしたら案の定、あんたの名前が出てきた。プレシア・テスタロッサ・・・時空管理局傘下の研究所に所属し、ある魔力炉の研究に

携わっていたが、その実験で事故が起こり、その時に一人娘であったアリシア・テスタロッサが死亡。その後、娘の遺体と共に行方をくらませる」

俺はプレシアのことについて知っていることを簡潔に述べた。

「・・・・・・・・・」

プレシアはなにも答えない。俺はチラと横の壁を見る。・・・・・・あそこか。

「ふんっ！！」

横の壁に向けて俺は魔力の斬撃を放つ。

ドゴォンッ！！

「な、なにを!?」

プレシアにかまわず、俺は砕かれた壁に近づく。粉々に砕かれた壁の向こうは空洞になっており、その中に入るとそこにはガラス張りの大きなポッドがあった。その中には・・・・・

「やっぱりな・・・」

フェイトとうり二つの顔をした、フェイトよりも若干幼い少女が目を閉じ膝を抱えるようにして液体の中を漂っていた。

『燎・・・この娘は・・・・・』

「ああ、この子がアリシア。フェイトの複製母体（オリジナル）だ」

俺はアリシアを見上げながら説明する。

「私のアリシアに近づかないで！！」

プレシアが追って入ってきた。

「これがお前の目的だな。ジュエルシードの力を使いアリシアを生き返らせる」

「そう、その通りよ」

プレシアは狂気を孕んだ瞳で言い放った。

無印編　第十九話　アリシア（後書き）

さすがに限界で、今回はここまでとします。

これからも感想、意見等、是非とも送ってください。いつでもお待ちしております。そして自分が思った、これぞ名言！と言える名台詞もよろしくお願いします。

では、次回をお楽しみに。

無印編　第二十話　母（前書き）

京勇樹様からのおススメの名台詞、

アスラクライン「夏目智春」

「誰だってつらい過去を抱えて生きてるんだ、過去から逃げて現在（いま）を捨てたあんたに未来は来ない！」

生きていれば誰でも辛い経験はすると思います。しかし、それを乗り越え、未来を目指して歩くことが大事なのだと、そんな思いのこもった名台詞ですね。

京勇樹様、すばらしい名台詞をありがとうございました。

では無印編第二十話、始まります。

無印編　第二十話　母

Ｓｉｄｅ燎

俺とプレシアはお互いに睨み合い、目を逸らさない。

「本気で言っているのか？死者を甦らせるなんて、そんなお伽話みたいなことを」

俺は硬い声でプレシアに問う。

「ええ、そうよ。持ち主の願いを叶えると云われるロストロギア、ジュエルシードの力を使えば、きっとアリシアを生き返らせることができるはず」

プレシアは狂気を帯びた表情で言う。その狂気も娘への愛情故なのだろうが。

「そのために、ジュエルシードを積んだ輸送船を襲撃したのか？」

俺はプレシアに以前ユーノが話した事故のことについて訊いた。もしあれが、プレシアのしたことなら・・・・・

「ああ、あれは私の仕業ではないわ」

「・・・・・なに？」

輸送船の事故はプレシアのせいじゃないのか？

「恐らく封印を中途半端にしたせいで、ジュエルシードの一つが暴走したんでしょうね。それに共鳴してほかのジュエルシードも連鎖的に暴走し、あの事故が起こった。そしてジュエルシードは地球へと落ちた。私はそれを知ったから、フェイトにジュエルシードを探すように命じたのよ」

そういうことか。・・・って確かジュエルシードの封印は管理局の局員がやったってユーノが行ってたが・・・おいおい、これって完全に管理局の失態じゃねぇか～。まあ、今はどうでもいいことか。

「なるほど、よくわかった。ところでもう一つ訊きたいことがある」

「何かしら？」

心の中で安堵の息を吐き、プレシアの目を見据えて俺は一番肝心なことを訊く。

「もし仮に、ジュエルシードを手に入れて、アリシアを生き返らせたら・・・・あんたはフェイトをどうするつもりだ？」

大方の予想はついてるけどな。

「決まっているじゃない。捨てるわ。アリシアが生き返れば、もうあんな紛い物の人形に用はないのだから」

冷然とプレシアは断言した。その言葉に俺は理性が怒りに焼き尽くされるようなものを感じ、軽く眩暈を覚える。予想していた答とはいえ、やはり実際に聞くとこうも耐え難いものとはな。

「フェイトが・・・・・・人形・・・・・・だと？」

怒りで俺は上手く口が回らない。ただ震える声で、それだけを絞り出した。刀を持つ手に力が入る。もう片方の手からは、あまりに強く拳をにぎったために血が滲み出ている。

しかし、プレシアはそんな俺の様子に気づかず言葉を続ける。

「ええ、そうよ。あの子は人形。アリシアの形をした紛い物の人形。ジュエルシードを集めるための使い捨ての駒でしかないわ」

「・・・・・・・・ふざけるな」

「なんですって？」

「ふざけるなっつったんだ！このくそババア！！」

ゴウッ！！

「！！？」

怒声と共に俺は本気の殺気をプレシアにぶつける。もう我慢の限界だった。確かにこの人も被害者かもしれないが、今の言葉はどうしても聞き捨てならない。

「彼女は・・・・フェイトは人形なんかじゃない。自分の意思を、魂を持ったれっきとした人間だ！たとえ、生まれ方は普通とは違っていても、あんたが生んだあんたの娘だ！！」

気が付けば、俺は心のままに叫んでいた。プレシアにフェイトのことを分かってもらいたい一心だった。フェイトがどれだけプレシアを想っているか、フェイトがどれだけプレシアのために傷つきながらもがんばっているのか。

「っ！ふ、ふざけないで！あの子はアリシアではないわ！」

「そんなの当たり前だ！！」

プレシアに気付いてほしかった。フェイトとアリシアは違う。そんなことは当たり前のことなのだと。

「な・・・にを？」

プレシアは俺の言葉に不意を突かれたように呆然とした。

「フェイトとアリシアは違う。フェイトがアリシアのクローンであったとしても、二人は別人だ。この世に同じ人間は二人もいないし、いてはいけないんだ」

「・・・・・・・・・・」

プレシアはなにも言わずただ俺の言葉を聞き続ける。

「誰も誰かの代わりにはなれないんだよ、プレシア。・・・・人間はものじゃない。代用品なんてありはしない。人は誰しも、誰かにとって常に掛け替えのない一人・・・・たった一人だ。それともあんたにとってアリシアはそんな簡単に代えの効くような存在だったのか？」

「そんなわけがないでしょう！あの子は・・・アリシアは世界でたった一人よ！！」

必死の形相で俺の言葉を否定するプレシア。その顔はまさしく母親のものだった。しかし・・・・

「プレシア、お前がアリシアを生き返らせようとしてるのは、アリシアのためなんかじゃない」

できれば言いたくはない。だけど今ここでこの人には言わなければならない。

「なん・・・・ですって？」

その言葉にプレシアは目を鋭くさせる。

「お前が助けたいのはアリシアじゃない。お前が助けたいのは・・・・・自分自身だ」

「！？」

目を見開くプレシア。

「お前はただ、楽になりたいだけだ。娘を失った苦しみから逃れたいだけだ。だから現実から目を背けて、叶いもしない幻想に縋りつこうとしているんだ」

「・・・・・黙りなさい」

ギリと唇を噛むプレシア。今の彼女の心中は計り知れない。

「誰よりも愛していた愛娘の死・・・もう一度あの子に自分の人生を歩める命をを与えたいと思う気持ちは俺にもよくわかる。だけどその気持ちも、心が弱くなってしまった今のお前が口にしても、目の前の現実からお前自身が目を背けるための只の言い訳にしかならないんだ！」

「・・・黙れ」

「心が弱くなってしまった今のお前は、アリシアのためじゃなく、アリシアのせいにして、自分の自己満足を満たそうとしているに過ぎないんだ！！」

「黙れといってるのよ！！」

カッ・・・ドガアッッッ！！！

雷撃を放つプレシア。その雷撃を俺は刀で防ぐ。・・・くうっ、さっきより威力が増してる！

「そうやってムキになって否定するのは、本人もそれと知らず、自覚してる証拠か？」

「その口を閉じなさい！あなたになにがわかるの！！」

心の奥に溜めこんでいたものを吐き出すかのような声だった。よほど追い詰められていたんだろう。

「・・・少なくとも、今のお前が現実を受け入れずに、逃げ続けていることはわかる」

「っ！？サンダースフィア！！」

プレシアは今度は雷の球を作り出し、俺に向けて放った。俺は刀を地面に刺しつき立てる。そして両手の掌を揃えて前に突き出し、呪文を唱える。

「ギガ・ラ・セウシル！！」

ドガアアアッッッ！！！！

円形の盾が出現し、プレシアの雷球を防ぎきる。

「そうやって、自分を誤魔化し続けなければ、自分の実験のせいでアリシアを死なせてしまったという自責の念に潰されてしまいそうになるってこともわかる・・・・でも」

そうだ。この人は何も悪くないんだ。本当なら、実験も無事に終わって、アリシアと幸せな生活を送ることだってできたはずなんだ。

俺なりに、以前プレシアが携わっていた魔力炉の実験について調べてみたのだが、本来ならあの実験はもっと調整を施してから行われるはずだったのだ。しかし、業を煮やした管理局の上層部の一人が魔力炉の実験を早めるよう強制したのだ。断って、管理局からの支援が打ち切られてしまうことを恐れたプレシア達は従わざるを得なかった。そしてあの事故が起こった。

「それでも・・・今のお前がなにをやっても、アリシアはきっと・・・・浮かばれはしない」

「うるさい、うるさいっ！」

ガアンッ！　ズガンッ！

休むことなく雷球を撃ち出すプレシア。しかし、この程度ではギガ・ラ・セウシルは破れない。

「プレシア、お前のその弱さが・・・アリシアを・・・お前を苦しめる悪霊にしている」

「！！・・・う、うう・・・うわあああああああっっっ！！！！」

杖を振り上げ、最大級の雷撃を放とうとするプレシア。俺は渾身の魔力を盾に込め、身構える。

しかし・・・・・

「うっ、ごふっ、がはっ！」

突然、口から血を吐くプレシア。そしてそのまま、前に崩れ落ちる。

「プレシア！！」

バシュンッ！・・・・・ドサ。

プレシアが倒れる前に瞬動で近づき受け止めることに成功した。

「プレシア、お前体が・・・・」

俺はプレシアの体をゆっくりと横にする。

「ふふっ、いかに大魔導師といえど、この病は治せなかったの」

寝かせられたプレシアは掠れる声で自嘲する。・・・・・やっぱりか、これってたしか実験の事故が原因なんだっけ？

「悪い、病人に無理させちまったな」

病気のことも知っていたのに、俺が感情的になってこの人を精神的に追い詰めてしまったせいだ。

「どうしてあなたが謝るの？変な子ね」

そう言ってプレシアは優しげな笑みを浮かべる。その眼にはもうさっきまでの狂気は映っていない。

「・・・・本当はね」

「？」

不意に話しはじめたプレシア。俺は黙って耳を傾ける。

「わかっていたの。私のしていることは全部、ただの自己満足なんだってことも、こんなことアリシアは絶対に望まないってことも。今の私をアリシアが見れば、きっとあの子は悲しむでしょうね。たくさんフェイトを傷つけて、アリシアの体を弄んで」

プレシアの独白を俺はただ無言のまま聞き続ける。

「フェイトのこともそう。何度もあの子を娘としてみようと思った。でも駄目だったの。あの子を娘として接してしまったら、アリシアとの思い出が、消えてしまいそうで。あの子を愛おしく思う度に私の中からアリシアが消えていってしまうような気がして。それが怖くて、恐ろしくて、あんなにフェイトを傷つけてしまった。本当に、最低な母親ね・・・私は」

プレシアの目から涙が溢れ出る。今のがこの人の本心なのだろう。フェイトのことを愛したくても愛せなかった。そこにはアリシアを死なせてしまった自分にフェイトを愛する資格は無いと思う気持ちもあったのかもしれない。

「ああ、なんだか話したら、少し楽になった気がするわ」

そう言いつつ、ムクリと起き上がるプレシア。

「もう、大丈夫なのか？」

プレシアに体の容体を訊く。

「ええ、大分落ち着いたわ。ありがとう、心配してくれて」

ニッコリと微笑むプレシアの顔は、母親が見せる優しい笑顔だった。

「いや・・・別に／／／」

照れくさくなってそっぽを向く俺。なんだか恥ずかしい。

「あらどうしたの？赤くなっちゃって」

いたずらっぽく笑って頭を撫でてくるプレシア。

「お、おい、よせって」

恥ずかしさから、頭を撫でるのをやめさせようとするが、プレシアは笑みを深める。

「あら、いいじゃない。ほんのお礼の気持ちよ。エイッ♪」

ムギュッ

「ちょ、おおおい、ぷ、プレシア・・・さん！／／／／」

なんと今度は俺を抱き締めてきた。体に感じる女性特有の感触と良い匂い。ああ、なんだかくらくらする。

「あらあら、赤くなっちゃって。ふふっ、可愛い♪」

さらにギュウッと抱き締めるプレシア。っていうか性格がさっきまでと１８０度違うんですけど、何この人！？二重人格ですか！？

その後、ひとしきり抱き締められてようやく解放された。今は丸いテーブルに向き合って座っている。

「そ、それでこれからどうするんだ？」

俺はプレシアにこれからのことについて訊いた。

「恐らく、ジュエルシードが起こした次元震の反応を察知して管理

局がやってくるでしょうね。そうなれば私のことがばれるのも時間の問題よ」

まあ、来るのは間違いないな。原作と同じなら、アースラーが。そうなればあのＫＹ執務官と甘党提督も。

「そうなった場合、少しでもあの子に罪が向かないようにするわ。あの子はあくまでも私の命令に従ってジュエルシードを集めていたという形にする」

「それって・・・・」

「ええ。すべての罪は私が背負うわ。あの子にはこれ以上重荷を背負わせるわけにはいかない」

プレシアは決然と言い放つ。

「でも、それじゃあ、お前は」

「どのみち、私はそんなに長くは生きられないわ。でもあの子は・・・・フェイトにはこれからたくさんの幸せが待っているはず。私のために、あの子の人生を台無しにするわけにはいかない。フェイトの幸せのためなら、こんな私の命ぐらい、喜んで捨てるわ」

その言葉には尋常ではない覚悟が宿っていた。

「プレシア・・・・本当にそれでいいのか？」

「ええ。だからお願い、フェイトにはなにも話さないで。アリシアのことも、時が来るまでは」

「・・・・・・わかったよ」

「ありがとう」

でも悪いなプレシア。俺は諦めるつもりはないんだぜ。必ずあんたも助けてみせる。

「それじゃあ、俺はそろそろ帰るよ。フェイトのことも心配だしな」

そう言って俺は椅子から降りる。

「あ、ちょっと待って」

「ん？なんだ？」

「まだ、あなたの名前、聞いてなかったから」

「え？ああ、そういえばそうだっけ」

すっかり忘れてたなあ。

「俺の名は燎、神薙燎だ」

「リョウ。もう一つお願いを聞いてもらってもいいかしら？」

「ん？別に良いけど」

「フェイトを・・・・護ってあげて。あなたになら任せられるわ」

プレシアは真剣な表情で懇願した。それに俺は強く答える。

「極めて了解だ。あんたの大切な娘は必ず俺が護り通す。俺の魂に誓う」

その言葉にプレシアは笑みを浮かべる。

「ありがとう、リョウ」

感謝の言葉を背に、俺はヴィルヘルミナ達の待つ家へと転移し、時の庭園をあとにした。

無印編　第二十話　母（後書き）

いかがでしたでしょうか。

感想、意見、誤字・脱字の訂正、いつでも受け付けます。

お勧めの名台詞のほうもよろしくお願いします。

では次回をお楽しみに。

無印編　第二十一話　時空管理局（前書き）

今回は漆黒の堕天使様と来峰　鳴様、そして京勇樹様からの名台詞です。

漆黒の堕天使様と京勇樹様は二度目のご提供、来峰　鳴様は初めてのご提供、どちらも心から感謝しています。本当にありがとうございます。

ではまずは、漆黒の堕天使様からの名台詞

「スクライド」から

「油断をするな。容赦もするな。徹底的にやれ！」劉鳳

「意地があんだよ！男の子にはなあ！」カズマ

「愚問ですなあ、隊長。オレはオレの味方です」ストレイト・クーガー

「元々他人同士がつるんでいただけだろ。オレが選んだオレの道だ。それを最速で突っ走ってなにが悪い！」ストレイト・クーガー

いいですよね、スクライド。私も見ていました。

では次に来峰　鳴様からの名台詞

「ＴＲＩＧＵＮ」から

「未来への切符はいつも、白紙なんだ」ヴァッシュ・ザ・スタンピート

私はＴＲＩＧＵＮは良く知りませんが、これも確かにその通りだと言わざるを得ない名台詞です。未来はきっと白紙だからこそ面白いのでしょうね。

最後に京勇樹様からの名台詞

「少年陰陽師」から

「痛みと悲しみを知るからこそ、誰よりも強く優しんだ」阿部清明

人は痛みや悲しみを知り、それを乗り越えていくことで強く優しくなれる。そんな想いの籠った名台詞ですね。

三人とも、ありがとうございました。また何度でも歓迎ですので、名台詞が見つかれば送ってください。

それでは無印編第二十一話、始まります。

無印編　第二十一話　時空管理局

Ｓｉｄｅ燎

時の庭園から戻ってきた俺は玄関を開けて家に入る。

「ただいまー」

ドタ、ドタ、ドタ

「リョウ！」

俺の声に反応したのか狼の姿のアルフが駆け寄ってきた。

「おう、アルフ。ただいま」

俺は軽くアルフに言う。

「あ、お、おかえり・・・ってそうじゃなくて！」

アルフは慌てた様子で矢継ぎ早に聞いて来た。

「大丈夫だったかい！？怪我してない！？あの鬼ババアになにか酷いことされ・・・フギャ！？」

と、いきなりアルフの質問が遮られた。見てみるとエヴァが後ろからアルフにかかと落としを食らわせていた。うわぁ、痛そ～。

「ええい、やかましいっ！ギャンギャン、ギャンギャン喚くな。犬っころ！」

不機嫌な様子でアルフを罵るエヴァ。なんかすごい様になってる。

「ううう～・・・だ、だってさあ」

頭を抑えて、涙声で呻くアルフ。たんこぶできてなきゃいいけど。

「そもそも、僚があの程度の相手に後れを取るなど、万が一にもありえんわっ！私たちの主を見くびるな。お前如きに心配されるほど僚はヤワではないっ！！」

エヴァ・・・信頼してくれるのは嬉しいけど、あんまアルフをいじめんなよ？

「ううう・・・ご、ごめん、リョウ」

エヴァの言うこと真に受けて謝るアルフ。

「いや、いいって。心配してくれてありがとな。アルフ」

俺は笑ってアルフにお礼を言う。この様子を見るにかなり心配してくれてたみたいだし。

「えっ、い、いやその、え～っと・・・・あ、あううう／／／／」

なんか、アルフの頭からプシュゥゥゥっと湯気が出てるように見えるんだが。

「あ～、そ、それでフェイトは？」

なんとなく変な空気になってきたので、心配だったフェイトのことをエヴァに訊いた。

「あの小娘なら、ヴィルヘルミナが治療し終えて、居間に寝かせている。傷の数は多かったが命にかかわるようなものはなかったそうだ」

エヴァがフェイトの容体を説明してくれる。それを聞いて俺は安心した。恐らくプレシアは無意識に手加減していたのかもな。

「そっか、よかった。とりあえず、フェイトの様子を見よう」

そういって俺は居間に向かう。

「そうだな。おい、行くぞ犬っころ。いつまでも悶えてるな」

ガシッ

エヴァはおもむろにアルフの尻尾を掴んで引っ張る。

「うえっ！？ちょ、ちょっと待って。そんないきなり、尻尾を引っ張らないでって！い、痛い痛い痛い！！し、尻尾取れる、取れる！と～～れ～～る～～！！」

悲鳴を上げながらズルズルとエヴァに引きずられていくアルフ。そんな光景を見て俺はアルフに同情した。なんかエヴァの方も、いいイビリ相手ができたって思ってるような感じだし。エヴァに目をつけられるなんて、可哀そうに。

まあ、あんまりにもアレなときは俺が助ければいいっか。そう思うことにして、俺は二人の後を追った。

◇◇◇

「気にするなよ。そもそも巻き込まれたんじゃなくて、自分から首を突っ込んだんだし」

俺の言葉にヴィルヘルミナとエヴァがうんうんと頷く。

「でも、どうしてだい？あんた達とっちゃ敵のはずのあたし達をどうして・・・」

「助けるのかって？」

「・・・・・（コクッ）」

俺の問い掛けにアルフは小さく首を縦に振る。

俺は頭を掻きながら答える。

「別に俺たちはジュエルシードを必要としてるわけじゃないからなあ。俺となのははこの町から物騒な物がなくなってくれればそれでいいんだよ。それに・・・・・」

「それに・・・・・なんだい？」

「それに・・・俺にはこいつが悪人には見えないからな」

その言葉にアルフは目を丸くする。

「どうして・・・・そう思うんだい？」

「目だよ。俺は相手の目を見ればそいつが良い奴なのか、それとも

性根の腐った外道なのかが大体わかるんだ。こいつの目は、少なくとも悪党がするような目じゃなかった。だからさ」

本当のことを言うわけにはいかないからな。とりあえずこう言っておこう。

「・・・・・・・そっか」

どうやら納得してくれたようだ。それにどこか嬉しげな様子だ。ご主人様を褒められて嬉しいんだろうな。

それから三十分ぐらいして、唐突にアルフがフェイトを連れて家に帰ると言い出したのだ。フェイトが目覚めるまで、いてもいいと言ったのだが、あまり長居してこれ以上迷惑をかけたくないそうだ。

そんなの俺達はべつに気にしないんがな。そんなこんなで、アルフはフェイトをお姫様抱っこして庭に出た。

「本当にありがとう。フェイトが目覚めたら、ちゃんと言っておくよ」

微笑みながらお礼を口にするアルフ。

「別にいいさ。フェイトには、たまにはちゃんと休むように言っとけ。頑張りすぎは、体に毒だからな」

「ああ、分かった」

「あ、それとさ」

俺は思い出したことを付け加える。

「ん？なんだい？」

「お前たちを助けたこと、なのはたちには内緒にしてくれないか？もしバレたら、後が色々面倒だからさ」

下手したら、魔王様が降臨するかもしれないし。

「ああ、それもそうだね。いいよ、分かった。フェイトにも言っておくよ」

アルフは快く了承してくれた。

「ヴィルヘルミナとエヴァも、ありがとうね」

「お気になさらず」

『礼謝無用』

「私たちは燎が望んだことに手を貸しただけだ」

アルフの感謝に二人はそれぞれに返す。

「それじゃあリョウ、またねってのも変かな？」

「いいんじゃないか。またな、アルフ」

少し困った顔をするアルフに俺は軽く返した。

「うん。またね、リョウ」

アルフも笑って応える。そしてアルフの足元に魔法陣が浮かび上がり、輝きを増していく。眩い閃光が俺たちの視界を覆い、それが消えた後には二人の姿はなかった。

俺は二人がいた場所を見たまま、呟いた。

「せめて夢の中では、母との安らかな時間を過ごせることを」

◇◇◇

だが、まあなんとかなるか。

そんなことを考えてるうちに、反応場所が見えてきた。

「燎くん、あそこ！」

なのはが指を差す。その先には巨大化した木のようなものとフェイトとアルフが交戦していた。

触手のように動く、木の根っこと木が張る障壁のせいで攻めあぐねているようだ。俺となのははお互いに顔を見て頷きあい、速度を上げる。

「生意気にバリアまで張るのかい！」

イラついた声で叫ぶアルフ。

俺となのはは、木の化け物の眼前に降りる。

「あ、あんたたち！？」

「っ！？」

俺たちの姿を見たフェイトとアルフがこちらを見る。

「話は後だ。今はこの化け物を片付けるぞ！」

俺の指示に、全員が頷く。よし。

「俺があの邪魔な根っことバリアを破る。そしたらお前らは全力の

砲撃を叩き込め！！」

「「うん！！」」

なのはとフェイトの返事を聞いて俺は化け物に向かって走り出す。

ゴアッ！！

すぐさま根っこが俺を捕えようと、群がってくる。しかし俺は慌てることなく刀を抜く。

「邪魔だ」

シュキンッ・・・・・ズバアッッッ！！！

俺は眼前に迫っていた五本の根っこを一撃で切り裂いた。いや違う。正確には、五つの斬撃を一度に放ち根っこを薙ぎ払ったのだ。

これはある一人の剣豪が使っていた技。空を飛ぶ燕を斬るために編み出された剣技。それはこの世の理を歪ませる魔法の一つにして、一つの極みの技。

多重次元屈折現象（キシュアゼルレッチ）

秘剣　燕返し。

俺のはそれを独自に改良した技だ。今の俺では最大で、七つが限界だ。しかし、今はそれで充分だ。根っこを切り落とされた木の怪物はわずかだが動きを鈍らせる。その隙に俺は次の技を放たんと剣を下段に構える。

「・・・風よ」

俺は剣に風を収束させていく。それはやがて渦を巻き、一つの小さな竜巻へと姿を変える。

「荒れ狂え！！」

そして俺は咆吼と共に、破城の一撃を解き放つ。

「風王鉄槌（ストライク・エア）！！！」

ドッ・・・・・ゴアアアアアアアアアアアッッッッ！！！！！

下段から打ち上げられるように放たれた轟風の破城槌は木の張ったバリアなど易々と砕きそのまま木の本体までも一刀両断してしまった。それを見た俺は木に背を向けながら、言い放つ。

「我が一撃は破城の鉄槌。立ちはだかるならば、その守りごと両断するのみだ！」

俺はすでに砲撃の準備を終えている白と黒の魔導師に叫ぶ。

「今だ！撃ち抜け！！」

それを聞いた二人の魔導師は、タイミングを決めていたわけでもないのに、渾身の一撃をまったく同時に放つ。

「ディバイイイィィィィン」

「サンダーアアアァァァァ」

「バスターアアアアアアアアアアアア！！！」

「スマッシャアアアアアアアアアアアア！！！」

ドオオオオォォォォォォォォォォンンンンンンンンッッッッッ！！！！！！

桜色の砲撃と金色の雷が巨木を打ち抜き、ジュエルシードを剥き出しにした。間髪入れず、なのはとフェイトは封印の呪文を紡ぐ。

「リリカル・マジカル」

「ジュエルシード」

「「封印！！」」

『『シーリング』』

キィィィィィイイイインンンッッッ

封印完了。俺は封印されたジュエルシードを拾い、二人に言う。

「それじゃあ、すでに恒例になってる、ジュエルシード争奪戦といこうか。ジュエルシードはこの通り俺が預かっておく。勝った方にこれと前のジュエルシードを渡すってことで、二人とも異存は？」

二人は無言で首を横に振り、否を示す。そして改めて向き合う。

「ジュエルシードに衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「そうだね。前みたいなことになっちゃったら、レイジング・ハートもフェイトちゃんのバルディッシュも可哀そうだもんね」

いやなのは、そういう問題か？別にデバイスを心配するのはいいことだが。

そんなことを思っている間に、二人の間に張り詰めた空気が流れる。

「でも、譲れないから」

硬い声で言うフェイト。

「私はフェイトちゃんとお話ししたいだけなんだけどな」

少し寂しげな表情のなのは。

互いの愛機を構えて、いつでも動けるように集中する。・・・・・・ってあれ？たしかここで・・・・

「「！！」」

ダッ！！

二人はまたも同時に動いたが・・・・しかし、

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる！！」

突如現れた、黒いバリアジャケットを着た黒髪の少年に制止させられる。

現れやがったな。ＫＹ執務官。

俺は目を鋭くさせ突然の乱入者を睨んだ。

無印編　第二十一話　時空管理局（後書き）

感想、意見、悪いところの訂正、いつでもお送りください。お待ちしております。

名台詞のほうもよろしくお願いします。

では次回をお楽しみに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4122x/

魔法少女リリカルなのは〜運命を変えし転生者〜

2012年1月15日01時45分発行